

これがありふれてたら良かったのに

紅しげる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界中に広まった《チブセル症候群》と言う、極一部の人にのみ感染した主人公。《チブセル症候群》にかかった人々の一部は突如、人は程遠い姿や大きさに変わり、人々を襲うようになった。主人公もその一人になる………はずだった――

※オリ主のヒロイン集←

- ・オリヒロイン（一人目）
- ・オリヒロイン（二人目）
- ・雫
- ・香織
- ・鈴
- ・恵里
- ・優花
- ・愛子
- ・リリイ
- ・ユエ
- ・シア
- ・ミレディ

- ・テイオ
 - ・レミア
 - ・ノイント
 - ・ガッツ星人
 - ・マガバツサー
 - ・マガオロチ
- ※入ってなかったタグ
- ・オリジナル怪獣

目次

チブセル

チブセル症候群

1

はじめまして

4

弓道？、始めます

6

剣道始めたら再会した

8

初めての過ち

11

母さん。女の子拾った。

16

俺はどうすればいいですか？

19

原作開始

原作開始するから主人公達の設定を公開（完全じゃないよ）

22

下の魔法陣はなんですか？

25

感染者を増やした意味ってなんですか？

29

異世界ってなんですか？

32

ステータスってなんですか？

37

聖剣よりも強い剣ってなんですか？

41

セキユリテイってなんですか？

45

夢ってなんですか？

48

オルクス大迷宮ってなんですか？

53

解放ってなんですか？

59

謀反ってなんですか？

64

面白そうな場所ってなんですか？ (1)

73

面白そうな場所ってなんですか？ (2)

78

面白そうな場所ってなんですか？ (終)

84

裏切られたってなんですか。

頭の花ってなんですか？

寄生ってなんですか？

危機ってなんですか？

ガーディアンってなんですか？

真実ってなんですか？

新しい種族ってなんですか？

閑話。勇者と愉快じゃない仲間

旅立つってなんですか？

ライセン大迷宮

兎☆耳

奴☆隸

樹☆海

追☆放

鍛☆錬

成☆長

失☆敗

大☆樹

変☆人

混☆浴

兇☆見

不☆正

戦☆闘

回☆想

変☆化

88

92

96

98

100

105

109

112

115

118

122

125

128

133

135

137

140

143

146

150

153

156

160

164

魔族襲来

元真なる神の使徒

商隊護衛

ランクは青

搜索依頼

再会

搜索

黒竜

ウル防衛作戦！

防衛

光と闇VS光の影

零斗？

約束

無事帰還

デート♪デート♪byシア

零斗は親です？

スフィアレッドキング？俺達の敵じゃねえな

閑話。《変威獣》と怪獣、その違いもわからない

閑話。魔族襲来

閑話。恵里の覚悟

閑話。お兄ちゃん早く来て

久しぶりの《オルクス大迷宮》

VSデストロイジエノ

ハロウィン限定の番外編！

VSジエノ怪獣（前編）

251

248

243

238

236

232

228

225

222

218

214

210

207

202

199

195

192

188

185

178

176

173

170

167

V S ジ エ ノ 怪 獣 (中 編)
V S ジ エ ノ 怪 獣 (後 編)
V S ジ エ ノ 怪 獣 の そ の 後

260 256 254

チブセル チブセル症候群

グルアアアアアアアアアツ

「があツ!!?」

強制解除された俺は数回跳ねながら転がって止まった。俺は立ち上がり、目の前の敵を見た。

グルアアアアアアアアアツ

「かはツ…」

「夢咲!今すぐもどれ!!」

後ろから団長の声がした。だが、俺にはその声が聞こえなかった。

「ハハハ…お前らとの約束…破っちゃまったかもな……」

俺は《オーブリング》を持った。そして、ゾフィーのカードを読み込んだ。

みんなを守るために……力を貸せ!!——

ベリアル!!!

20XX年、俺が生まれてからすぐに《チブセル症候群》と呼ばれる感染症？が発見された。感染者は両手で数えられるほど少なかった。しかし、ある日の《チブセル症候群》の感染者が突然暴れだし、人々や街を襲い始めた。警察や自衛隊も出動し、感染者の鎮静に成功。その後も一部の感染者はそれぞれ異なる姿になり、暴れ、人々を襲った。全ての感染者が凶暴になるのではなかった。暴れた感染者は全員20歳を超えていた。そのため、未成年の感染者は暴れる危険性がないとされた。

そして俺が3歳の誕生日のことだった。俺は《チブセル症候群》に感染した。

両親は俺を優しく育ててくれた。だが、《チブセル症候群》を持つ子供を育てていると言うことで、地域から迫害され、そして事故で死んでしまった。両親が死んでしまった。

そして、《チブセル症候群》と言うことで、祖父も祖母、叔父も叔母も誰も俺を引き取ろうとしなかった。そのため、俺は孤児院へと送られた。

そしてその孤児院で住むことになった。その子供は全員《チブセル症候群》の感染者だった。

あれから数年、俺は孤児院の子達と接するうちに、いつの間にか孤児院の中で頼られることが多くなった。

「れいとーこれよんで!!」

呼ばれて振り返ると、俺と唯一の同い年の姉妹が俺に話しかけてきた。姉妹の姉の神咲冬花は活発だけど運動があまりできない上に天然な女の子だ。妹の神咲桜は姉とは逆にしっかりしていて、あんまり笑顔を見せないし、あんまり口を開かない。そして運動神経と頭がいい。俺はこの姉妹からよく頼られる。

今日も冬花が絵本を持ってきた。俺達はもう5歳なので、絵本は少

し読める。ただ、俺達の親が忙しいときは俺が読んでいる。俺らよりも上の年齢の人達は成人となって出ていってしまったため、俺が読むことになった。と言っても、俺ら3人しかいないため、そこまで大変ではない。

「どうか、ひとりでよめるようになったほうがいいぞ」

「うえ?!で、でもわたしはれいとがいいの!ね、さくら!」

そう言っ、冬花が桜を見た。桜は頷いて、俺の膝の上に冬花、その膝の上に桜が座って3人で読むことになった。

はじめまして

俺達は小学校に入学した。冬花と桜とクラスは同じだったけど席は遠かった。入学する前から少しずつ勉強していたため、クラスでは頭がいい方に入っていた。そして、入学してから数ヶ月が過ぎようとしていた。

「零斗…これ、なんて読むの？」

「んあ…？これはー……」

「………零斗、これできた。褒めて」

「鶴を作ったのか…凄いな！」

「桜凄い！私も作る！」

桜が折り紙で鶴を作ったのを見て、冬花も折り紙を持って俺のところへと来た。

「えつとここを…って、もうすぐ授業始まる！」

「ほんとだ…冬花、俺が片付けとくから準備しに行つていいよ」

「ありがとう零斗！」

そう言つて、冬花が走つて授業の準備を始めた。それを見て、俺は一人で片付けをしようとしたが、桜も手伝ってくれた。俺が桜の方を見ると、少し笑っていた。

「……私は冬花と違ってちゃんと準備できてる」

「ありがとう」

そして桜の手伝いもあつて、チャイムが鳴る前に片付けが終わり、無事に授業に入れた。

その日の学校が終わり、3人で家に帰ろうとしていたときだった。

《誰か》が校舎裏の方へと走つていったのが見えた。

「ねえねえ零斗、今誰か通らなかつた？」

「俺も見えた。桜は？」

桜に聞くと桜も頷いた。俺達はその《誰か》を追って校舎裏の方へと行つた。そこには数名の女の子が一人の女の子に水をかけたりしてイジメていた。それを見た冬花と桜がイジメをしている女の子達

とイジメられている女の子の間に立って、イジメられている女の子を庇うように立った。俺も桜達と一緒に女の子を守るように立った。

「イジメなんて駄目だよ！」

「な、なによ……って、《チブセル》達だ！感染しちゃーう」

どうやら、俺達が《チブセル症候群》の孤児院に住んでいることを知っているようだ。女子達はそう言って、校門の方へと走っていった。

「大丈夫か？」

「……どうして……？……なんで助けたの……？」

俺が聞くと、女の子がそう言った。

「なんでって……助けるのに理由なんているのか？」

「……?!」

「……あー……それとも、さっきイツらが俺達のことを《チブセル症候群》って言ったから、何かされるとか思った？」

「そ、そんなこと……ないよ」

口ではそう言っているけど、心の何処かでは違うことを思っているのだろう。

「あー零斗、今日は大事な用事があるって先生親が言ってなかったっけ?!」

「……もうすぐで約束の時間になる」

「うわ、そうじゃん………えっと……名前わからないけど、またな！」

俺達はそう言って走って家に帰った。家に帰ったら、先生が鬼の形相で俺達の帰りを待っていた。その翌日、桜と俺は剣道を習うことになり、近くの八重樫道場に通うことになった。冬花は弓道を習うことを推奨されたが、何故か俺もいないと言われ、俺は剣道と弓道をするようになった。

弓道?、始めます

弓道を習うことになった。先生は弓道をやっていたらしく、色々なことを教えてくれた。

「それじゃあ、実際に素引きをしてみて」

そう言われて矢を番えずに弓を引いた。冬花も同じように矢を番えずに引いた。

「できたー!」

「…まあ、子供に本物を渡すわけにはいかないから…おもちゃだけだね」

そう言われて、おもちゃの矢を渡された。今度は矢ありで弓を引くようだ。俺は難無く弓を引き、的を射た。俺が射った矢は的の中心にあたった。だけど、冬花の矢は少し右にズレていた。

「あう…」

「二人とも上手だね!それじゃ、子供用の玩具じゃない、競技で使う弓と矢でやってみよっか!」

そう言って先生が弓と矢を持ってきた。持ってきた弓を俺達に渡してきた。俺は弓を引こうとしたが、弦が硬くて引けなかった。冬花も同じく硬くて引けずにいた。

「アハハ、それはまだ引けないか」

「先生、これ大人用じゃね?」

「え、あれ?!本当だ!」

「もお!先生、私達でも使えるのものにして!」

「アハハハ、ごめんね…今はそれしかないから、また今度ね」

「仕方ないか…冬花、今はこれで練習しよう」

「はい…」

先生が渡してくれた玩具の弓を少し改造して、使うしかない。明日、道場に行くため、今日は暇だった。そのため、少しでも上手くなるようにと射っていた。

「……って、零斗はよく続いているな、冬花は腕がつって動けなくなってるのに…」

「今日は暇だから、ずっと射ってる。冬花は運動しないからな」

「うう…桜あゝ、今度一緒に運動してー」

「……冬花はそのくらいがいいよ…ね、零斗」

「まあ、冬花は運動しないって感じだもんな」

「零斗は運動できる人と運動できない人、どっちが好き？」

冬花にそう言われて少し考えた。運動できるかできないか、そう言われると難しい。俺は自分の好きなタイプはわからない。だけど、運動は関係ないだろう。

「うくん……運動はできなくてもでもいいかな…」

「……零斗は好きな子のタイプってあるの？」

「今はわからないな」

「私と桜ならどっち？」

冬花にそう言われて、二人を交互に見た。二人は首を傾げて俺を見てくる。二人を見ていると、少し

「どっちだろうな」

「ええ…!!」

「……教えてくれないの？」

「まだ教えねえよー」

俺は二人には言わないほうがいいと思った。なにか、今までの関係が崩れてしまいそうな感じがした。俺はその後も弓を射った。その時も、二人が話しかけてきて、俺の好きなタイプを聞いてきた。俺が好きなタイプを言える日が来るのだろうか。

剣道始めたら再会した

弓道をし始めた翌日。俺は先生と桜と冬花と一緒に八重樫道場へ
と行った。先生が事前に連絡して、俺と桜が入る手続きを行ってくれ
たそうだった。

「さ、付いたよ」

「……先生「ちよ、みんななんでいつも先生って呼ぶのさ！一度くらい
お母さんって呼んでくれない?!」…じゃあ…お母さん、私と零斗はこ
こ通えるの?」

「大丈夫、二人ならいけるよ!」

「そうそう、冬花の言うとおり二人ならいけるよ」

そう言われて俺達は道場の中へと入っていった。入ってすぐに、ど
れだけできるのか知るために、道場に通っている同い年の生徒と1戦
することになった。そして、待っていると一人の女子が入ってきた。

「あ…あの時の!」

「!?…あ!」

「え、知り合いなの?」

「ム…? 雫、彼らと知り合いなのか?」

「えあ、えつと「あ、この前イジメられてた!」あ…」

「……冬花」

雫と呼ばれる彼女は何かを隠したいようだったが、冬花はなんの躊
躇もなく言った

「イジメられていた…?…雫、学校で何があった?」

「いや、あのお…」

雫は何か言いたげな風に俺と桜を見た。

「冬花、とりあえず先生と一緒に道場の外を見てこい」

「はい!お母さん、行こうよ!」

「アハハ…八重樫さん、その話はあとにして、外を案内してくれない?
審判は別の人に任せてさ」

「…雫、先程の話は後でさせてもらう」

「…はい」

先生達が部屋を出ると、雫が少し涙目になっていた。俺達は雫に近づいてきた、背中を擦った。

「……冬花……うちの姉がごめんなさい」

「だ、大丈夫……怒られるのかな……」

「なんで怒られるんだ？」

「えっと……いつも学校楽しいって嘘を付いちやってるから……」

「それはちゃんと謝ったほうがいいぞ」

そして、今度は雫の父親らしき人物が入ってきて、入門テストが始まった。始まったのはいいけど、雫はさっきのことで頭がいつぱいのように、あんまり試合に集中できなかったようで、初心者俺と桜に普通に負けた。雫が万全じゃないため、また今度やると最初は思っていたが、予想外のことが起きた。

「ほお……万全ではないとはいえ、雫を負かすとは……同い年の中ではかなり上の雫より上……中々いいではないか」

「ありがとうございますいま」ちなみに雫がイジメられたって話は本当かい？」……」……ああーつとですね」

どこから聞いていたのだろうか。そこへ先生達と女性が入ってきて、計7人で話をするようになった。女性は雫の母親らしい。

「……雫よ。学校でイジメがあったとは本当か？何故黙っていた？」

「……えっと」

雫によれば、女の子なのに男の子のように過ごしていたら、イジメられたとのことだった。それだけでイジメが発生する小学一年生が少し怖くなった。

「そんなことが……夢咲、神咲。雫を助けてくれてありがとう」

「……いえいえ、そんな……たまたま通りかかっただけなので……ね、零斗」

「ん？まあ……そうだな……」

イジメの止め方を聞かれたら、《チブセル症候群》ということがバレてしまう。

《チブセル症候群》は二十歳になれば暴れ出す可能性があるだけで社会などで多く差別を受ける。《チブセル症候群》だとわかれば習い事

を無理矢理やめさせられ、最初に言わなかったから罰金を取られる人がいると前にニュースでもやっていた。

そこで俺は少し疑問に思った。先生は俺達が《チブセル症候群》だと言うことを伏せていれば罰金を取られる可能性がある。

「ん？どうしたんだ？」

「いや…ちよつと先生、こっち来て」

「え、まだ話の「いいから」ア、ハイ」

俺は先生を廊下まで引っ張った。

「ちよ、どうしたの？」

「俺達が《チブセル症候群》ってことは言ったのか？言わなかったら…あんだ、罰金を科せられるぞ？」

「ああ…言ってなかったつけ？《チブセル症候群》でも大丈夫って言われたから、ここにしたんだよ」

「なるほど」

「あと、冬花と桜は呼んでくれるのに零斗は私のことお母さんって言わないんだね!？」

「……………」

「無視しないでよ!？」

そんな先生を横目に部屋に戻ると、冬花と桜と雫が普通に仲良くなっていた。

「え！雫は隣のクラスの子なの?!」

「えつと…うん」

「…………イジメがあつたらいつでも言いに来て」

「うん…!」

俺と先生が話しているうち何があつたのだろうか。雫の両親も微笑ましい顔をしていた。

初めての過ち

あれから何事もなく俺達は小学校を卒業し、中学生になった。そして中学三年生になり、6月に入った。今日は先生の誕生日、そんな日に事件は起きた。

「……………で、冬花…言いたいことある?」

「あう…」

現在キッチンには焦げたケーキや潰れた卵、そして腕を組んで見下すように座っている桜と、正座をして見下されている冬花がいた。

「うわあ…」

「惹かないで?!」

あまりにもヒドい有様で、あまり怒らない桜が激怒していた。

「冬花、レシピ本はどうした?」

「……………あの鍋の中を見て」

「は? 鍋の中?」

桜にそう言われて、鍋の中を見た。そこにはレシピ本が入っていた。しかも、ちょっと味付けしようとしたのか、こしょうがかけられていた。俺はあまりにも信じられずに冬花を見た。すると、冬花が俺の視線を感じ取り、そっぽを向いた。

「……………冬花、鍋の中にレシピ本がある理由を教えてくださいるか?」

「……………手が滑って落ちちゃって、これでだし取れないかなって…」

「……………はあ…今度からは私が作るから、冬花は勉強しに自室で待ってて」

「あ、え、その…えっと…ごめんなさい」

冬花がそう言って自室へと行った。その後、俺らはキッチンの掃除を軽くして、ケーキを作り始めた。だが、ここでも事件が起きた。

「……………材料が足りない」

冬花が色々やらかしたせいで、冷蔵庫などの中身がほぼ消えていた。

「えええー…………俺、買ってくる」

「……………財布はいつもの場所にある」

「わかった」

財布を持ってスーパーへと走っていった。そして必要な物を買ひ、急いで帰宅した。帰ってきてすぐに桜がケーキを作り始めた。その間に俺は部屋の飾り付けをした。そして、無事に先生が帰ってくる前にケーキができた。

「ただい」「誕生日おめでとう!!」「……………へ？」

先生が帰ってきて、クラッカーを鳴らした。先生は呆気にとられて固まっていた。

「……………あ、今日って私の誕生日じゃん!!?みんな覚えててくれたんだー!しかも、このケーキ美味しそう!」

「んじゃ、ケーキを皿に別けて食べ——」

俺がケーキを分けて食べようとしたときだった。屋根が崩れて、先生が下敷きになってしまった。それと同時に、《チブセル症候群》の暴走のサイレンが鳴り響いた。そして、崩れた屋根から《チブセル症候群》で変わり果てた巨大な生物、《変威獣》^{かいしゅう}の姿が見えた。

「「母さん!!」」

桜と冬花が瓦礫に埋もれてしまった先生を助けようとした。俺も家にあつたボールなどで瓦礫を退かそうとした。

『ギエハハハハ!!』

《変威獣》の尻尾が先生の上の瓦礫を叩きつけた。それを見た俺の頭の中が真っ白になった。

「あ……………」

その時だった。《変威獣》が次に冬花と桜を襲おう足を振り上げたときだった。冬花と桜が捕まろうとしたときだった。

俺様を使え

そんな声があった。声があったのと同時に、目の前にカードのような物と、短剣のような物が現れた。俺は考えるよりも先に、その2つを手にとった。すると、頭痛と共に頭の中に色々な情報が入っていった。色々な巨人達の記憶、そしてロボットのような巨人、《変威獣》とは違う怪獣達の記憶、そして宇宙人の記憶。

「今の記憶は…」

頭痛が収まると、カードが変化して、一つの人形へと変わった。俺はその人形を短剣で刺した。すると、体の底から力が湧いてきたのと同時に、巨大化した。巨大化と同時に、声が聞こえた。

『ほお…俺様だけではなく、《ウルトラマン》共と怪獣共の力を取り込んだか…面白い』

誰だよ、誰なんだよお前は！

『俺様か？俺様はベリアル、わかるだろ？《俺様の因子》や《怪獣王の細胞》にかかって、俺様や他のウルトラマン共、怪獣の記憶を見ただろ？』

記憶…って、さっきのあれか！でも、どういうことだ？お前の因子？怪獣王の細胞にかかった？俺は《チブセル症候群》以外にはないも…

俺がそう言っていると、ベリアルは笑い始めた。

『わかっているじゃねえか…人間共が呼ぶ《チブセル》とやら…それが俺様や怪獣王達の細胞とかを持った奴らのことだ。今までも持ったやつはいたが…殆どが制御出来ずに怪獣へと成り果てた』

どうやら、《チブセル症候群》の原因がベリアルの因子や怪獣王とやら達の細胞を制御できなかったことのようなのだ。

『…喜べ、お前が最初の適合者『ギエハハハハハ』…そういうば、目の前に成り果てた人間がいたな』

『ギエハハハハ『うるせえー！ギエハハハハハハ!!』』

『おい人間、話は後です。この怪獣モドキを倒せ』

んな急に言われても…つか、あれ人間だろ？戻せねえのか？『生きたままは無理だ。殺せば人間に戻る。もちろん人間は死ぬがな』

ふざけんな！

『いいからやれ！やらねえなら俺様が殺る！』

そう言ってベリアルが《変威獣》を蹴り飛ばした。すると、《変威獣》が数百メートル先まで跳んでいった。

『その巨体は見かけだけか？』

『ギエハハハハ!!』

《変威獣》が尻尾が発光した。尻尾が発光すると、爪も光り始めた。

お、おい！なんか技みたいなの出そうとしてるぞ?! どうするんだよ!!

『一々喋りかけるな!!』

ベリアルが手を空に掲げると、どこからか黒い武器が降ってきた。それをベリアルが取る。

お、おお…なんだこの武器は…

『《ギガバトルナイザー》だ。百体の怪獣を操られる。だが…何故か怪獣モドキは操れない』

そんな情報はいらねえんだよ！

俺がそう言うと、《変威獣》が爪から斬撃のような物を飛ばしてきた。ベリアルが《ギガバトルナイザー》を振り、その斬撃を壊す。

『俺様の因子で雑魚怪獣モドキになりやがって…』

そう言うと、ベリアルが《ギガバトルナイザー》を消した。そして、右手に赤黒いエネルギーを溜め始めた。

おいおい待って待て！何をやる気だ?!

『黙って見とけ』

《変威獣》に一瞬で近づき、ベリアルの右手が《変威獣》の体を貫通した。爪には《変威獣》の血らしき物がついていた。

あ…ああ…

『どうだ？最初の人殺しの気分はッ?!』

俺は人を殺してしまった。野放しにすれば国に殺されていただろう。だが、国が動く前に大勢の死者が出ていたかもしれない。

俺は…どうすればよかったのだろうか…

変身を解除して元いた場所に戻ると、冬花と桜が泣いていた。冬花と桜の前に母さんが横たわっていた

「……………零斗、お母さんが…」

「ッ?!」

桜に言われ、近づいて母さんの顔を見た。頭や色々なところから血が出ており、普通に考えて出血多量で死んでいる。

「そんな…母さん「呼んだ？」ツ?!」

「いやあ、ようやく零斗に母さんって呼ばれたよ」

目の前の母さんが目を開けて俺を見ていた。突然なことに驚き、冬花と桜を抱き抱えて、母さんから離れた。

「て、テメエ何もんだ!」

「え、ヒドい…君らのお母さんの《冬咲 夢花》だよ!!冬花、桜!ちやんと説明してあげて!」

「……………零斗、実は——」

桜いわく、俺が巨人になつて《変威獣》と戦っているとときに瓦礫の中から母さんが自力で出てきたらしい。そして、せっかくなら俺を驚かせようと言うことになつたらしい。ちなみに、瓦礫の下敷きになつたときから無事だつたらしい。

「……………んなことしてる暇あつたら、避難してくれよ……………こっちは急に巨人になるし、《変威獣》と戦わされるし、お前らが無事か心配で助けに行きたいけど、体の所有権奪われて行けないし……………ガチで心配だつたんだぞ」

「……………ごめんさい……………」

今日、俺は謎の力を受け継ぎ、《変威獣》と戦い、人を殺してしまつた。そして、その日から俺の能力が大幅に上がった。そして、この日から、俺はベリアルや巨人達、怪獣達の力を使わないと決めた。特にベリアルの力を戒めとして自分の中で封印することにした。

母さん。女の子拾った。

《変威獣》と戦った翌日、家は崩壊寸前、桜が作ったケーキは何故か無事、壊れたものは屋根だけだった。

朝のニュースによれば先日の《変威獣》は仕事場のストレスが原因だったらしい。《変威獣》が倒されたことで、また新たな《チブセル症候群》が見つかったらしい。ちなみに、巨人は未だに謎のままらしい。

家の修復が終わるまで、雫の家で過ごすことになった。雫に昨日のことを全て話した。目を見開いて驚いていた。

「それにしても…零斗が巨人になるなんて…」

「……………どうして巨人になれたの？」

「俺もさっぱりだ。わかるとしたら、この力も《変威獣》と同じかもつてことだ…」

「……………その力は私達でも使えるの？」

「わからん。使えたらいいな」

「あ、そうだ。その力を受け継いで、どのくらい強くなったの？」

冬花にそう言われて、限界がどこまでなのか俺も知らなかった。

「……………零斗、その力を使って私と戦って「駄目だ」……………どうして？」

「この力はおしものときに使いたい。それにこれは危険すぎる。桜、お前に怪我をしてほしくない。冬花も、雫もだ。あと、できればもう使いたくない」

「桜や冬花が入ってるのはわかるけど、どうして私？」

「俺ら3人の仲良い人だからかな」

「ふ、ふうーん…そうなんだ…あ、近くデパートで買い物しない？ほら、3人の寝間着とか家に置いてきたでしょ？布団が足りないからつて、零斗は端で練るし」

「ああー確かに…零斗なんて部屋の端で座って寝たもんね」

雫と冬花にそう言われた。確かに昨日は部屋の端で寝ていた。寝相が悪い母さんがいないため、枕が飛んでくるなんてこともなかったからよく寝れた。

「それじゃあ、デパートに行こう！」

「「おおー！」」

「お、おおー…」

デパートには母さんが来ることになった。この人何者なのだろうか。

母さん達に待ち合わせ場所に先に行くよう言われたため、待ち合わせ場所の椅子で座って待っていた。

「…近くに良さそうな店はないかな」

みんなを待っている間、スマホで良さげなお店を探していた。

「お、ここなんて良さげ……………」

スマホを見てみると、一人の少女が俺のことを見ていた。服はボロボロ、体のあちこちに見える痣、痩せ細っている体。何か虐待でも受けているのだろうか。

俺が少女のことを見ていると、少女が屋上の方へと走っていった。

「あ、ちよー！」

俺は冬花達の待ち合わせを放って、少女を追いかけた。追いかけて屋上に行くと、今にも飛び降りそうな少女がいた。

「ツ!!」

少女が俺のことを見て、後ろへと下がっていった。だが、少女は気づいていなかったが、その先は何もなかった。

俺は少し迷ったが、怪獣達の力を使うことにした。触手を伸ばして少女を掴んだ。

「な、なにをするの…！」

「お前が落ちそうになったから引っ張っただけだ！」

そう言う少女がさつきまで自身がいたであろう場所を見た。

「あ、ありがとう…」

「いいって…んで、なんでお前はここにいるわけ？…親は？」

俺がそう聞くと、少女の体が震え始めた。

「お、お母さんも…お、お父さんも…もういない……………私が…《チブセル症候群》になったから……………もう家族じゃない…って」

「……………そうか…大変だったな」

「貴方に何が「俺も《チブセル症候群》だから家族がいなくなる気持ち、わかるぞ」!!あ、貴方も《チブセル症候群》…なの？」

「ああ…つと、そうだ。俺のところに来ないか?《チブセル症候群》なら、「いいよ」ほら、母さんもいいって……………」

俺の後ろから声が聞こえた。俺がすぐに後ろに振り返ると、頬を膨らませた三人と母さんがいた。

母さん達に少女のことを教えた。

「お名前は?」

「え、恵里…中村恵里…です」

名前は中村恵里で年は俺らと同じだった。

「そっか…それじゃア、これからよろしくね!」

「は、はい」

「それじゃ、恵里も入れてお買い物をしよお!」

そして新しい家族である恵里を入れて、買い物をする事になった。

恵里が入ると言うことで、買うものが当初よりも増えていた。

俺はどうすればいいですか？

恵里を家族として迎え入れ、恵里の名前が《夢咲恵里》になり、家の修復ができてたようで、荷物を纏めて家に帰った。その翌日、また《変威獣》が出たニュースが報道された。しかも《チブセル症候群》が年々増えていき、今では十人以上が《チブセル症候群》になっている。そして、とうとう未成年で《変威獣》になった者が現れた。初の未成年《変威獣》に世界がざわついた。しかも、ある学者によつて《変威獣》になる理由が明かされた。それは《ストレス》だ。今までの《変威獣》も全員ストレスが原因となっていたことが判明した。

「……これで《チブセル》に対しての接し方が変わればいいんだが……」
「そう簡単には変わらないのが世界だよ」

「あれ、冬花と桜は？」

「ん？二人はね、零斗の部屋にいるよ」

「なんで？」

「行ってみればわかるよ」

母さんにそう言われて自室へと行くと俺のベッドに座っている冬花と桜がいた。二人は少し顔を赤らめていた。

「何してるんだ？」

「あ、え、そのお「単刀直入に言うね」桜……！」

桜がベッドから降りて、俺の右手を取ってきた。それに続くように冬花も俺の左手を取った。何をしたいのかわからない俺は二人の顔を交互に見た。

「え、え、なに……」

「零斗……私達はあなたが好きです」

「……………え？」

なぜこうなったのだろうか。《チブセル》同士引き合うのだろうか。
「未成年で《変威獣》になったってニュースあったの知ってるよね？」

「ああ、一緒に見たからな」

「……………今に世の中では《チブセル症候群》を治す方法はない、ほっとけば《変威獣》になる。だから、《変威獣》にならないうちに思いをぶ

つけない。そう思ったの」

「スウー……」

俺は一度水を飲みんで落ち着こうと思ったが、二人に手を掴まれて
いるため身動きできない。

「母さんーこの世界って一夫多妻いいんだっけ？」

「『チブセル症候群』が流行ってから大丈夫になったはずだよ！まあ、
無理だったらこっちでなんとかするから別にいいんだけど」

最後、母さんが何か言っていたけど聞こえなかった。

「えつと…返事は……」

「どっちか一人を取れって言われたら無理だ。冬花と一緒にいたい
し、桜とも一緒にいたい」

「ちなみに、私は？」

そう言つて恵里が後ろから顔を出して言った。

「私もお兄ちゃんのこと好きだよ？」

「俺はどうればいいんだ……」

「付き合えばいいんじゃない？」

「恵里、そう簡単に言うな。それでそうだね、付き合おうねつてなつた
ら俺が女なら誰でもいいみたいなことになるだろう。それに、3人と
付き合つたとして……正妻は誰になるんだ？」

俺が正妻は誰になるのかと聞くと、3人の空気が一気に変わった。

「零斗は誰が正妻がいい？」

「俺は…桜かな」

「……嬉しい／＼／」

「なんでえ?!」

桜は料理や運動もでき、頭も良い。それに、面倒見も良い。

「で、でも…私のほうが胸はあるよ!」

「……冬花、それは喧嘩を売っているってことでいい?」

「私も喧嘩売られた？」

「いや、正直言っただいい?」

「どうぞ」

「胸って邪魔じゃない?」

正直な話、胸が大きいと服を決めるのが難しすぎて嫌だ。

「……………冬花も私達とそこまで変わらない気がするけど」

喧嘩が起こりそうな予感がした俺は、とりあえず3人を抱き寄せた。3人の顔が真っ赤になり、静まった。

「れ、零斗が私よりも先に大人の階段を登っちゃった…」

後ろを見たら母さんがスマホを俺らに方に向けて立っていた。シャッター音が聞こえ、母さんがリビングの方へと行った。俺は3人をベッドに寝かせて、母さんを追いかけた。

「母さん、さっき撮った写真を見せろ！」

「えー…冬花達のスマホのホーム画面にするからちよつと待ってて」

「そんなことしないで」でも、冬花達の喜ぶ顔を見たくない？」……………」

喜ぶ顔は見たい。だが、見たらまた気絶しちやいそうな気がした。

原作開始

原作開始するから主人公達の設定を公開（完全じゃないよ）

主人公

名前：夢咲 零斗

読み：ゆめざき れいと

年齢：18歳

今作のオリジナル主人公。親が事故で死んでしまい、《冬咲夢花》が営んでいる孤児院に引き取られた。《冬咲夢花》の誕生日に現れた《変威獣》から冬花と桜を守ろうとして、《変威獣》と戦える力を手に入れる。その力を使い、《変威獣》を倒した。だが、それと同時に人を殺してしまった。その罪悪感でこの力を緊急時以外使わないと決めた。最初に変身した《ベリアル》を自身の心の底に封印し、再び《ベリアル》を使う日が来ないことを願う。

現時点の恋人：神咲冬花、神咲桜、夢咲恵里（旧：中村恵里）

オリジナルヒロイン・サブ主人公

名前：神咲 冬花

読み：かんざき とうか

年齢：18歳

今作のオリジナルヒロインの一人、そして今作のもう一人の主人公。活発だけど運動があまりできない。そしてたまに天然。料理をしようとして、失敗して桜と零斗に怒られる。稀に成功する。成功すれば、高級料理店で出されてもおかしくないほどの料理ができる。

物心付く前に両親に捨てられ、《冬咲夢花》に拾われた。自分達を守るために《変威獣》と戦った《夢咲 零斗》に惚れ、姉妹揃って告白。そして、この姉妹には《冬咲夢花》でも知らないある秘密がある。

ちなみに、自分の胸は桜よりも大きいと思っているが、同じである。

オリジナルヒロイン・サブ主人公

名前：神咲 桜

読み：かんざき さくら

年齢：18歳

今作のオリジナルヒロインの一人、そして今作のもう一人の主人公。姉の《神咲 冬花》と真反対で運動もでき、勉強もでき、料理もできる。50M走を7秒台で走り切った記録を出すだけでなく、跳び箱の20段を跳び、ニユースになるほどだった。ちなみにこれ全て中学生になる前の話である。

物心付く前に両親に捨てられ、《冬咲夢花》に拾われた。自分達を守るために《変威獣》と戦った《夢咲 零斗》に惚れ、姉妹揃って告白。この姉妹には《冬咲 夢花》でも知らない秘密がある

名前：夢咲 恵里（旧：中村 恵里）

読み：ゆめざき えり（旧：なかむら えり）

年齢：18歳

今作のヒロインの一人。幼い時に父親が亡くなり、その日から変わってしまった母親に虐待され、《チブセル症候群》に感染したら捨てられた。デパートで追ってきた零斗に驚き、逃げようとして落ちそうになったところ助けられ、惚れた。冬花達が告白するときに混じって告白した。

霊と会話できるのか、たまに自室で霊に喋りかけている。どんな霊か聞けば青と銀色のクワガタのような、黄色い目をした霊らしい。

名前：冬咲 夢花

読み：ふゆざき ゆめか

年齢：（誰も知らない）

一人ぼっちになった零斗、まだ物心付く前に捨てられた冬花と桜を拾って育てた。零斗が中々「お母さん」と呼ばないことに少し拗ねることがあるけど、「お母さん」と呼ばれてからは拗ねることがなくなつた。《変威獣》に屋根を壊されてから孤児院をやめて、1つの家族としてみんなと住んでいる。

零斗達の誕生日を毎回高級レストランで祝う。冬花が会計するとき少し見たら《黒いカード》のような見たことないカードで支払っていたのかなんとか。容姿はかなりの美人で、零斗達が小さい時から

若さも変わらず、零斗達が高校生になってからもナンパされることがある。海では零斗と冬花と桜が遊んでいるときに一日で計18回ナンパされたのかなんとか。ちなみに化粧などが苦手。

零斗達も知らない秘密を持っている謎多き零斗達の保護者である。

下の魔法陣はなんですか？

めっちゃ飛んじやった気がするけど、俺達は高校三年生になった。そう、高3である。高3の修学旅行が楽しみだ。

そして今日、月曜日という週の最初で誰もが嫌なときである。昨日の休みと言うなの天国を思い出してしまふ。今日も冬花と桜、恵里と一緒に登校をしている。ちなみに何故か俺だけ《チブセル症候群》だと言うことがバレていてクラスから浮いている。冬花と桜と雫と恵里がいるから別にクラスなんてどうでもいいんだけどね。

そんなことを思いながら歩いていたら教室のドアが見えてきてしまった。今すぐにもUターンで家に帰りたい。一緒に登校しているのに、なぜか一緒の家に住んでいることは誰にもバレていない。

そう思いながらドアに近づいた。すると、ドアが開かれて《小悪党组》と言う名の暴力集団に出会う。

「あれ、《チブセル》じゃん。どうしたそんな目で…もしかして寝不足か？エロゲで徹夜か？」

「エロゲで徹夜とかキモー」

そんなことを毎日言ってくる。冬花達はそんな《小悪党组》が嫌いで誰にも気づかれないように睨みつけていた。睨みつけられている《小悪党组》を横目に、教室へと入っていった。各々の席に着き、教科書などを机の中に入れて、俺の席の周りに集まってきた。そこで少し話していると、誰かが来た。

「夢咲くん、冬花、桜、恵里、おはよう！今日もギリギリだけど、大丈夫？」

「おはよう香織！大丈夫だと思う！」

「…………おはよう、香織。大丈夫、早起きの零斗とお母さんが起こしてくれるから大丈夫」

「おはよう。冬花達の言うとおり、大丈夫だろう」

「そうなんだね！」

5人で話していると、雫と天之河達が来た。

「おはよう零斗！冬花、桜、恵里もおはよう！ところで聞きたいんだけど

ど、零斗達のお母さんって何者なの?」

「香織や冬花達は優しいな。いつ《変威獣》になるかわからない夢咲に優しくするなんて…夢咲は香織達の優しさに溶け込むのをやめろ。お前が《変威獣》になったら香織達を襲う可能性があるからな」

「全くだぜ、それで香織達のトラウマになつたら最悪だ」

天之河と坂上はそう言つて、俺を睨みつけてきた。コイツらは未成年が《変威獣》になったニユースを見ていないのだろうか。

「おはよう、雫。俺達もわからないんだよ」

「おい!なぜ俺達には挨拶をしない!」

「ん?なんだ、お前らか。俺は今、雫達と話しているんだ。用がないならさっさと席に着けよ。それとも用があるなら早く言つてくれ。お前に付き合っている暇なんてないんだよ」

「なんだ?!俺達は「あーはいはい、すごいねすごいねー。さ、Uターンして席に着けよ。チャイムなるぞ優等生」くっ…後で来るからな!」

冬花達が席に着いたときにチャイムがなり、授業が始まった。

いつもどおりに授業を終え、昼休みになった。さっきの授業を担当していた愛子先生も教室にいる。俺達は机を並べて、弁当を待つ。今日は冬花が弁当を作つたらしい。

「じゃじゃーん!」

そう言つて、冬花が一つの弁当を開ける。そこにはなぜ弁当の中身には相応しくない、ほど綺麗な焼肉が入っていた。

「「おおお…すげえ…!!」」

「私だつて、これくらいできるもん!」

「……………たまに出るこの料理の凄さってなんなのかな」

冬花が稀に作る絶品料理は母さんが連れて行つてくれる高級レストランよりも遥かに美味い。そこへ、雫と香織と鈴が来た。鈴は恵里とご飯を食べたかつたらしい。

「ね、ねえ、そのお肉一つだけ貰つていい?」

「いいよ!みんなで食べたほうがおいしいからね!」

そう言つて冬花が自身の弁当から肉を一つずつ取つて、3人に上げた。

「「すごい、おいしいいい！あ、私達のも食べて食べて」」

みんなで楽しくご飯を食べていると、天之河がまた来た。

「香織、雫、冬花、桜、鈴、恵里。こっちで一緒に食べないかい？夢咲はみんなのお弁当を取る最低なヤツだ。そんなヤツがみんなのお弁当を食べるなんて、俺が許さないよ？」

「え？なんで光輝くんの許しがいるの？」

「そうだよ！そもそも、貴方とご飯と一緒に食べるほど仲良くなつた覚えはないし……何よりこのお弁当はね！私が零斗に食べてほしくて、桜に言つて今日の当番を変わつて貰つて作つたんだよ!!貴方と一緒に食べるためじゃないよ！」

「……………そもそも、これは私達が作ったわけで、貴方の物じゃない。これを食べていいのは私達が心を開いた人。あと、差別をしない人も少し」

「桜、最近ストレス溜まつてるのか？」

「……………大丈夫、ストレスは溜まつてない」

桜がそう言つと、天之河が首を傾げていた。桜の言葉の意味がわからないのかと思つたら、馬鹿なことを言い始めた。

「差別をしない人なら俺じゃないか」

「……………天之河さん、私と冬花が《チブセル症候群》だつて言つても同じことを言える？」

「何を言っているんだ？二人は《チブセル症候群》じゃないだろ？なら、そんなことを聞く必要はないじゃないか」

「……………」

桜と雫は頭を抱えて溜息を吐いていた。すると、天之河を中心に床に魔法陣が展開された。

「嘘だろッ!!」

俺は急いでスマホを取り出し、母さんに床の魔法陣の写真を送信した。送つたのと同時に、魔法陣が光り、俺達の意識が途切れた。

く夢花く

私は家で冬花が作った絶品料理を食べていた。

「どうして冬花はこんなにも美味しい料理をたまに作れるんだろう…
《チブセル》が影響してるのかな」

私がお昼ご飯を食べていると、スマホに通知が来た。

「この通知音は零斗だ!」

四人の通知音を変えているため、誰が送ってきたのかすぐにわかる。そして、送られてきた物に驚く。

「これって…魔法陣?!しかも、この術式は……《転移魔法》?!え、え、え…この世界に魔力はないはず……もしかして、別世界から?!」

あまりにも衝撃的なことでパニックになったけど、すぐに我に返って1つの電話番号に電話する。

『もしもし?どうかし「もしもし?!今すぐに私の家に来て!できれば、政府の何人かも呼びなさい!!」ど、どうしたのさ…そもそも私は仕事の最中「そんなの後でやりなさい!」え、あ、了解!って、君…私が誰なのか「貴方一人のせいで世界が沈んでも良いって言うのなら続きを言いなさい」いえ、何でもございませぬ!今すぐにそちらに向かいます!ジェット機で行きま「滑走路ないわよ」へりで近くの公園に行きますので少し待っててください!!今すぐに、へりの準備を!!』

そう言っって電話が切られた。スマホを机の上に起き、食べかけのお昼ご飯を少しずつ食べた。

「零斗、冬花、桜、恵里……お願いだから無事でいてよ…」

みんなで撮った集合写真を見ながら私はみんなの無事を祈るしかなかった。

感染者を増やした意味ってなんですか？

気が付くと、赤黒い場所にいた。目の前には赤く光る目があった。

『久しぶりだなあ』

「ベリアルか…」

名前を言うと、見えなかった全貌が見えた。ベリアルは両手と両足を何処までも続きそうな鎖に繋がれていた。

『お前が俺達をここに閉じ込めてから何年経った？』

「約3年だ」

『ここはいいぞ、キングに封印された牢獄よりも何倍もマシだ』

「知るか」

『ところで、ここに何しに来た？…そろそろ俺達を解放する気になったか？』

「お前を解放して何かできるのか？」

『世界を自分好みに変えられるぞ？それだけじゃない、世界をお前の物にできる。他の世界もな』

「断る！俺は、冬花達と母さんが入れればそれでいい！世界征服もしないー！」

『俺を解放しないのはお前の勝手だ。だが、他のウルトラマンや怪獣達は役に立つぞ？まあ、お前が使いこなせればの話だがな』

ベリアル以外なら安全だと思つた俺は、ベリアル以外の全員の封印を解いた。解くと、体の底から力が湧いてきた。

「ベリアル、お前は何がしたい。《チブセル症候群》の感染者を増やして何がしたいんだ？」

『…………ある男が俺に言った。『なぜ奪うだけで、守るものを持たないんだ』ってな。俺はその守るものがなんなのか知りたい。感染者を増やし、適合者を見つけ、その守るものをわかりたかった。ただ、それだけだ』

「守るもの…？」

『お前にとつてのあの女共だ』

女共と言われて冬花達を思い浮かべる。

「つて、そうだ。ここどこだよ！冬花達は?!」

『……今更か。ここはお前の精神世界だ。あの魔法陣で意識が落ちてお前がここに来たって感じた。まあ、寝てるみたいなき感じだ』

「そうなのか……どうやったたら目覚めるんだ?!」

『時間が経てば目が覚めるだろう。あ、ここでの一時間は向こうでの1秒だからそこまで焦るな』

「焦るわ！冬花達が一秒でも、俺にとっては一時間なんだよ！」

『そんなに帰りたいたなら、帰らせてやる』

ベリアルがそう言うのと、世界が真っ白になっていき、俺の意識が薄れていった。

〜夢花〜

「遅い!!何をしていたの?!」

「ええ?!予定時間よりも早く来ま「今は1分1秒も惜しいの!喋らない!」理不尽だ……」

私は来た男に零斗から送られた写真を見せた。

「これは…魔法ですか?」

「ええ、魔法よ。しかも転移魔法よ」

「転移魔法…つまり、誘拐ってことですか?」

「ええ…零斗達が拐われたわ」

「どうしてそんなことわかるんですか」

「一つはこの写真。もう一つは零斗達の気配が消えたからよ」

「相手は異世界の魔法使いとかですか?」

そう言われて、もう一度写真を見た。

「………少し、神の力も混ざってるわ。多分、どこかの宗教とかの教皇あたりよ」

「どうするんですか?その世界に向かうんですか?」

「そのつもりよ。私達が帰ってくるまで、よろしくね」

「よろしくって…わかってますよ。このことを公表しないこと、この家のこと、夢花さんの正体のことも…誰にも言いませんよ」

「勝手に言ったら、世界沈めるわよ」

「それだけはやめてくださいよ!?!」

「わかってるわ」

私は最低限の荷物を持ち、零斗達を助けるためと、拐ったどこの骨かもわからないヤツをぶちのめすために別世界に行くことになった。

異世界ってなんですか？

目が覚めると、ベリアルがいた精神世界とは違う場所にいた。周りには冬花達もいた。ベリアルがいた精神世界が夢だと思っていたけど、心なしか地球にいたときよりも力が湧いてくる。

「ここは…」

「あ、目が覚めた？大丈夫？痛いところない？」

「……強いて言うなら、冬花の膝を置いている場所が一番痛い」

「膝？……え、あ！ごめん！大丈夫?!／／」

冬花が退いてすぐに俺は股を抑えて転がって痛みを紛らわそうとした。それを見た冬花と桜と恵里が心配そうに俺を見てくる。

「……冬花、流石に駄目だよ」

「グスン、ごめんね」

「だ、大丈夫……本当に大丈夫？今日の夜にでも、確かめに行くよ？」
おい待てお前何をやる気だ」

「なにして……夜遣い」

「……冬花、最初はみんな違って約束したでしょ」

「あ、私はまだいいかな。冬花と桜がお先でいいよ」

「お前らそういう話は人がいない場所でしょう」

四人で話していると、知らない爺さんが現れた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そして同胞の皆様方。歓迎しますぞ。私は聖教教会にて教皇の地位に就いております《イシユタル・ラングバルド》と申します。以後、よろしくお願い致しますぞ」

イシユタルと呼ばれる爺さんがみんなを机に座らせたのと同時に、扉からメイドがカートを押しながら入ってきた。

「あなた方を召喚したのは《エヒト様》でございます。我々人間族が崇める守護神であり、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するために、あなた方が喚ばれました。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があったので

す。あなた方という《救い》を送ると。あなた方には是非その力を發揮し、《エヒト様》の御意志の下、魔族を打倒し我ら人間族を救って頂きたい」

直略すると戦争しろ

それを聞いて、ベリアルという言葉を出す。

『その守るものを知りたい』

『お前にとってのあの女共だ』

ベリアルの言葉を思い出していると、誰かが机を叩いた。

「ふぎけないくださいよ！結局、この子達に戦争させようとしてるんでしょ!!そんなの許しません!ええ、先生は絶対に許しません!!私達を早く帰して下さい!ご家族も心配しているはずですよ!!あなた達の上していることはただの誘拐ですよ!!!」

頬を膨らませた愛子先生がそう言った。

「お気持ちはお察しします。が、あなた方の帰還は不可能です」

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!?喚べたのなら帰せるでしょう!?!」

「先ほども言ったように、あなた方を召喚したのは《エヒト様》です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな。あなた方が帰還できるかどうかもうエヒト様の御意志次第、ということになります」

「そ、そんな……」

魂が抜けたように座る愛子先生。

「うそだろ?帰れないってなんだよ!無責任だろ!」

「いやよ!何でもいいから帰して!」

「バーカバーカ」

「ふぎんけないですよ!結婚する前に死ぬなんて嫌だよ!」

「ふぎけるな!!何が救えだ!勝手にやってろよ!俺達を巻き込むんじゃないよ!」

「アーホアーホ」

「戦争なんて冗談じゃねえ!これはどうせ夢だ!もう一度目をつぶればベッドで寝ているはずなんだ!」

「異世界転移なんてテレビの中だけにしろよ!!」

みんながそう騒いでいると、天之河が机を叩いて立ち上がった。「みんな!ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。俺は……俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って放つて置くんなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない……イシユタルさん?そうですよね?」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無碍にはしますまい」

「俺達には大きな力があるんですよ?ここに来てから妙に力が湧いてくる感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょう」

「なら大丈夫!俺は戦うよ。人々を救い、皆が家に帰れるように!俺が世界も皆も…救ってみせるよ!!」

そう言つて無駄に歯を見せた。冬花達が少し引いていた。だけど、クラスメートの殆どが戦争に参加すると言つた。

「お前ならそう言うと思つたぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ?」

「龍太郎…」

「私は……」

雫が何故か俺を一回見てきた。俺と目が合うと、少し頬を赤らめて向き直つた。

「私は戦争に参加しないわ」

「なっ……!雫!この世界の人々が困っているんだぞ?!」

「だったら、地球でも戦争が起こつて沢山の人が困っているわ」

「だが、今日の前で起こつてることを見過ごすなんて俺には無理だ!」
「だったら、地球で今も起こつてる戦争は私達がここに來るずつと前から起こつてるわ」

「私も雫ちゃんがしないからしない!」

「鈴も!」

雫に続き香織、鈴も戦争に反対した。

「冬花達はもちろんこの世界の人々を救うために戦うよな？」

天之河がそう言いながら冬花達に近づいた。

「ごめんだけど、私達も戦争はやりたくない」

「……………私もしたくない」

「私もー！」

「なぜだ?!」

「二だって、私達は恋人がいるし、恋人を悲しませたくないから参加しないわ」

そう言い、天之河がまた何かを言おうとしたけど、イシユタルが王国に向かうといい、話が終わらされた。

く???

「くフフフ…楽しくなってきたぞ」

一人で笑っていると、一人のシスターが入ってきた。

「我が主、ご報告があります」

「ん?なんだ?」

「何者かが猛スピードでこの世界に向かってきております」

「ほお…ちなみにどこからだ?」

「彼らがいた地球でございます」

「ほお…どれ、どのようなのが来ているか見てみツ?!」

その何かがどんなものか見ようとしたときだった。物凄い殺気と殺意が我に向けられた気がした。

「や、ヤツは何者だ?!おい!あとどのくらいでここに着く!」

「一年以内には必ず…」

「捕獲しろ!ソイツを使えばどんな世界でも我の物にできる力を手に入れられるやもしれん!」

シスターが部屋を出ていった。

いやいやいやいや、無理無理無理!!!あれは人間じゃない!いや、そもそもこつちに迫ってきてる時点で人間じゃないか!って、そんなことはどうでもいい!何故だ、ヤツを怒らせるようなことをしたのか?!

ま、まさか…子供の中にヤツの大切な者がいた…とか？だ、だとしたら今すぐに、返したほうが…！って、あ…そういえば転移魔法ってこっちから送るの無理だったわ……………

ステータスってなんですか？

王国で歓迎パーティーされた次の日、俺達は訓練所へと来ていた。「俺の名前はメルド・ロギンスだ！これから戦友になろうってのに何時までも他人行儀に話せるか！」

メルドが自己紹介を終えると、みんなに何かを渡した。

「今渡したプレート的一面に魔法陣が刻まれているだろ？そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って、魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録されるからな。そして、『ステータスオープン』と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。あ、原理とか聞くなよ？そんなもん知らないからな。神代の《アーティファクト》の類だからな」

「《アーティファクト》？」

《アーティファクト》という道の単語に天之河がメルドに聞き直す。メルドさんが言った事を簡単に纏めると、大昔からある物のこと。

「……ステータスオープン」

俺がそう言うと、プレートに文字が浮かび上がってきた。

夢咲 零斗 18歳 レベル：1

天職：チブセル適合者

筋力：1000 (測定不能)

体力：1000 (無限)

耐性：1000 (測定不能)

敏捷：1000 (測定不能)

魔力：1000 (無限)

魔耐：1000 (測定不能)

技能：変身(条件未達成)・武器製造・魔法付与・能力付与・魔力操作・魔力変化・■■■■の加護・言語理解

変身後技能：光の巨人・闇の巨人・怪獣・怪獣使役・怪獣召喚・怪獣擬人化・変身・自己蘇生・自己再生・進化・成長・学習・念動力・隠密・物体操作・全事象耐性・全属性適応・滅魔法・禍魔法・衝撃波・

魔具精製・毒物耐性・瞬間移動・異空間収納・隠密・剣術・銃術・闘術・魔力操作・限界突破・上限突破・武器製造・魔力操作・魔力変化・魔法付与・能力付与・■■■■の加護・言語理解

一つだけ文字が見えない物があつた。俺がステータスプレートを太陽にかざしたり、突いてみたりしたが物は見えなかつた。そこに冬花と桜と恵里が来た。

「零斗はどんな感じ？」

「俺はこんな感じだ」

そう言つてステータスを見せた。冬花達も文字が見えず、なんの加護かわからなかつた。

「二人はどんな感じ？」

「私達はこんな感じ」

神咲 冬花 18歳 レベル：1

天職：魔術神

筋力：1000

体力：1000

耐性：1000

敏捷：1000

魔力：1000

魔耐：1000

技能：全属性適応・全属性強化・全属性耐性・滅魔法・禍魔法・破魔法・星魔法・複合魔法・■■■■の加護・言語理解

神咲 桜 18歳 レベル：1

天職：武神

筋力：1000

体力：1000

耐性：1000

敏捷：1000

魔力：1000
魔耐：1000

技能：全武器適応・武器収納・武器召喚・武器入れ替え・武器創造・
■■■■の加護・言語理解

夢咲 恵里 18歳 レベル：1

天職：降霊術師

筋力：1000 (測定不能)

体力：1000 (無限)

耐性：1000 (測定不能)

敏捷：1000 (測定不能)

魔力：1000 (無限)

魔耐：1000 (測定不能)

技能：変身(条件未達成)・死者蘇生・蘇生・霊召喚・■■■■の加護・

言語理解

変身後技能：怪獣使役・怪獣蘇生・魔物蘇生・死者蘇生・蘇生・変身・自己蘇生・自己再生・即時回復・痛覚無向・進化・成長・学習・念動力・物体操作・全事象耐性・衝撃波・■■■■の加護・言語理解

冬花達にも何かの加護がついていた。だが、それもなんの加護か見えなかった。そこから、メルドが色々説明してくれた。メルドがステータスを見せるよう全員に言った。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！頼もしい限りだ！」

「いや、あはは……」

その後、俺達以外全員がステータスをメルドに見せた。俺達がなんの加護か考えていると、メルドがこつちに来た。

「お前達もステータスを見せてくれ」

「……冬花達が先に見せてくれ。俺はもう少し技能について考える」

「はいーいー」

冬花達が見せると、メルドがステータスプレートを落とした。俺は

それを拾って、メルドを見た。メルドは震えていた。

「《魔術神》に《武神》?!しかも勇者である光輝を超え、《全魔法適応》だけではなく、俺でも知らない魔法に、「武器召喚」だと?!恵里は【死者蘇生】に【蘇生】だと?!それに見えない文字はいつたい…」

メルドが部下に何かを伝えた。

「冬花、桜、君達は俺よりも強い。一緒にこの世界を「遠慮しときます」なぜだ?君達ほどの実力なら魔族とも戦えるんだ!一緒に戦おう!」

「私達は零斗と一緒に戦うから!」

そう言われて、今度は俺のステータスを見せることになった。

「ん?チブセル適合者…?これは……」

「ああ、メルドさん。《チブセル》というのは俺達の世界にある不治の病でして、《チブセル》に感染した人は例外なくか化け物に変わるんですよ」

檜山の適当な説明に冬花達が睨みつけた。

「なるほど、しかし…零斗も《謎の加護》に《魔法付与》?!」

なぜかメルドが驚いた。

「メルドさん、《魔法付与》ってそんなに珍しいんですか?」

「ああ、付与する人によつては光輝を遥かに超える力を付与することができる」

「おいおい、夢咲…お前そんなので戦えるわけ?どうせ何も付与「馬鹿野郎!」」

メルドが檜山を叩いた。

「《魔法付与》は文字通り魔法を物に付与できる。つまり、そこら辺の木の枝が俺達が持っている剣よりも強くなることだつてあるんだぞ!」

そう言われたあと、国の宝物庫から武器を探すことになった。

聖剣よりも強い剣ってなんですか？

メルドについていき、国の宝物庫へと入っていった。色々見て回っているけど、目ぼしいものは何一つなかった。チブセル適合者は何を使えばいいかわからないため、剣だけ渡された。冬花は杖、桜も剣を渡された。その後、俺は自室で自分専用の武器を作ろうと頭をひねっていた。

「私、杖以外の物がいい！」

「いや、そんなこと言ったってな…例えばどんなの？」

「指輪とか、首飾りとか、小さいのがいい！あと、弓とかほしい！」

「そう言われてもな…桜は剣がいいよな」

「……………剣がいい。刀とか…かな」

「うーん…」

頭を捻りながら二人の要望に合いそうな物を考えると、部屋をノックされた。誰かと思い、ドアを開けるとメルドがいた。

「お前達、集合の時間過ぎてているがぞ」

「あ、ごめんなさい。零斗に専用の武器を作ってもらおうとしてて」

「専用の武器か…ここの武器庫とかにはなかったのか？鍛冶師とかにも聞いてみたか？」

「……………聞いたけど、作るのも無理って言われました。あれば零斗の魔法付与の練習にもなると思ったので…」

「なるほど…零斗はその武器を作れるのか？」

「うーん…鍛冶場とかを借りれば…知識はないっすけど、簡単な作り方は母さんに教えられたんで」

「わかった。鍛冶場と鍛冶師、材料も手配しよう。冬花達は先に行つててくれ。零斗を鍛冶師の下に連れて行く」

「はーい！桜、行こう！」

冬花達が出ていったあと、メルドに付いていき、鍛冶師の下へと行った。その人達は結構優しくて、剣の基本の作り方を教えてもらった。そこから教えてもらったりして刀を作り上げた。

「ここから魔法付与か…いや、能力付与にしよう」

初めて《変威獣》と戦ったときに見た記憶を思い出して、良さそうなものを探した。

記憶の中にある剣は色々あって、中でもヤバそうなのは《空間を切る剣》、《絆の聖剣》、《思いを形にする剣》、《宇宙の穴を縫う針》などなど沢山ある。その中でも桜に合いそうな剣は《思いを形にする剣》と《宇宙の穴を縫う針》だな。

「うーん……とりあえず、この2つの能力を付与しようかな……」

俺は刀に《思いを形にする剣の力》と《宇宙の穴を縫う針の力》を付与した。ついでに、《刀を2つに分ける能力》と《思いが強ければ強いほど強くなる能力》を付与した。付与すると、刀身が虹色に変わった。俺は完成した刀を鞘に仕舞い、鍛冶師達にお礼を言った。

「ありがとうございます！」

鍛冶師達は温かい言葉を俺に送ってくれた。その後、刀を持って訓練所のところへと行った。そこでは桜と雫が木刀でぶつかり合っていた。

「あー零斗！」

「魔法は使えるようになったか？」

「うん。でも、やっぱり杖だと邪魔かな」

「あぁ……作ってみるわ。それで何だけど、桜の刀できたぞ」

俺がそう言うと、木刀でぶつかり合っていた二人が俺のところに来て来た。桜に刀を渡すと、すぐに鞘から抜いた。鞘から抜くと、刀身が虹色に輝いた。昼間でも輝きがわかるほどだった。

「……………これが私専用の武器」

「名前はないから、好きに着けてもら」《《神花》^{しんか}がいい」……わかった。神花な」

「……………切れ味試していい？」

「初心者で作った物だぞ？期待はするな。メルドさん、的の用意をお願いします」

メルドが的を用意してくれた。桜を見に、クラスメイトが集まってきた。

「……………何か注意すべきことある？」

「何を言っているんだ？ただの剣じゃないか。気をつけることなんてないだろう」

何も知らない天之河がそう言った。桜は天之河を無視して俺を見てくる。

「そうだな……まあ、ソイツが持ち主を選ぶってことだけ覚えとけばいい」

「何を言っているんだ。物が持ち主を選ぶわけないだろ！桜を馬鹿にするのをやめ「わかった」：桜は優しいな、夢咲の嘘を聞いてあげるなんて……」

そんな天之河を無視して、桜が《神花》を抜いて、的を切った。すると的が綺麗に切れた。それだけではなく、後ろにあった藁も切れていた。

「……………凄い。何か秘密とかあるの？」

「わざわざ俺がただの刀を作ってお前に渡すと思うか？《ステータスプレート》に《魔法付与》とは違う《能力付与》ってのがあったろ？それを使って能力を付与したんだ」

「……………ありがとう」

「お、おう…能力についてはまた今度教える」

そう言うと、桜が天之河に刀を向けた。突然のことで天之河はわからずにいた。

「……………天之河さん、真剣勝負して」

「ああ、いいよ」

天之河は簡単に受けたが、桜はこの世界に来る前から、かなり強い。もちろん、天之河は1度たりとも勝てたことがない。

「ねえねえ！私のはいつ頃できるの？」

「どんな能力を付与しようか迷ってる途中だから、もう少しかか……いや、今すぐに作ろう」

俺は形だけ作っていたペンダントに《魔力操作》と《魔力変換》を付与させて、渡した。

「多分だが…これで行けるはずだ」

「ありがとう！試しに使ってみるね！……ここを焼撃を望む【火球】

！」

そう言うと、冬花の杖から物凄い大きな魔法陣が展開され、そこから【火球】が的に向かって撃たれた。

「へ？」

的があつた場所が黒焦げていた。その焦げた場所を見ると、焦げた場所目掛けて天之河の聖剣が飛んできた。振り返って見ると、桜が聖剣を飛ばしたようだった。

「お兄ちゃん、聖剣よりも強い武器ってなんなの？」

「神器…かな。あ、《神花》は神器じゃないからな」

「ねえ、お兄ちゃん。《神花》があんなに強い理由ってなんなの？」

「《思いが強ければ強いほど強くなる能力》だ」

「……それ、お兄ちゃんに対する思いが強いからあんなに強いってこと？」

「愛故の力ってか？あり得る話だな」

恵里と話していると、桜と天之河が揉め始めていた。何やら《神花》についてのことだった。

「今すぐその武器を捨てるんだ！夢咲のことだ。何か変なものを仕込んでいるに決まっているー！」

「………零斗はそんなことしない。適当なこと言わないで」

「なら、俺達にも言えるはずだ！なのに俺達には教えない。それが何よりの証拠だ！アイツは君を操って何かをする気なんだ。もしかしたら、俺達と戦わせようとしているのかもしれない…これは君のためなんだ。それに、そんな刀ぐらいなら他の鍛冶師に頼めばいい！」

「………そんなことない。零斗はそんな人じゃない。何も知らないのに言わないで」

「なにを根拠に……！」

「………私、このあと用事あるからもう行く」

そう言って桜が俺の部屋の方へと向かった。天之河の発言から《神花》を奪おうとすることがあるだろうから、念の為、《神花》にセキユリテイ機器をつけよう。

セキュリティってなんですか？

案の定、セキュリティを付けた《神花》が盗まれた。犯人はすでにわかっており、地面に突き刺さった《神花》を抜こうとしているのを見んが見えていた。

「……………誰、私から《神花》を奪ったの？」

桜の絶対零度の瞳と声に数人が固まる。桜は《神花》を抜こうとしている犯人を突き飛ばし、《神花》を抜いた。それを見た犯人、檜山は驚いていた。

「……………貴方がやったの？」

「ヒツ…お、俺じゃねえ!!」

「……………そう。零斗、犯人が誰かわかる？」

「うーん…あ、《犯人を捕まえたい》って思えばいいんじゃないか？」

「……………わかった。やってみる」

そう言い、桜が《神花》を持って《犯人を捕まえたい》と思った。すると、《神花》から虹色の霧のような物が出てきて、檜山を捕まえた。

「な、なにしやがる！は、離せよ！」

「……………あなたが犯人なのね」

「ひい…!!」

「なにをしているんだ!!」

桜が檜山に《神花》の刃を向けると、天之河が来た。

「桜、檜山に向けるのをやめるんだ。それになにをしているんだ？」

「……………盗人がいたから捕まえた。ただそれだけ」

「盗人？檜山は何も盗んでいないじゃないか。……………やっぱりその武器に何かがあるんじゃないか？桜、それをこっちに渡してくれ」

そう言いながら桜から半強制的に《神花》を奪った。すると、桜の手から離れて《神花》が地面に落ちて突き刺さった。

「な、なにが…」

「……………」

「あ、待つんだ桜！その武器は危険だ！」

天之河を無視して桜が《神花》を地面から抜き、俺に渡してきた。俺

が持つと、天之河のときのように地面に突き刺さらなかった。

「夢咲！なぜ俺が持てなくてお前が持てるんだ！やはりそれに何かを仕組んだのか?!」

「これを持てるのは俺だけじゃねえ。冬花、雫、恵里、鈴も持ってくれ」俺はそういい、冬花に渡した。冬花も持てた。次に雫に渡した。雫も普通に持てており、俺だけではないことが証明された。次に恵里、鈴と渡した。

「ほら、俺以外にも持てる人はいるんだよ。お前の勘違いも程々にしろよ」

「くっ…」

「それに言っただろ。神花が持ち主を決めるってよ」

「あれはお前の嘘だろ!?!」

「今起きたの見てそう言ってるのなら、お前の頭大丈夫か?」

「馬鹿にするなツ!!」

「あっそ」

まだなにか言っていた気がするが、俺は無視して部屋へと戻り、簡単な弓を作っていた。

「ねえ零斗、さっきのどういうことなの?」

「……冬花、責めてノックぐらいしてから入ってくれ。俺男だぞ」

「……なにかやらしい物でもあるの?」

「いや、何も」でことでお兄ちゃん部屋の抜き打ちチェック!」あ、おい!」

突然入ってきた冬花達が俺の部屋を物色し始めた。ベッドの下や枕の下、棚の中や棚の後ろ、机にしたなどを見て回った。

「ねえ零斗、これなに?」

冬花が見つけたのはさつき作った弓だった。

「ああ、それは冬花の為に作った弓だ。《魔法付与》で色々付けてるぞ……あと、お前ら何しに来た」

「………なんで《神花》が地面に刺さったのか知りたいの」

「ああ……それな、《神花》は桜が心を開いている人だけ持てるようになってんだよ。天之河や檜山が持てなかった理由は桜が心を開いて

いなかった。ただそれだけだ」

冬花達が納得して部屋を出て訓練所に向かった。その後、メルドが俺のところに来て、明日の予定を行ってくれた。明日は《オルクス大迷宮》に行くとのことだった。それを聞き、頭の中にある《ダイナゼノン》と《グリッドマン》などの《ベリアル》以外の巨人達の力を使おうと色々していた。

夢ってなんですか？

その後、メルドが全員を連れて《オルクス大迷宮》がある《ホルアド》と呼ばれる町に来ていた。《ホルアド》で一泊して、明日《オルクス大迷宮》に挑むとのこと。今日は自由行動でクラスメートは各々の行きたい場所へと行った。

「冬花、桜、恵里、一緒」「零斗と行くから遠慮します」「…：雪、香織、一緒に」「冬花達についていくので遠慮します」「…：」

天之河が冬花達だけではなく、雫達にも断られていた。

「零斗、あのお店行こうよ！」

「あ、私も！お兄ちゃん、行こうよ！」

「服か。俺のセンスが問われるな」

服屋に入っただけだった。そこには女性物しかなかった。あんまり見ると冬花達になにか勘違いされそうな気がしたため、あまり見ないようにした。

「零斗がみんなの服選んで！」

そう言われて少し店の中を見て回った。そこで虹色の膜のように少し透けているマントを見つけた。それを買った物かごに入れて幾つかの服を選んだ。

「とりあえず、試着しないとね！一人ずつね！」

「んじゃ、まずこれが冬花のな」

冬花に服を渡すと、試着室の中へと入っていった。しばらくして、着替え終わった冬花が出てきた。

「…「おお…!!」」

そこから桜以外の冬花達の試着が終わった。雫にカワイイ服を着せた。顔を真っ赤にしていたが、みんなからはかなりの好評だった。

「桜のは？」

冬花に言われて買い物かごを見る。選んだ服は全部試着された。

「桜のはこれだ」

そう言っただけで虹色のマントを渡す。それを羽織ると、桜が女神に変わった。その後、冬花もほしいと言っただけで、桜とは違う表に雪

が舞うような絵がある、裏が金色のマントにした。

「お会計は——」

会計をして、冬花達と一緒に宿の方へと戻った。マントを大事に持つ冬花と桜を不思議に思ったのか、クラスメート達が近づいてきた。

「みんなは何を買ったの?」

「零斗が服とマントを買ってくれたの! 恵里達にもカワイイ服を買ったりね、零斗って服を選ぶセンス結構あるんだよね」

そう言っって冬花と桜はマントを羽織った。そのマントにクラスメートの女子の大半が見惚れていた。しかし、それをよく思わなかった男がいた。

「夢咲が選んだ服よりも俺が服を選んだほうがいいんじゃないか? 俺ならもつと似合う服を選ぶよ」

女子達の話し声が天之河のせいで消えた。冬花達はゴミを見る目で天之河を見ていた。その後、冬花達は静かに俺の部屋へと逃げるように入っっていった。

「……………つて、なに入っつてんだ?!」

冬花達を追いかけるように部屋に入ると、また物色していた。雫と香織はベッドに座っつるだけで何もしていなかったが、恵里達が柵なぞを開けていた。

「お前らさっつきと自室に戻れ!!」

そう言っくと冬花達が渋々部屋に戻っつていった。俺はベッドにダイブしようとした。だが、布団に謎の膨らみがあった。恐る恐る捲っつてみると、冬花と桜が寝息を立てながら眠っつていた。

「…そういえばさっつき二人だけいなかったな……………これどうしようか…一先ず風呂だけ入っつとくか」

二人が起きそうな感じではなかったため、先に風呂に入ることになった。今日寝れるだろうか。二人が寝ていると俺が寝れない。風呂から出ても二人は寝たままだった。

「どうしようか…」

そう思っ、二人の寝顔を見ていると、突然二人が起き上がった。二人共物凄い汗をかいていた。

「大丈夫か？」

「零斗……？」

「おう。夢咲零斗「零斗!!」うわつと……ど、どうした？」

二人が起きてすぐに抱き着いてきた。というか押し倒してきた。

「零斗お……」

「スンスン……」

「ど、どうしたんだ？」

「クンクン……」

「よかった……零斗お……」

「スンスン……」

「ど、どうしたんだよお前ら……つか、なんで桜は俺の匂いをずっと嗅いでくるんだよ」

「………零斗、好きだから落ち着く」

「……ありがとう。それで、どうしたんだよ」

冬花と桜を座らせようと体から離そうとしたが、全く離れようとしなかった。離れようとしないうため、優しく抱き締めた。抱き締めたときだった。部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「お兄ちゃん、入っていい？」

恵里の声があった。声がしてすぐに恵里と鈴、雫、香織が入ってきた。「お前らもどうしたんだよ……冬花と桜は話そうとしないから、お前らが先にしてくれ」

「わかった。お兄ちゃん………単刀直入に言うね、明日の演習、この街で待っててほしいの。団長達には私達から言っておくから……」

「……何があつたか聞こうか」

冬花と桜を抱き締めながら恵里達の話聞いた。

恵里達は謎の夢を見たらしい。全員同じ夢で、真つ暗な洞窟のような場所で俺が赤いオレンジ色のツリ目の人のような《変威獣》になり、消える夢らしい。

赤いツリ目の人型といえばベリアルだよな。ベリアルと何らかの関係がありそうだ。

「だから、ホルアドに残れと……《チブセル症候群》のこともあるから

な…まあ、冬花の魔法も弓も、桜の《神花》も《変威獣》ぐらい軽く倒せるように作られてるから、《変威獣》になっても大丈夫だと思うぞ？あと、夢だからあんまり信用しないほうがいいぞ」

「そうよね…」

「あ、でももしものときは恵里が蘇生魔法で蘇らせればいいんじゃない？」

「そうだね。あと、私達お邪魔みたいだからそろそろ退室しましょうか」

そう言つて恵里達が出ていった。恵里達が出ていったあと冬花達は離れようとしなかった。

「……………いつまで抱き着いてるつもりだ？」

「このまま一生」

「それで、何があつたわけ？もしかして恵里達と同じ夢？」

そう聞くと冬花と桜が頷いた。

「恵里達とは少し違うの」

「違う？」

「……………あれは《変威獣》なんてものじゃない。もつと禍々しいもの。それと零斗が戦つてた。何度もぶつかつてた…」

「お前らの夢も一緒ってこと？」

「一緒だと思う」

二人が見た夢は暗い洞窟のような場所ではなく、言葉では表せないような場所で何かと戦っていたらしい。《変威獣》とは違う何かと戦っていたらしい。

「なるほど…それで怖くなったというわけか」

「そうなの。ねえ零斗」

「ん？どうした？」

「怖いから今日3人で寝ない？」

「……………賛成」

「今更断るのあれだからいいんだけどさ、お前らまず風呂入って来い。母さんにバレたら大変だぞ」

俺がそう言うと、それぞれの部屋に戻っていった。

「はあ…赤いツリ目の《変威獣》か…ベリアルだな」

そして、二人を待っていると、頭の中に何かが流れ込んできた。

『このままでは二人が危険だ。今すぐにウルトラマンの変身アイテムを渡さないと、彼女らが死んでしまう』

誰だ？誰の声だ？ベリアルとは違う声だな。

『私が誰かはいずれわかる』

声が聞こえなくなるのと同時に、冬花達が帰ってきた。

「ねえ零斗」

「ん？どうした？」

「私達ね、怖い…だからさ…これから零斗と一緒にいたい」

そこで俺の中の何かが切れるような音がした。見れば桜が《神花》を持っていた。

次の日の朝、俺達は裸で寝ていた。昨日のことは繊細に覚えているため、顔に熱が溜まるような感じがした。二人が起きる前に3人だけのお揃いのペンダントを作ることにした。冬花が持っているペンダントの色違いを作り、桜の首にかけてあげた。

オルクス大迷宮ってなんですか？

次の日、俺達は《オルクス大迷宮》の入り口に来ていた。冬花と桜が昨日買ったマントを羽織っていた。周りの冒険者（男）達の視線が二人に釘付けだった。

「よし、お前達！今から迷宮の中に入る！気を引き締めろ！」

メルドがそう言うと、迷宮の扉が開いた。

「冬花、怖いのか？」

「あの夢がまだ少し…怖いかな」

「……………私も怖い」

俺達が話していると、天之河が俺達の方に来た。

「冬花、桜、怖いのか？大丈夫！俺が君達もみんなも守る！だから、怖がらなくていいんだ」

「……………そう」

それだけ言って天之河がメルドのところへ戻った。冬花と桜が俺の服を引つ張っていた。どうやら、あの夢も怖いらしいが、天之河も怖いらしい。

「ここから魔物が出てくる。気を引き締めろ！」

メルドがそう言うと、迷宮の壁から何か飛び出してきた。

「よし、光輝達が前に出ろ！他は下がれ！交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！」

出てきた魔物は二足歩行で上半身ムキムキのネズミだった。

「あれは《ラットマン》という魔物だ！すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

メルドがそう言うと、天之河が聖剣から出てきた光の刃で薙ぎ払った。

「あー…お前ら、今回は訓練だからいいが…魔石の回収も念頭に置いておけ」

そこからどんどん下の階層へと進み、俺達の番になった。

「よし！次は零斗、桜、冬花が前に出ろ！奴らは《レッサーボガール》と呼ばれる魔物だ！他の魔物よりも知能がない！迅速に対応すれば

勝てる相手だ！」

《レッサーボガール》と言う名前に何処か聞き覚えがあった。記憶を遡ってみると、《レッサーボガール》は《ウルトラマンメビウス》が戦った怪物だった。

「冬花、桜、レッサーボガールを一匹だけ倒してくれ」

「!? わかったわ」

冬花の魔法が一匹のレッサーボガールを宙に上げ、それを桜が真つ二つにして、後ろに飛んだ。

「なにをしているんだ?」

天之河が俺達がやっていることの意味が理解ができずにいた。すると、一匹の《レッサーボガール》がさつき倒した《レッサーボガール》の死体を食らった。すると、その《レッサーボガール》の姿が変わった。大きさは変わらないけど、姿だけが変わった。

「な、なに?」

「姿が…変わった?」

「今まであんなの見たことないぞ!」

戸惑っているメルド達が誤った指示をしてしまいそうな気がした。

「冬花、桜、二人は周りの《レッサーボガール》を頼む!俺はあの《レッサーボガール》を倒す!」

「了解!」

「待つんだ!夢咲、君じゃあの魔物を倒せな!俺を見くびるなツ!!」?!」

俺の体の中から一つの光る何かが出てきた。それを掴んだ。すると、頭の中に文字が浮かび上がってくる。

「アクセスモード!《ダイナソルジャー》、《ダイナウイング》、《ダイナストライカー》、《ダイナダイバー》!!」

各機体の名前を叫ぶと、俺の体に纏わるようにダイナゼノンが現れる。

『合体超人!ダイナゼノン!バトルゴー!!』

そう叫ぶのと同時に《レッサーボガール》を殴った。殴ると、《レッサーボガール》が体勢を崩す。

「零斗なの…?」

『ああ、実験は成功だ』

「……………零斗カッコイイ」

『お、おう…二人は他の《レッサーボガール》を倒したら下がってくれ』
そう言うと、二人が後ろに飛んだ。周りを見ると、レッサーボガールは目の前のヤツで最後だった。

『「ダイナゼノン・フルバースト」!!』

全身の武装が展開され、《レッサーボガール》目掛けて一斉射撃される。撃ち尽くすと、《レッサーボガール》が倒れた。《レッサーボガール》が倒れたのを確認して、変身解除した。

「零斗！さっきの凄かったね！」

「……………カッコよかった！なんで訓練で使わなかったの？」

「ああ、《ダイナゼノン》って元々四人専用だったんだが…色々改良して一人用にしたんだ。一応、四人乗りもできるが…四人乗りは少し不便なんだよ。だから一人乗りにしたんだ」

冬花と桜と話していると、クラスメートがいる方から殺気を感じた。振り返ると天之河が俺を物凄く睨んでいた。

「……………なんだよ」

「なんだよじゃない！お前、さっきのあれはなんだ！」

「どれだよ」

「あのロボットだ！なぜお前があんなものを持っているんだ！」

「俺もわからん。以上」

「嘘を付くな！なぜ仲間である俺達に言わないんだ！」

「……………メルド団長、この話長引くから先に進むべきです」

「ん？そ、そうか。光輝！その話はあとにしろ！次が20回層だ！今日はここで終わるが、気を引き締める!!」

そして、天之河の俺を睨む目は消えることなく、次の階層へと行くことになった。

次の階層につくと、辺りはシーンと静まっていた。岩がゴロゴロとあるだけでそれ以外なものもない。

「お前達、今までが楽勝だったからと言って、くれぐれも油断はするなよ！」

そう言うと、周りにあった岩が動き出した。

「《ロックマウント》だ！あいつの腕に気をつけろ！剛腕だぞ!!」

全員がそれぞれの武器を構えると、《ロックマウント》が咆哮を上げた。
た。

『グウガアアアアッ!!』

「うわっ?!」

「きゃっ?!」

「うぐっ?!」

《ロックマウント》の咆哮で俺達以外の全員が尻もちをついた。すると、《ロックマウント》が近くにあった岩を雫達の方へと投げつけた。俺はスピードを上げて《ロックマウント》を素手で殴った。だが、ビクともしなかった。

「くっ：アクセスフラッシュユ：：アクセスコード、バトルトラクトマックス！」

六角形のゲートから先頭が拳でできた車のような物が出てきた。そして、俺が《グリッドマン》に変身すると、《バトルトラクトマックス》が変形して、装着される。

『剛力合体超人！マックスグリッドマン!!』

大きくなった腕で《ロックマウント》に殴りかかった。スピードもパワーもこちらのほうが上のようで、《ロックマウント》の顔の形が変わり、倒れて動かなくなった。

「「きゃあああ!!」」

後ろから悲鳴が聞こえ、振り向くと、投げられた岩がクルツと空中で回転し、《ロックマウント》に変わった。

『間に合わない!』

「…………大丈夫!!」

桜が近くの岩を踏み台にして飛び、《神花》で《ロックマウント》をバラバラに切り裂いた。それを見て、変身を解除した。

「さすが、桜だな」

「ッ！坊主！後ろ！」

「は？」

後ろに振り返ると、《ロックマウント》がいた。どうやら、まだまだいるらしい。

「やっべ…」

「大丈夫！【エレキランス】!!」

冬花の声ができるのと同時に、雷でできた槍が全ての《ロックマウント》を貫いた。

「お、おおう…」

「へへん！私も戦えるんだよ！」

「冬花も桜もよく頑張ったな！」

「………零斗がいなかったらもつと大変だったかも」

「そうか？まあ、二人が無事でよか「よくも…」ん？なんか言った？」

「なにも言っていないよ？」

クラスメートのの方を見ると、天之河が聖剣を抜いていた。

「よくも香織達を…許さないッ!!万翔羽ばたき、天へと至れ、【天翔閃】！」

「あ、馬鹿者！坊主！避ける!!」

天之河の聖剣から出る光の刃が俺たちに向かって振り下ろされる。

「冬花、桜！俺の後ろに隠れろ！」

「どうするの?!」

「いいから！早く！」

「………冬花、零斗の言うとおりにしよう」

「そうね！」

二人が俺の後ろに隠れたのを確認して、右手にエネルギーを集中させて丸ノコのような物を作り、それをどんどん大きくさせて、聖剣にぶつけた。少し押されたけど、聖剣の光の刃を壊した。

「みんな！魔物は「この馬鹿者！」いてっ！」

「何も確認せずに撃ちやがったな！お前が聖剣を振り降ろした方向に零斗達がいたんだぞ！それに、そんなものをこの狭いところで使つて、天井が崩れたりしたらどうするつもりだ！」

「す、すみません…」

天之河を説教するメルドを横目に、零達のところに戻った。

「あれ、なにかな…？」

香織が聖剣で崩れた壁を指した。何かキラキラと光っていた。

「ほお…あれはグランツ鉱石だな。ここらじゃ珍しい大きさだな」

「グランツ鉱石？」

「ああ、女性に送るアクセサリーとして人気らしいぞ」

「だったら！俺達で回収しようぜ！」

「待て！まだ安全確認ができてない！」

メルドの言葉を無視して檜山が壁を登り、鉱石に触った。すると、俺達がいる部屋全体にあの日と同じ魔法陣が展開され、光り輝き、意識が落ちた。

解放ってなんですか？

気がつくのと、1つの橋の上にいた。

「ここは…まさか六十五階層か?!お前達!今すぐに階段へ急げッ!!」

メルドの荒げた声が迷宮内を木霊する。すると、橋の向こうに大きな魔法陣が展開された。そこから《変威獣》よりかは小さいが、ロツクマウントよりも大きな魔物が召喚された。

『グルアアアアアアアアッ!!』

大きな魔物の咆哮が迷宮内を揺るがした。

「まさか…ベヒモスなのか?…アラン!生徒達を率いて《トラウムソルジャー》を突破しろ!!カイル、イヴァン、ベイル、全力で障壁を張れ!ベヒモス^ヤを食い止めるぞ!光輝、お前達は早く階段へ向かえ!!急げ!!」

「待ってくださいメルドさん!!俺達もやります。あの恐竜みたいな魔物が一番ヤバイでしょう!?!なら、俺達も「馬鹿野郎!!」ッ!?!」

「あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ!ヤツは六十五階層の魔物!!かつて、《最強》と言わしめた冒険者達をして歯が立たなかった化け物だ!さっさと行け!!私はお前達を死なせるわけにはいかない!」

俺と桜はアラン達の前まで飛び、《トラウムソルジャー》に向かって衝撃波を放った。

「桜!今から《神花》の能力を解放させる!頭の中に色々情報が入ってくるかもしれないが、耐えろ!」

「……………わかった」

俺は《神花》の能力を解放させ、今まで《思いを形にする剣の能力》、《思いが強ければ強いほど強くなる能力》、《宇宙の穴を縫う針の能力》、《刀を2つに分ける能力》の中のほんの一部の力だけ解放させていたため、《思いを形にする剣》の技や《宇宙の穴を縫う針》の技を使うことができなかつた。だけど、能力を解放させることで二つの技を使えるようになる。

「……………ッ!!これが…《神花》の能力ッ!!【デスシウムクロー】!!」

《神花》の刀身が紫色に変わり、《トラウムソルジャー》を一掃した。だけど、《トラウムソルジャー》はまだまだ出てくる。

「桜、階段の方から《トラウムソルジャー》を倒せるか？」

「……………任せて」

そう言うと、桜が階段の方へと跳んでいった。

「よし、俺も「きやあああッ!!!」ッ?!」

後ろから悲鳴が聞こえて振り向くと、《トラウムソルジャー》がクラスメートを襲う落としていた。俺はその《トラウムソルジャー》に向かって飛び蹴りをした。

「え、あ…」

「立て…こんなところで絶望するな!!絶望している暇があったら、希望の光でも探してろッ!!」

目の前の《トラウムソルジャー》に向かって大きめの【火球】が飛んできた。見れば冬花の援護射撃だった。そこで、桜が階段への道を作った。

「みんなッ!こっち!!」

冬花がそう言うと、クラスメート達が階段の方へと走っていった。俺はベヒモスの方へと行こうと走ろうとした。すると、桜と冬花が手を引つ張ってきた。

「約束して!絶対に帰ってくるって!」

「……………約束しないのなら離さない!!」

「…ッ!お前らのところに帰ってくるに決まってるだろう!!」

そう言うと、二人が手を離れた。それを見て、ベヒモスの方へと走る。走りながら、《ダイナソルジャー》達を出す。それと同時にメルド達の障壁が破られる。

「ダイナゼノンッ!!バトル!ゴーツ!!」

メルド達の前に降りて、足から出てくるミサイルと一緒にベヒモスを殴った。

「ッ!零斗か!!」

『ここは俺に任せろ!後ろの奴らの避難は完了したッ!!あとはお前らだけだ!!』

「いきなり何を言うんだ？ここは君が居ていい場所じゃ『だったらお前らここで死ぬか？ああ?!』ツ!!」

『コイツは《最強》の冒険者でも刃が立たなかった化け物、なら…同じ化け物の俺が戦ったほうがいいんだよツ!!』
「ダイナゼノン・フルバースト」!!』

俺がそう言うと、メルド達が後ろへと下がっていった。今の俺が変身した《ダイナゼノン》でもコイツに勝てるとは思えない。

俺様を解放すれば女供を守れるぞ？

《ベリアル》の声がした気がした。声が聞こえたのと同時に、《ベヒモス》の攻撃を食らった。

『グルアアアアアアアアツ』

「があツ!!」

強制解除された俺は数回跳ねながら転がって止まった。

「かはツ…」

「夢咲！今すぐもどれ!!」

後ろからメルドの声がした。だが、俺にはその声が聞こえなかった。

「ハハ…お前らとの約束…破っちゃったかもな……」

俺は《オーブリング》出した。そして、《ゾフィー》と呼ばれる《ウルトラマン》のカードを読み込みました。そして、体の中に手を入れてもう一枚の真っ黒なカードを取り出す。それを読み込みもうとしたが、そのカードが拒絶した。

「うぐつ…!」

カードから放たれる赤黒い稲妻が周りに飛ぶ。

「みんなを守るために……力を貸せ!!ベリアル!!」

俺がそう叫びながらカードをもう一度、読み込もうとすると、今度は何んの抵抗もなしに読み込まれた。すると、俺の後ろの空間を抉じ開けるように《ベリアル》の幻影が現れた。

『ヘエハツハツハツハ!!やつと俺を解放する気になったか』

「みんなを守るためだ!!」

そして、《ゾフィー》の幻影と一緒に俺の体の中へと入っていく。す

ると、俺の体が《ベリアル》のような体に変わった。

『あれがベヒモスか…』

俺は一瞬のうちに《ベヒモス》の首元に鉤爪を刺していた。それから、爪を刺した状態で《ベヒモス》の後ろへと跳んだ。

『グルアアアアアアアアツ!!?!』

『ケツ、そこまで強かあねえな。止めをさすぞ』

そう思ったときだった。幾つかの魔法が《ベヒモス》に向けて撃たれた。でも、そのうちの1つの魔法が俺の方へと飛んできた。

『あ?なんで魔法が俺に向かってきたんだ?』

『この体だ。そんなちっぽけな魔法、ダメージになんてならねえよ』

『そうなのか…』

俺の左手と右手に赤黒いエネルギーと青白いエネルギーが集まった。

『「ゼットシウム光線」!!』

俺の「ゼットシウム光線」が《ベヒモス》の体を貫通して、後ろの壁にまで届いていた。そして、《ベヒモス》が力なく倒れた。しかも、その重さに耐えきれずに橋が崩落を始めた。俺はすぐに階段の方へと飛び、無事に生還した。

く???
く

迷宮で《ベヒモス》と戦ったときだった。ある《クラスメート》の姿が変わり、あの日、俺の家を踏み潰し、街や人々を襲った《変威獣》になった。

ああ、そうか…なんで気づかなかったんだろ。アイツは元々人型の《変威獣》だったんだ。だから不真面目なくせに俺よりも強かったのか。

だけど、アイツは地球にいたころは普通だった。

そうか、アイツは魔族と手を組んだんだ!だからあんなロボットみたいなになれるんだ。それだけじゃない。アイツは冬花と桜に好意を寄せている。《トータス》に来てから3人の距離感がどんどん短くなっていつている。つまり、冬花と桜を操って、自分の意のまま

にしようとしているんだ!!なんてやつだ!すぐにイシユタルさんに
言って報告を!!

謀反ってなんですか？

俺達は《オルクス大迷宮》から無事に城に帰ってきた。帰ってきてすぐに自室に戻り、ベッドにダイブした。そしてステータスを見ると物凄い変化が起きていた。

夢咲 零斗 18歳 レベル：???

天職：チブセル

筋力：測定不能

体力：無限

耐性：測定不能

敏捷：測定不能

魔力：無限

魔耐：測定不能

技能：変身（光の巨人（ウルトラマン・ウルトラマンゾフィー・ウルトラセブン・ウルトラマンジャック・ウルトラマンエース・ウルトラマンタロウ・ウルトラの父・ウルトラの母・ウルトラマンレオ・アストラ・ウルトラマンキング・ジューニアス・ウルトラマンエイティ・ユリアン・ウルトラマンティガ・イーヴィルティガ・ウルトラマンダイナ・ウルトラマンガイア・ウルトラマンアグル・ウルトラマンコスモス・ウルトラマンジャスティス・ウルトラマンネクサス・ウルトラマンマックス・ウルトラマンメビウス・ウルトラマンヒカリ・ウルトラマンゼロ・ウルトラマンキング・ウルトラマンビクトリー・ウルトラマンエックス・ウルトラマンオーブ・ウルトラマンジード・ウルトラマンロツソ・ウルトラマンブル・ウルトラウーマングリージョ・ウルトラマンタイガ・ウルトラマンタイタス・ウルトラマンフーマ・ウルトラマンゼット・ウルトラマントリガー）・闇の巨人（ティガダーク・カミーラ・ダラム・ヒュドラ・カルミラ・ダーゴン・ヒュドラム・トリガーダーク）・闇の戦士（ウルトラマンベリアル・ダークザギ・ダークルギエル・ウルトラダークキラー・ウルトラマンオーブダーク・イーヴィルトリガー）・グリッドマン（グリッドキャリバー・マックスグ

リッドマン・スカイグリッドマン・バスターグリッドマン・フルパワー
グリッドマン)・グリッドナイト(グリッドバーンナイト・超合体竜王
カイゼルグリッドナイト)・ダイナゼノン(ダイナソルジャー・ダイナ
ウイング・ダイナストライカー・ダイナダイバー)・暗黒大皇帝・怪獣・
超獣・超古代怪獣・古代怪獣・魔王獣・魔獣・闇怪獣・ベリアル融合
獣・合体怪獣・ロボット怪獣)・技(光の巨人(ウルトラマン・ウルト
ラマンゾフィー・ウルトラセブン・ウルトラマンジャック・ウルトラ
マンエース・ウルトラマンタロウ・ウルトラの父・ウルトラの母・ウ
ルトラマンレオ・アストラ・ウルトラマンキング・ジヨーニアス・ウ
ルトラマンエイティ・ユリアン・ウルトラマンティガ・イーヴィルティ
ガ・ウルトラマンダイナ・ウルトラマンガイア・ウルトラマンアグル・
ウルトラマンコスモス・ウルトラマンジャスティス・ウルトラマンネ
クサス・ウルトラマンマックス・ウルトラマンメビウス・ウルトラマ
ンヒカリ・ウルトラマンゼロ・ウルトラマンギンガ・ウルトラマンピ
クトリー・ウルトラマンエックス・ウルトラマンオーブ・ウルトラマ
ンジード・ウルトラマンロツソ・ウルトラマンブル・ウルトラウーマ
ングリージョ・ウルトラマンタイガ・ウルトラマンタイタス・ウルト
ラマンフーマ・ウルトラマンゼット・ウルトラマントリガー)・闇の巨
人(ティガダーク・カミィラ・ダラム・ヒュドラ・カルミラ・ダー
ゴン・ヒュドラム・トリガーダーク)・闇の戦士(ウルトラマンベリア
ル・ダークザギ・ダークルギエル・ウルトラダークキラール・ウルトラ
マンオーブダーク・イーヴィルトリガー)・グリッドマン(グリッド
キヤリバー・マックスグリッドマン・スカイグリッドマン・バスター
グリッドマン・フルパワーグリッドマン)・グリッドナイト(グリッド
バーンナイト・超合体竜王カイゼルグリッドナイト)・ダイナゼノン
(ダイナソルジャー・ダイナウイング・ダイナストライカー・ダイナダ
イバー)・暗黒大皇帝・怪獣・超獣・超古代怪獣・古代怪獣・魔王獣・
魔獣・闇怪獣・ベリアル融合獣・合体怪獣・ロボット怪獣・怪獣王・
守護神・邪神)・怪獣使役(怪獣・超獣・超古代怪獣・古代怪獣・魔王
獣・魔獣・闇怪獣・ベリアル融合獣・合体怪獣・ロボット怪獣・怪獣
王・守護神・邪神)・怪獣召喚(怪獣・超獣・超古代怪獣・古代怪獣・

魔王獸・魔獸・闇怪獸・ベリアル融合獸・合体怪獸・ロボット怪獸・
怪獸王・守護神・邪神)・怪獸融合・怪獸擬人化・怪獸蘇生・巨人召喚
(光の巨人(ウルトラマン)・ウルトラマンゾフィー・ウルトラセブン・
ウルトラマンジャック・ウルトラマンエース・ウルトラマンタロウ・
ウルトラの父・ウルトラの母・ウルトラマンレオ・アストラ・ウルト
ラマンキング・ジョーニース・ウルトラマンエイティ・ユリアン・ウ
ルトラマンティガ・イーヴィルティガ・ウルトラマンダイナ・ウルト
ラマンガイア・ウルトラマンアグル・ウルトラマンコスモス・ウルト
ラマンジャステイス・ウルトラマンネクサス・ウルトラマンマックス・
ウルトラマンメビウス・ウルトラマンヒカリ・ウルトラマンゼロ・ウ
ルトラマンギンガ・ウルトラマンビクトリー・ウルトラマンエックス・
ウルトラマンオーブ・ウルトラマンジード・ウルトラマンロツソ・ウ
ルトラマンブル・ウルトラウーミングリージョ・ウルトラマンタイガ・
ウルトラマンタイタス・ウルトラマンフーマ・ウルトラマンゼット・
ウルトラマントリガー)・闇の巨人(ティガダーク・カミーラ・ダークラ
ム・ヒュドラ・カルミラ・ダーゴン・ヒュドラム・トリガーダーク)・
闇の戦士(ウルトラマンベリアル・ダークザギ・ダークルギエル・ウ
ルトラダークキラー・ウルトラマンオーブダーク・イーヴィルトリ
ガー)・グリッドマン(グリッドキャリバー・マックスグリッドマン・
スカイグリッドマン・バスターグリッドマン・フルパワーグリッドマ
ン)・グリッドナイト(グリッドバーンナイト・超合体竜王カイゼルグ
リッドナイト)・時空移動・次元移動・自己蘇生・自己再生・進化・
成長・学習・念動力・念話・隠密・反射・オウム返し・物体操作・重
力制御能力・重力操作・空間操作・非対称性透過・物理干渉不能・物
理法則無視・電磁パルス・透過・物体透過・音速・光速・神速・血液
吸収・透明化・未来予知・記憶改竄・万物収納・魔力阻害・魔力妨害・
魔力感知・魔力感知無効・魔力吸収・気配感知・気配感知無効・暗視・
全状態異常無効・全魔法適性・全属性魔法適応(火、水、氷、土、風、
雷)・滅魔法・禍魔法・属性融合魔法・衝撃波・魔具精製・毒物無効・
瞬間移動・異空間収納・隠密・剣術・銃術・闘術・魔力操作・限界突
破・上限突破・武器製造・天職コピー・天職吸収・天職剥奪・魔力変

「うわー……」

なんか、チートになつてた。おいベリアル、これどういうことだよ。『簡単に喋りかけてくんじゃねえ。ステータス？とやらは俺よりもヒカリのほうが詳しいだろ』

『……多分だが……我々の一部の力だけを解放してて、ベリアルを解放させたときに、全てのリミッターが解除された……とかだろう』

ベリアルがそう言うのと、聞いたことない声が聞こえた。その声、ヒカリの言うの通りなら、もう強くなれないのだろうか。

『ん？ああ、ステータスに《学習》と《成長》があるから、君はどんどん強くなるだろう』

そうなのか……ん？この《オウム返し》ってなんだ？

気になった技能があつたため、それを押してみた。すると、技能の説明のようなものが出てきた。

技能名：オウム返し

効果：受けた刺激を増幅し再現する。また、一度再現した技を無制限で使用できる。

習得：完全生命体イフ

ヒカリ、説明頼む。

『例えば、あの勇者の【天翔閃】を君が受けたとする。そしたら、君は勇者の【天翔閃】を数倍にして攻撃できる。反射と違って、何度でも受けた技を使えると言うことだ』

チートだな。どうしようか。

『とりあえず、隠蔽はどうだろうか。能ある鷹は爪隠す。地球にそういう言葉があるだろ？』

そうだな。ちなみに、お前らはこれからもそうやって喋りかけてくるのか？

『いや、君が求めたときだけだ』

そうか。他の奴らにもよろしく伝えといてくれ。

そう言い、俺は部屋を出ようとしたときだった。

ドンドンドン!!

「ここを開けるツ!!」

なんだか物騒な予感がしなかったため、技能の中にある《魔力感知無効》と《気配感知無効》と《透明化》を使い、部屋の隅に隠れた。すると、メルドのところの騎士とは違う騎士がドアを壊して部屋に入ってきた。

「ツ!!ここにはいない!別の場所に逃げた可能性がある!探しだせ!!」

どうやら、俺を探しているようだ。騎士達がいなくなったあと、冬花と桜が来た。冬花と桜が透明化している俺の前に立った。

「……………零斗、大丈夫?」

「透明化してるっぽいから、大丈夫だと思うけど……」

俺は透明化を解いて、冬花達の前に出た。

「なんで俺の場所がわかるんだよ……」

「零斗への愛」

「そうか」

「……………二人共、私の部屋に来て。零斗は透明でお願い」

「わかった」

再び《透明化》《魔力感知無効》《気配感知無効》をして、桜の部屋に移動した。部屋に入っただけで、透明化を解除した。

「それで、何があつたんだ?」

「あのね……零斗が反逆者にされちゃって……今指名手配犯になっちゃってるの」

「よし、聞こうじゃないか」

冬花と桜に聞くと、天之河が城に帰ってきてすぐにメルドと一緒にイシュタルに迷宮での報告をしたらしい。その時に、俺がベヒモスを倒したことも報告したらしい。

「………までは普通だな」

「……………問題は次なの」

天之河が《ベリアル》を《変威獣》としてイシユタルに報告したらしい。しかも《変威獣》はトータスで言う魔物と同じ悪といったらしい。

「なるほど……助けなければよかった」

「問題はそれだけじゃないの。罨にかかったのも零斗のせいにされたの」

「……………は？」

罨はメルドも他のみんなも檜山がかかったことは知っているはず。

「檜山が天之河さんの前で泣きながら言ったの、『すまなかつた。俺が鉱石を取りに行ったのは夢咲に命令されたからだ。夢咲は神咲に渡すために、壁を登れる俺に頼んだんだ』って」

「はあ…」

「……………それで、零斗は魔族のスパイで、私達を罨に嵌めた反逆者ってことにされたの」

「はあ…罨に嵌めたのなら、助けるはずねえだろ」

「殆どの人がそれを信じちゃって…」

だから騎士が俺の部屋に来たのだろう。透明化していなかったら捕まって処刑かなにかされていたのだろう。

「名前と見た目変えて逃げるか」

「だね」

「……………ついていく」

「いいのか？危険だぞ？」

「大丈夫！」

「……………私達も《チブセル症候群》、いつ《変威獣》に変わるかわからない。いつも危険だよ」

「そうだな…んじゃ、それぞれの部屋に戻って荷物まとめて夜にでも逃げるか」

そして荷物を纏めようと冬花が自室に帰ろうとしたときだった。部屋を軽くノックされた。気配感知で城全体を見た。

「桜、冬花いる?!お兄ちゃんがいなくなっちゃったんだけど!」

恵里の声だった。ドアの外には恵里以外に3つの反応、それぞれ

雫、香織、鈴だった。桜がドアを開けて、部屋の中に入れた。

「ここにいたのね…零斗」

「よかった…お兄ちゃん捕まっちゃって殺されちゃったのかと思っ
ちやった」

「そんなことねえから安心しろ」

「それで…3人で何をしよう?」

「…とりあえず逃亡」

「桜と冬花も?!」

冬花と桜も逃亡することに鈴が驚いた。

「零斗と桜がいるところに私あり!」

「……………零斗と冬花がいるところに私あり」

「冬花と桜がいるところに俺あり」

「そう…帰ってくるの?」

「…恵里がいるから必ず帰ってくる」

「そっか…頑張ってるね! 私は鈴がこっちにいるから、こっちに残るね
…でも、必ず迎えに来てね!」

そして、恵里達が部屋を出ていき、冬花と桜が荷物を纏め始めよう
としたときだった。

「……………零斗、あっち向いて」

「え、なぜ?」

「……………下着を鞆に詰めたい」

「おけ、向こう向いとくわ……………あ、俺も部屋の荷物を片付けてきてい
いか?」

「……………行つてきて」

俺は《透明化》と《透過》して壁をすり抜けながら、自分の部屋に
向かい、服やズボンなどを全て《万物収納》で収納して、桜の部屋に
戻った。

「……………お帰り。私達はもう準備できたよ」

「わかった。んじゃ、《万物収納》で荷物を収納させるぞ」

《万物収納》で収納した。武器はそれぞれの技能で収納しているため、
服などだけ《万物収納》で収納している。

「んじや、部屋を出て…お、天之河達は訓練所の方にいるのか。そこに向かうか」

「どうして?」

「んー?お前らを人質にして逃げるみたいなの?」

「……………どうして自分を悪役にするの?」

「え、面白くない?ヒーロー天之河が悪から冬花俺と桜ヒロインを助けたけど、ヒロインは悪に恋をしていた。その後のヒーローの反応をみたい」

「私達、なんか言ったほうがいい?」

「あー……………何も言わないでくれ。俺に従ってくればいい」

「従うのは当たり前」

「作戦はこうだ。訓練所に行き、待ち伏せにあつて、適当なことを行つて飛んで逃げる」

「……………零斗って飛べるの?」

「ああ…んじや、そろそろ行くか」

俺達は桜の部屋を出て、訓練所の方へと行った。

「そこまでだ!!」

案の定、騎士達が俺達の周りを囲み、天之河が俺達の前に現れた。

「自分が逃げるために冬花達を人質に取るなんて…!!」

案の定、勘違いしている。

「冬花、桜!二人共もう安心してくれ!こっちに來るんだ!」

「……………」

「な、なんで二人は喋らないんだ?…夢咲!お前が彼女達になにかしたのか?」

「あー…冬花、天之河に向かつて【火球】を飛ばしてくれ」

俺がそう言うと、冬花が天之河に向かつて火球を飛ばした。それには天之河だけではなく、周りの騎士達も驚いていた。

「と、冬花?なぜこんなことを…?…そうか、夢咲!お前が彼女達を操っているんだな!!」

「光輝、お前は少し下がってろ」

そう言いながらメルドが出てきた。

「夢咲、無駄な抵抗をやめて俺と一緒に來てくれ。上にも悪いように

しないよう言ってみる。だから頼む！」

「あー：桜、槍をメルドに投げろ」

そう言うと、桜が槍を出してメルドの前に投げつけた。

「メルド、天之河。これが俺達の答えだ。この国も、お前らも信用できない。特に、俺に責任を押し付け、魔人族のスパイにした奴らとそれを信じた奴らだ」

「何を言っているんだ！お前が檜山に取らせに行っただのは本当だろう！それに、お前があんなロボットになったのも魔人族の力だろう！」

「はあ：冬花、結界」

冬花が結界を張ると、「風球」が当たった。多分、メルドの部下とは別の人物だろう。

「んだよ、話し合いに見せかけて俺を殺そうとしてたんじゃねえか」

「違う！俺はそんな「メルド、いいことを教えてやる」いいこと：だと？」

「ああ、信頼というのは築くのは難しい。だが、かなりの時間をかけて築き上げた信頼は：簡単に壊れる。そういうことだ」

「ッ!!」

「んじゃ、俺達はここから去るとしよう」

そう言うと、天之河が聖剣を俺に向けてきた。

「逃げれると思っているのか？」

「なに、お前は空飛べるのか？」

俺は《ラドン》に変身して、冬花と桜を脚でつかんで空高くまで飛び、《オルクス大迷宮》の中へと侵入した。

面白そうな場所ってなんですか？ (1)

俺達は城を抜け出したあと、《オルクス大迷宮》に逃げ込んだ。

「さて、どうする？」

「うくん…《オルクス大迷宮》を攻略する？」

「……………百階層まで行くの？」

「いや、百階層よりも面白そうな場所があるぞ」

「面白そうな場所？」

「とりあえず、20階層に行くぞ」

二人を連れて階層を降りていった。途中の魔物は全て冬花と桜に瞬殺された。階層を降りていき、20階層まで降りた。

「ここになにかあるの？」

「ほら、ここと言えば…」

「……………転移の罠がある階層だよな」

「そうだ…えーつと、どこに罠あったっけ？」

「えつと…あ、あそこの壁を壊したらあったはずだよ！」

冬花が教えてくれた壁を壊した。すると、そこにはあの時と同じ鉱石があった。

「よし、あれで一気に下まで降りるぞ」

「ベヒモスと戦うの？」

「ああ、今回はお前ら二人だけだ」

「……………わかった。やってみる」

俺が鉱石に触れると、魔法陣が展開されて65階層に転移した。案の定、《ベヒモス》と《トラウムソルジャー》が魔法陣から出てきた。「んじや、《トラウムソルジャー》は俺に任せろ。《ベヒモス》を倒してくれ」

「はーいー！」

「……………頑張るね」

二人が《ベヒモス》と戦うところを見たいので、《トラウムソルジャー》をすぐに倒したい。

「なら、一気にやるしかねえよなあ!!」

《ウルトラライブ！ウルトラマンビクトリー！ウルトランス！エレキングテイル!!》

「邪魔なんだよ!!」

黄色い鞭のように変化した右手で《トラウムソルジャー》を叩きつけた。

「技名とかそろそろ覚えたほうがいいな…」

《なら、俺が送ってやる》

「は？今?! うぐっ…」

頭の中にまた色々な情報が入ってくる。

「よし、これでだいたいわかるぞ」

《ウルトランス！キングジョーランチャー!!》

「蜂の巣にしてやる!!」

《キングジョーランチャー》の弾が《トラウムソルジャー》を一掃していく。見える範囲内で《トラウムソルジャー》はもういなかった。

「さて、桜達の様子は…」

振り返ってみると、《ベヒモス》が冬花の魔法らしきものに捕まり、焼かれていた。

『グルアアアアアアアアアッ!!!?』

「ねえねえ、魔物肉で料理の勉強は駄目なの？」

「……………出来ても魔物の肉は食べれないよ」

もう戦いが終わっているため、焼かれてる《ベヒモス》の横で料理の話が始めた。《ベヒモス》から香ばしい香りがしてくるのはなぜだろうか。

「《ベヒモス》じゃ相手にならないか…ちなみに、どうやって倒した？」

「……………冬花の魔法で身動きを封じて、お腹の辺りを切って焼いた」

「ねえねえ零斗! 《ベヒモス》って食べれないの？」

「諦めろ。今の人間じゃ食えない」

「……………零斗ならどうにかできるんじゃないの？」

「……………できるかできないかと言われたらできる」

なぜかわかった桜に少し恐怖を感じた。

「なら、食べてもいいんじゃないの？」

「…正直、お前らには魔物の肉じゃなくて普通の肉を食ってほしい」「そっか…」

「……………それで、零斗が言う面白そうな場所って?」

桜に聞かれて、橋の下を指した。二人は橋から顔を出して橋の下を見た。果てし無く暗闇が続いている橋の下と俺を交互に見てきた。

「なんだお前ら可愛い仕草して…」

「か、可愛いって…あう…」

「……………れ、零斗はどうしてそう簡単に…あう…」

なんだこの可愛い生き物達は…なんて名前の生き物だ? 野郎共が奪いに来そうな可愛さだな。

「そ、それでどうやって降りるの?」

「どうって…こう、お前ら二人を抱えて飛び降りる」

「……………へ?」

実際に二人を両手で抱えた。

「…希望があれば聞くけど?」

「私達が首に手を回す?」

「……………私はどっちでもいいけど…そもそも、私達二人を持てるの?」

「……………お前ら知らねえと思うけど、母さんに100キロのダンベルを両手に持たされて、ランニングマシンの上走らされたことあるからな? あと……………お前らって結構高身長なのにかかなり軽いからな?」

「軽いって…どのくらい?」

「言ったら桜と母さんにボコボコにされそうだからやめとく」

「……………言って、私も気にな」35あるかないかぐらいの軽さ」私達そんなに痩せてないよ?」

正直に話そう。35は嘘です。30あるかないかぐらい軽いです。

これも《チブセル症候群》の影響か?

「さて、話はここまでにして降りるぞ」

そう言うと、二人が俺の首に手を回してくる。念の為、体から触手を伸ばして二人と離れないようにする。そして、橋から飛び降りて、真っ暗な世界へと入っていった。

く???
く

今日もあの接近している謎の物体について考えていた。

「我が主、ご報告があります」

「ん?どうした?」

「子供の一人が反逆者として国を追放、反逆者の暗殺が開始されました。追放された子供と二人の子供が行方を眩まし、逃亡中とのことです。見つければ即処刑でしょう」

「なるほど…」

「もう一つ、あの謎の物体が子供の暗殺が開始と同時にスピードを上げました」

「なるほ……ん?スピードを上げた?」

「はい。このスピードでは1ヶ月以内には付くかと」

「………そうか」

イシユタルウウウ!!!おまつ、イシユタルランゴバルド!!!どうしてくれるんじやわれええ!!死ぬって、我絶対完膚なきまでにボコボコにされるって、【神言】聞く気しないもん!何なら逆に使われそうだもん!………あの子供を安全にすればいいのでは?…どうする、どうする?…そうだ。ノイントって結構美人だし、ノイント差し出す?ノイント嫁入りにする?え、でもあの子って人形だし、コウノトリ呼んで赤ん坊召喚する力もないし………どうしようかな。

「ノイント」

「は!」

「嫁入りしない?」

「仰ってる意味が全くもってわかりません。今すぐに衛生兵をお呼びします。えーせーへー!」

やっぱ、なんかノイントが知らない単語言い始めた。しかもなんか冷たい目で見られてる気がする。つか、あの子供………なんで元の世界に戻らないんだろう。戻るだろあんな力あるんだから。それとも、我を倒そうとしているとか?ああ、それだ。なんかタイプの人形作つてあげるべきかな。やっぱ男の子だし、大きい人形がいいよね。

「我が主、先程また謎の物体がスピードをあげました」

「……」

なるほど。人形が駄目と。

「フイント、嫁入りしてみな「えーせーへー！」……」

面白そうな場所ってなんですか？ (2)

二人を抱えて橋の下へと降りていった。《重力操作》で浮遊しながら降りていった。

「結構深いな」

「【火球】落としてみる？」

「……………【光球】とかないの？」

「あるよ！落としてみるね！」

冬花の手のひらから光る球体が落とされた。【光球】は周りを照らしながら下へと落ちていった。照らされた壁には幾つかの穴が空いていた。

「こつからしたあると思えねえな…壁の穴に入るか？」

「あ、見て！あの穴だけ大きいよ！」

「……………あの穴なら3人入れそう」

「よし、行くか！」

《重力操作》と《風魔法》で穴の中へと移動した。穴の奥は滑り台のようになっていた。

「俺が先に行くから、後から来てくれ」

そう言い、滑って穴の奥へと進んだ。中は一本道で迷うことも何もなく出口が見えてきた。出口の先に洞窟が続いていた。

「へえ、こんなところに洞窟が「零斗危ない！」へぶっ?!」

周りを見ようとしたときだった。後ろから冬花の声がして、振り返ると冬花が物凄いスピードで滑ってきた。咄嗟に【障壁】【結界】【聖絶】【重力操作】《風魔法》を発動させた。

「零斗大丈夫?!」

「あ、ああ…大丈夫へぶっ!!?」

「……………あ、ごめんね」

「大丈夫、大丈夫。無事に《面白そうな場所》に来れたぞ」

「……………このどこが《面白そうな場所》なの？」

「零斗って暗いところが好きなの？」

「いや、全くだが？とりあえず、進んでみるか」

【光球】で周りを明るくしながら、先に進んだ。数分ぐらい歩くと、近くの岩影から灰色の毛玉が飛び出してきた。

「なんだあれ」

「毛玉？」

「……………毛玉の魔物の？」

「ラットマンみたいなのかな？」

どんな魔物のなのか話していると、奥から一匹の狼のような魔物が出てきた。狼の魔物が毛玉を見ると、よだれを垂らして睨みつけていた。

「アイツ死んだな。毛玉のほうが気配でけえわ」

「そうなの？」

「ああ、見てろ。すぐに決着つくぞ」

そう言うと、毛玉が狼に向かって飛びついた。毛玉から足と手と耳が生えてウサギの魔物に変わった。豪速を越えるほどの勢いで狼に飛び蹴りをした。当たった狼は壁にぶつかり、動かなくなった。ウサギは右手を上げてガッツポーズを取り、雄叫びを上げた。

『キュイ？』

「あ、気づかれた」

ウサギは俺らを見ても攻撃してこなかった。そこまで戦闘狂ではないようで、岩陰へ逃げるように隠れた。

「あれ？」

「……………多分、零斗に怯えてるんだと思う。零斗、そのオーラを抑えて」

「これでも結構抑えてるぞ？」

「零斗のオーラって結構凄いよ？増殖するゴキ並に凄いよ」

「その例えはやめてくれ」

「……………冬花、今のは流石に駄目よ」

そう話しているいると、奥から一匹の熊のような魔物が現れた。俺達は武器を構えて、攻撃態勢に入った。

『グルルオオオ!!』

威嚇と共に斬撃のような物が飛んできた。斬撃は岩を砕き、俺らに

向かって飛んできた。

「【聖絶】！」

冬花の【聖絶】が斬撃を防ぐが、熊はお構い無しに何度も斬撃を飛ばしてくる。

「うっ…駄目、もう保たない！」

「……………任せて！」

桜が壁を走って熊に近づいて《神花》を振るう。熊はそれに気づいて爪で防ごうとするが、《神花》を振るうほうが早く、熊の首を跳ね飛ばした。

「俺なしでも戦えるな」

「うん！でも、結構危なかったよ」

「……………そろそろ無理かも」

「だよな…」

俺は《万物収納》から二つの《ループジャイロ》と幾つかの《ループクリスタル》を渡した。

「これなに？」

「俺の力の一瞬…かな？二人で勝てないって思ったときに使ってくれ」

「……………ありがとう。使い方を教えて」

「その前に、適当な場所にドーム状の空間を……………安全な場所を作るぞ」

近くの壁を《土魔法》でドーム状の空間を作った。

「零斗、あの結晶なに？」

「ん？…なんだろうな」

ドーム状の空間の中心に結晶があった。その結晶から何かが垂れていた。

「……………綺麗ね」

「取り敢えず飲んで、どんなのか確認する」

結晶から垂れてきた液体を飲み、ステータスプレートを見た。技能に新しく《神水生成》と《万物鑑定》が追加された。

「神水か…《鑑定…神水》」

そう言うと、ステータスプレートに神水の鑑定結果が出た。

対象：神水

分類：回復

説明：あらゆる病気、怪我を治す。なお、失くなった腕や足などは治らない。

あらゆる怪我を治すとはいったい。

「それで、結果はどうだったの？」

「病気とかを治す薬だな。これ地球にあつたらあらゆる病気も治せるかもな」

「それって…《チブセル症候群》も?！」

冬花に言われて気づく。《チブセル症候群》は《神水》で消えるのだろうか。消えたら二人は普通の人間に戻る。俺は飲んだが《チブセル》は消えなかった。適合者だからだろうか。

「冬花、桜…一回飲んでみてくれ」

コップを出してその中に《神水》を入れて飲んで貰った。

「二人のステータスを見せてくれ」

神咲 冬花 18歳 レベル：15

天職：魔術神・チブセル適合者

筋力：測定不能

体力：無限

耐性：測定不能

敏捷：測定不能

魔力：無限

魔耐：測定不能

技能：全魔法対応・全魔法適性・全属性適応・全属性強化・全属性耐性・滅魔法・禍魔法・破魔法・星魔法・分解魔法・複合魔法・魔力感知・魔力操作・魔力感知無効・魔力阻害・魔力分解・魔法分解・暗視・隠蔽・成長・学習・半不老不死・■■■■の加護・言語理解

神咲 桜 18歳 レベル：15

天職：武神・チブセル適合者

筋力：測定不能

体力：無限

耐性：測定不能

敏捷：測定不能

魔力：無限

魔耐：測定不能

技能：気配感知・気配感知無効・暗視・斬撃・音速・剣術・魔力操作・全武器適応・武器収納・武器召喚・武器入れ替え・武器創造・隠蔽・成長・学習・半不老不死・■■■の加護・言語理解

二人の天職に《チブセル適合者》が追加され、俺と同じステータスになり、技能に《成長》《学習》《魔力操作》《隠蔽》《半不老不死》などが増えていた。

ヒカリ、これどういうこと？

『二人に《ループジャイロ》と《ループクリスタル》：つまり、ウルトラマンの変身アイテムを渡したからではないか？君もベリアルに変身して《チブセル適合者》になっただろう？変身はまだ無理なようだね』

なるほど。そういうことか。

「……………《チブセル適合者》？」

「ねえ、零斗のステータスも見せて」

隠蔽せずにステータスプレートを渡した。

「なにこれ…」

「……………凄すぎる」

「……………二人共、よく聞いてくれ」

俺は二人に《チブセル症候群》と《チブセル適合者》、《変威獣》、《ベリアル》達についての全てを話した。

「そっか…《チブセル症候群》ってそういうことだったんだね…」

「……………つまり、私達は他人からみて化け物夫婦ってこと？」

「そういうことになるな……まあ、街などに行くときは《隠蔽》でステータスを隠す。いいな？」

「はいー！」

「……………」

「どうした？」

「元気よく返事をする冬花と違って桜はずっとステータスを見ていた。」

「……………私達、これでもう《変威獣》になる心配はないってこと？」

「そういうことだな」

「……………よかった」

これで俺達は《変威獣》になる心配は消えたと言っていていいだろう。

く???く

《ノイント嫁入り作戦》が失敗で終わった。いや、まだだ、まだこれからだ。あの子供と同盟できなあれ的呢のを結べればあの謎の物体も我を消さないだろう。

そう考えているとノイントが入ってきた。

「我が主、ご報告があります」

「お、もしかして嫁入りに「子供達の行方が完全に途絶えました」

……………それで、謎の物体は？」

「その謎の物体から生体反応を感知しました。生きてます」

「知ってた。それでノイント、嫁入りしないか？」

「……………我が主、なぜそこまでして私を嫁にしようと？もしかしてですが、そのためだけに我々、《真なる神の使徒》を作ったのですか？そういう性癖なんですか？そういうタイプが好みなんですか？」

「へ？な、なんか勘違いしてない？我じやな「大丈夫です。例えば、我が主が心のない人形をお嫁にしたとしても、我々を使ってハーレム的なのをしたとしても、我々の主は我が主、貴方だけで……………す」

おい。今の間なんだ」

「気のせいです。では」

そう言い、ノイントが出ていった。アイツ心がある人形だろ。

面白そうな場所ってなんですか？（終）

悲報。食料尽きた。以上。

「……………異常の間違いじゃない？」

なあーんで心の声が聞こえてんだー。

「私達が反応しなかっただけで、結構前から聞こえるよ？」

「うっそーん」

「……………零斗、ご飯どうするの？」

「これはやりたくなかったが…あの熊の肉を食ってみるか」

「大丈夫なの？」

熊を持ち上げながら言うと、冬花が不安な目で俺を見てきた。

「ちよつと、一口食べてみるわ。危なそうだから外で食べる」

そして熊を持って外に出て、腕の部分を食べた。

「うーん…不味ッ?!」

飲み込んだ瞬間、体全体に激しい痛みが生じた。地面に手を付き、耐えようとした。だが、なにか魔物の肉とは違う何かの影響も受けているような気がした。

「…あ…が…が…あ…グルルル……グルルル……グルルル
……………グアアアアアア!!」

く桜く

零斗が熊のお肉を食べに行つてすぐのことだった。迷宮、いや世界中を揺がすような鳴き声が聞こえた。私と冬花は耳を塞いだ。その声だけで壁や床、天井にヒビが入った。

「零斗!!」

私達は鳴き声が止んですぐに零斗のところに行こうとドームから出た。出てすぐに零斗を見つけた。そこにはいつもの零斗ではなく、手を地面につけて苦しむ零斗がいた。

「がっ……………あがああああ!!!」

零斗の背中から触手のような物が二本飛び出してきた。右の触手から虹色の膜、左の触手からは金色の膜のような物が生え、翼のようになった。それだけではなく、左右の翼が西洋のドラゴンのような翼に変わり、左右非対称の翼へと変化した。

「……………冬花、あの翼…私達を表してない?」

「え?…あ、確かに…右が桜が持っているマント、左が私が持つてるマントに似てる」

零斗の変化はそれだけではなく、手首から爪のような物が生えた。これも左右非対称で、右が5本、左が一本で、色も右は赤と黒の鉤爪、左は溶岩のようなドロドロとした模様が浮き出た爪だった。

「もしかして、《チブセル適合者》にしか成れない姿とかなんじや」

「……………ありえるわね、あの右の爪、《ベリアル》の手に似てる気がするわ」

腕の変化が終わると、また背中から触手が生えた。今度は4本で、これも全て形や色が異なっていた。一本はオレンジ色で先端が槍のようなになっている。二本目は真っ黒な触手だった。三本目は緑色で先端が口のようにになっている。四本目は黒っぽい青で先端に三本の爪が生えていた。

「ねえ、桜…もしかして、魔物のお肉を食べたら私達もあんな風になるのかな…?」

「……………わからない。だけど、零斗とは違う姿になる気がする」

そして、今度は零斗に尻尾のような物が生えるのと同時に背中から尻尾の先まで結晶のような物が生えた。それだけではなく、見えにくけれど、胸に黄色い模様が表れ、額に赤いクリスタルのようなものが表れた。

『あ……………お、終わったのか?』

「零斗!無事なの?!

『冬花、桜か。ああ、俺は大丈夫だ』

「……………カツコイイ」

熊の肉を喰らい、姿が変わってしまった。

『ふむ。前よりも動きやすくなったな』

「……………零斗、大丈夫なの?どこか痛いところとかない?」

『ああ、大丈夫だ』

「びつくりしたよ!鳴き声のようなのが聞こえたら壁や床、天井に亀裂入るし」

『す、すまん』

「元の姿に戻れないの?」

『わからん』

この姿から戻れないのかな?

そう思っていると、額のクリスタルが点滅し始めた。点滅する速度がどんどん早くなり、次第に消えていった。クリスタルから光がなくなると、俺の姿が人間に戻った。

「戻った?冬花、桜!戻」「零斗!!」

振り返ると二人に抱き締められた。

「よかった…!元に戻って…」

「……………びつくりしたよ」

「悪かったな」

「ここ何処も面白くないよ…早く脱出しよ!」

「……………うん。早く抜けよう」

しばらく抱き締められて、冬花と桜が落ち着いたのか、離れた。

???

なんか地上でめっちゃヤバい気配を感じ取ったんだけど!!?あの《謎の生物》よりもヤバイよ?我死んじゃうよ?

「我が主、先程地上で有り得ないほどのエネルギーを感知しました」

「我也感知した。場所はどこかわかるか?」

「いえ、わかりません」

これがもし《例の子》だったら、ヤバい。爪飛ばすだけで我倒されてしまいそうだ。

「……………やっぱリノイント、嫁「我が主、大変申し上げ難いのですが、

我が主には我々よりも相応しい相手がおりますので、そちらの方に
言ってみてはどうでしょうか」ノイント、私の説明が悪かったことを
認める。ちなみに、その相手と言うのは?」

「恐らく、30億年までには現れます」

なるほど。30億年までに現れるのか。って、それまで待つてられ
るわけ無いでしょ!

「ノイント、今から言う話をよく聞け」

我はノイントに《例の子》と《謎の生物》について説明した。

「なるほど、だからあんなに私に嫁入りしないかと言ったのですか
………勝手に嫁候補に入れないでください。控えめに言っただけの
勇者と同じですよ」

「はい。すみませんでした」

あれ、なんで我は使徒に謝っているのだろうか。まあ、気にしなく
ていいだろう。

「…して、ノイントよ。嫁入りするのかしらないのか、どっちなんだ?」

「我が主よ、そんな簡単に決めれると思ってるんですか?人形にも心
の準備が必要なんです。私、一応乙女ですよ?」

「え?乙女なの?」

「ぶっ刺されたいんですか?今すぐに死にたいんですか?《例の子》呼
びますよ?今すぐここに連れてきていいですか?」

「マジすんませんでした」

裏切られたってなんですか。

あれから下の階層へと降りていった。何階層か降りたときだった。デカイ扉と2つの銅像があった。

「なんだこれ」

「……………取り敢えず、銅像壊す」

「壊そっか！【滅裂】」

冬花がそう言うのと、斬撃のような物が銅像に向かって撃たれた。斬撃は銅像を壊し、扉をも壊した。

「……………」

「だれ？」

「いや、まず自分から名乗れよ」

「零斗、そういうこと言っちゃ駄目だよ」

「……………声からして女性よ」

扉の向う側を見ると、黒いキューブ状の何かに女の子？が封印されていた。

「…助けてツ!!」

「いや、助けるも何も…まずお前誰だよ」

「…名前は…ない」

「……………ねえ、零斗」

「ん？どうした？」

「……………この子…私と被る」

「「確かに…」なら、桜が変わってみない？その喋り方、正直面倒くさいんじゃない？」

「……………流石冬花ね。ぶっちゃけ面倒くさい」

「面倒くさいのか」

「零斗はどつちが好き？」

「桜だからどつちも好き」

「……………あ、あの…助けて…くれない…の？」

「「ごめん忘れてた」」

俺はキューブに手を翳し、《万物鑑定》でキューブがなんなのか調べ

た。

対象の魔力を吸収する。必要以上に吸収すると破裂する

「なるほど。魔力を注ぎ込めばいいと」

「…ッ！だ、駄目！膨大な魔力が必要…人の魔力じゃ何人いても無理…！」

「ああ、大丈夫。俺、魔力量無限とかいうチーターだから」

「……………え…？」

俺が魔力を流し込んだ瞬間、キューブが弾け飛んだ。

「……………うそ…」

「ま、魔力量無限は伊達じゃねえな」

「ねえ、それガン〇ムのネタ？」

「つもりではあったんだけどな…」

そしてキューブから解放された女の子は――

裸だった。

二人が予備の服を着せ、俺は二人の前で正座していた。

「見たの？零斗」

「はい。見ました」

「……………えっち」

「不可抗力じゃん」

「それで、この子名前どうするの？」

「…子供じゃない」

「そうなの？」

え、子供だと思ってた。

「…私、数百年前からここにいる」

「なんでそんなのわかるんだよ」

「…なんか文字出てきて、何年経ったか教えてくれた」
その機能はいるのだろうか。

「それで、なんでお前はここに封印されてんだ？」

「…私、悪くない！私、裏切られただけ！」

「裏切られた？」

聞けば少女は何処かの国のお偉いさんだったらしい。ある日、叔父が王様になり、突然少女を封印したらしい。

「そっか…」

「名前もないし、居場所もなしか…」

「あ、じゃあ！《ユエ》なんてどう？」

「…ユエ」

「いい名前だな。それで決定。んじゃ、これからよろしくな、ユエ」
「…ん！よろしくね」

〜???

我、やつちやつたぜ☆

「我が主、そんなのん気なこと言っている暇あると思ってるんですか？」

「いいえ、全く思っておりません。はい」

なぜ、ノイントに怒られているか。それは我が怒られる数分前の出来事だ。

「お、なんだこれ。誰かのおやつか？……使徒の物は我の物な〜ん
つって……え、うつつま！つて、これ地球とやらのお菓子じゃないか！」

机の上にあったお菓子を食べてしまった。食べてすぐに後ろから途轍もない殺意を感じた。振り返ると、見てわかるほどの怒りを露わにしたノイントがいた。

そして現在にいたる。

「……………我が主、今回はもう我慢できません。ここを出させてもらいます。あと、《真なる神の使徒》もやめさせてもらいます」

「え……………でも、お前らってここじゃないと本気出せないし、地上に降りても、存分に戦えないよ？…どうする気？」

「《例の子》に助けを求めます。では、今までお世話になりました。あと、あの《例の子》に嫁入りする話、受けます。では、ここで我が主との関係を切らせてもらいます。さようなら」

「え、待って嘘だろ？」

そう言いノイントが出ていってしまった。超主戦力のノイントが出ていってしまった。嫁入りの話なんか出すんじゃないかった。

頭の花つてなんですか？

ユエに服を着せて、名前をつけた。

「…ッ！レイト、避けて！」

「は？」

ユエが急に声を荒げたと思うと、後ろから何かが俺に向かって撃たれた。

「……………おいおい。んだよこれ」

謎の液体が俺の体に着くだけで、体にはなんの異常もなかった。だが、同じ液体がかかった地面が溶けていた。上を見ればサソリのような魔物の尻尾の針から出ていたようだ。

「…ど、どういうこと？…あの魔物の毒はあらゆるものを溶かす強酸を持ってたはず…」

「あー…それ、俺の技能のせいだわ。取り敢えずさあ、コイツやっちゃっていい？正直邪魔」

「どうぞー！」

手から触手を伸ばし、サソリの胴体を貫いた。貫くと、動かなくなっって落ちてきた。

「コイツの血を採取したらあの毒を使えたりして…」

そう言いながら触手で血を採取した。新しく《毒》系の技能を手に入れた。

「《毒無効》《毒操作》《猛毒操作》《劇毒操作》《麻醉》《溶解液》か…」

「…しゅげい…すげい…／／／」

囁んだな。

「取り敢えず、ここを出て下に行くぞ」

「「おー！」…でも、私まだ歩けない」

「おんぶしていいこうか？」

「…ん。お願い」

ユエをおんぶして、触手で縛り、部屋の外に出て下の階層へと降りた。

下の階層から迷宮の感じが変わった。何処か森のような感じだった。

た。

「零斗、前からなにか来るよ！」

冬花が言うと、前から恐竜のような魔物が走ってきた。

「ラプトル：いや、デイノニクスか？だが、デイノニクスでもあんな…
ユタラプトルか」

「零斗、これ恐竜じゃないわよ」

「ん？ああ、そうだな。無視でいいか」

壁際によると、恐竜モドキは俺達の前を素通りしていった。

「「あれ？」」

「：そういえば、あの恐竜モドキ野郎頭に花咲かせてたよな」

「天之河さんのお花畑？」

「それは恐竜モドキが可愛そうだろう」

「そうかな？」

「：ん。みんな、前からまた来るよ」

「桜、ユエを少し頼む」

「：ん。待つて、私にやらせて」

「お前、おんぶされてる状態のできるのか？」

「：ん」

そう言うと、俺の首に噛み付いて血を吸ってきた。

「：レイトの血、凄く美味しい。何処かの王族の人間？」

「いや、普通の人間。ただヤバイ能力を持つてるだけだ。取り敢えず、
見えてきた大量の恐竜モドキを頼む」

「：ん。【蒼炎】」

ユエがそう言うと、青色の炎が大量の恐竜モドキの頭の花を襲つた。

「：ん。どう？」

「前までの桜と喋り方が被り、今度は冬花と被る：いや、二人に変身アイテムを渡したから被ってはないか」

くノイントゥ

元主の世界から出て地上に来ましたけど、《例の子》はどこにいるの

でしょうか。取り敢えず、近くの街に…あ、その前に変装をしなければなりませんね。

私が姿を変える魔法を使おうとしたときでした。元主のところの《真なる神の使徒》の数名が来ました。

「なんのようですか？もう私は貴方達とは関わりません」

「お待ち下さい！我が主が貴方様のお菓子を食べたことに罪悪感を持ち、食べた物を買って貴方様に渡すとおっしゃっております！」

「……………世界や命をもて遊ぶ元主がこれぐらいのことで罪悪感を感じるわけないでしょう。それと、あのお菓子は例え元主でも手に入りません」

「そ、その理由は…？」

あれは私が地球で潜入調査を行っていたときに見つけたお菓子です。

「あれはあるお店でしか売っていない期間限定品です。それだけではなく、もうそのお店はありません。そして、あのお菓子自体がこちらの世界ではかなりの価値があり、その味を知ろうとする料理人も多くいるとされます。売れば1000万はくだらないでしょう。話は以上です。もう私に関わらないでください」

「しかし…」「くどいですよ」

元部下とはいえ、もう《敵》です。容赦いらないでしょう。

追ってきた《真なる神の使徒》を全て倒した後、近くの街で姿を変えましょうか。

く???
く

ヤバい。ノイントに仕事の殆ど押し付けてたから大変だ。仕事と言っても、イレギュラーや反逆者の対象だけけども。

「我が主、ノイント様についてなのですが…」

「お、おお…！なんだ？」

「はい。我が主がお食べになられたものはもう売られておらず、ノイント様が持っていたものが世界で最後の一つと思われまます」

「ああ…なるほど。だから、今までのお菓子を食べたときよりも怒っ

たのか」

「今までもやってたんですか」

「お腹すいた時に少しな」

だが、これでノイントが帰ってこないことが判明した。もうこの世界終わりだー。

寄生ってなんですか？

「……ふんー！」

ヤバい。ユエを怒らせてしまった。どうすればいいかな。話をしよう。これは遡ること数分前の出来事である。

俺達が花恐竜の群から逃げていたときのことだ。一つの抜け道のような物を見つけた俺達は、その中へと入っていった。

「追ってきてねえな。取り敢えず、一休みするか」

「…ん。でも、ここにだけ空洞なの少し怪しい」

「だね。何か居そうだよね」

「気配感知と魔力感知を常時発動させておいたほうがいいね」

それから少し休み、下の階層への階段を探そうとしたときだった。緑色の胞子のような物が飛んできた。

「ん？」

冬花達は横に飛んだが、俺は避けずに受けた。これで新しい技能が手に入りそうだ。

「…《洗脳》《寄生》《寄生対象操作》か。洗脳型の魔物か？つまり、あの胞子で操っているのか」

すると、俺の頭に花が咲いた。何か体が動かさそうとしている感じがした。だが、俺の体は動かせないようで、壊れたロボットのような感じでした。動かさせないらしい。

「この花を取ったらどうなるんだ？」

「れ、零斗…？大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ」

体を動かし、頭の花をもぎ取った。すると、体の自由を取り戻したようだ。体の自由は気合で取り戻せるらしい。

「桜も大丈夫か？」

「ええ、私は大丈夫よ」

「ユエは？」

「……………」

「ユエ？」

「……………逃げて！」

「は？」

ユエの魔法が飛んできた。振り返って見ると、ユエの頭に花が咲いていた。どうやら、さっきの胞子にあたっていたようだ。奥から緑色の女のような生物がやってきた。

「アイツが主犯か…？」

「…私はいいから、魔物を倒して…！」

そう言いながら、俺に向かって魔法を撃ってきた。

「はあ…別にお前を盾にされても——」

触手を出して、ユエの花と植物人間の首元を貫かせた。

「——こうやれば関係ねえんだわ」

そして現在に至る。ユエが拗ねてそっぽを向いてしまい、そこから全く話を聞いてくれない。

「いや、でもお前も撃って言ってただろ」

「…ん。普通は撃たない」

「そうなのか？」

「…レイトなんて知らない」

ああ…泣いちゃった。どうしようかな。

ユエをどうするか考えていると、膨大なエネルギーを感じた。今まで戦ってきた魔物や《変威獣》よりも強大な存在だろう。

「…桜、冬花…ユエを連れて先に行け」

「どうしたの？」

「少し、めんどくせえ相手が来たかもしれない」

「わかったわ」

桜と冬花がユエを連れて下の階層へと向かった。それと同時に俺の後ろの空間が割れた。

危機つてなんですか？

俺の後ろの空間が割れた。

「…誰だ？」

『奴らの記憶を見たのなら知っているだろう。我が名はヤプール』

『それで、何をしに来た』

『この世界にエヒト以上の危機が迫っている。それを言いに来ただけだ』

「…：エースの記憶によれば、お前は何度でも蘇るはずだろ。その危機に勝てないのか？」

俺がそう言うと、割れた空間が元に戻り、今度は俺の横の空間が割れてヤプールが出てきた。

『我が何人いようと同じ。敗北の文字だけだ』

それだけ強大な存在と言うことだろうか。

『ヤツの名は《メツドルス》だ』

『《メツドルス》？なんなんだソイツは』

『今までは惑星を壊してきた怪獣や宇宙人は多くいた。だが、《メツドルス》は惑星なんて規模じゃない。星雲自体を破壊する怪獣だ。ヤツは強大な怪獣を何匹もこの世界に送ってくるだろう』

『そうか…それを言いに来たのか？』

『ああ、この世界での《ウルトラマン》はお前だけだからな。人間なんて、ヤツが呼吸をすれば灰になる。戦えるのはお前だけだろうからな。我はもうここを離れる。一部の超獣を使い、この世界を守れ』

「…：侵略者側のお前が世界を守れか…」

『ヤプールの中では珍しいかもしれないが、我はこの世界が好きだ。だが、我ではどうすることもできない。この世界に光の国があればそこに助けを求めるが、この世界にはないようだ』

記憶の中ではヤプールは超危険人物。幾度となくウルトラ兄弟と戦い、新たな超獣を作り上げ、ウルトラ兄弟を苦しめてきた。だが、そのヤプールが世界を守りたい。ウルトラ兄弟が聞いても信用しないだろうな。

「それで、お前は逃げて《メツドルス》が倒されたら帰ってくるってか？」

『我がなにもしないわけ無いだろう！助けを求めに行くのだ。この世界にはまだ極悪な宇宙人共がいるはずだ。ソイツらを呼び、《メツドルス》を倒すんだ。そういうわけだ。我はここから出ていく』

そう言つて空間を元に戻して何処かへと消えていった。

???
???

「我が主、緊急事態です！」

「ノイントいなくなった以上の緊急事態ってなんかあるの？」

「先程、数千年前に我々を襲ったあの怪物が再びこの世界に急接近をしています！」

「はああ?! 《メツドルス》がまた来ているわけ?!」

《メツドルス》は大昔に幼体の状態で一度だけこの世界に来たことがあった。幼体だけでこの世界を壊滅の危機にまで追い込んだことがあった。その時は反逆者共と戦いの最中に来て、反逆者共と我が使徒達を壊滅にまで追い込んだ《メツドルス》がもう一度この世界に来るのか。

「また幼た「今度は成熟体のようです」今度は使徒何人犠牲で止まるんだろうな……前は180万の使徒で倒せたけど、今度は何人だろうな」

この世界は3体の存在に脅かされています。誰か助けてください。「そういえばなんですけど、ノイント様はもう一度作ればよろしいのでは？」

「あの姿になら秒で作れるけど、今のノイントを作るのに一万年かかったからな?! そんなの作ってたらこの世界も我も、《メツドルス》と《例の子》と《例の生命体》に破壊されるわ！」

ガーディアンってなんですか？

ヤプールから《メツドルス》とかいうマジヤバな怪獣の存在を知らされた。ヤプールが去り際に俺に渡してきた超獣とやらはどんなのだろうか。

中を開けると《Uキラーザウルス》《バラバ》《バキシム》《ベロクロン》という超獣が入っていた。

「……飯か？」

この《バキシム》とか言うのが一番旨そうだな。《ベロクロン》はドレッシングとかをかけたら旨そうだ。《バラバ》は醤油だな。《Uキラーザウルス》は触手が喉に引っかからないか心配だ。

『いや、食い物じゃねえよ！』

なんだベリアル、お前生きていたのか

『勝手に殺すな』

それで？超獣ってなに？

『すっげー強い生物兵器』

語彙力どうした？やっぱ死んだか？

『んなことはいいんだよ。で、お前はさっさとあの女共のところに行けよ。安心しろ、女共に手なんか出してねえよ』

出したら《メツドルス》ってヤツを無理矢理連れて来るぞ。

『やめろよ。《メツドルス》はキングやノアですら勝てるかわからない存在だぞ』

キングとノアって……ああ、ウルトラマンキングとウルトラマンノアね。

『つか、さっさと行け！』

《ベリアル》にそう言われて、冬花達のあとを追いかけた。追いかけて、下の階層に行くと、一つのでかい扉があり、その前で冬花達がいるた。

「あ！遅かったね！」

「ああ、悪い」

「それじゃ行きましょ」

「…ん。この奥に何が待っているのか…」

俺達は扉を開けた。扉の先は部屋のようになっていた。中に入ると、ドアが独りでに閉じた。そして、部屋の中心に魔法陣が展開され、そこから神話や伝承で語り継がれてきた《ヤマタノオロチ》のような魔物が現れた。

「…おつきい」

「いや、俺よりも小さくね？」

「あれは零斗がデカすぎるだけだよ！」

「そんな話しないで、武器持って！」

「いや…冬花と桜は前に渡したのを使ってみてくれ」

「わかった！やろう、桜！」

「ええ、私達神咲姉妹の力を見せてよう！」

「いや、それ俺の力…」

俺がそう言うが、二人には届かなかったようだ。冬花と桜がそれぞれ《ルーブジャイロ》を持ち、冬花が《タロウクリスタル》、桜が《ギンガクリスタル》を持ち、それぞれ《ルーブジャイロ》に《ルーブクリスタル》をはめて、冬花は《ウルトラマンロツソ（フレイム）》、桜は《ウルトラマンブル（アクア）》に変身した。

「…レイト、私もあれ欲しい」

「ユエはそのままできてくれ」

『行こう！桜！』

『ええ、冬花！』

二人は《ルーブスラッガー》を持ち、魔物に攻撃を始めた。

「ユエ、お前も二人のサポートとして魔法を頼む」

「…ん、了解…レイトはどうするの？」

「俺？俺は戦いを見守っとく」

ユエも参戦した。

『はあ！』

桜が一つの首に攻撃した。すると、首が動かなくなり、一体倒せた。だが、倒された瞬間、一つの首が鳴くと、倒された首が起き上がった。どうやら回復担当がいるらしい。

『邪魔しないで!』

今度は冬花が回復担当の首に目掛け【火球】を飛ばした。すると、回復担当の首とは違う首が回復担当の盾のように出てきた。顔の形からして盾役だ。

「…ん。冬花、桜、同時にあの回復を攻撃しよう!」

『賛成!』

『そうするべきね』

そう言い、攻撃をしようとしたときだった。冬花達が動かなくなつた。それだけではなく、冬花と桜の変身が解除された。《カラータイマー》は青色のまま、時間はまだのはずだった。

『どうした!?』

「「あ…あ…」」

冬花達は現実とは程遠い何かを見ているようだった。三人を連れて、何があつたのか確認しようとしたときだった。首の一つが口から熱線のような物を俺に向かって撃ってきた。

「ぐっ…」

俺はバリアを張り、熱線を防ぐが、これでは冬花達に何があつたのか調べられない。そこにもう一つの首が同じように熱線を俺に向かって撃ってきた。バリアが耐えれず、少し欠け、その欠片が俺の右目を潰した。

「…んだよ」

俺はバリアを解除した。解除と同時に、俺は怪獣の姿に変身した。変身してすぐに、背びれを光らせて、エネルギーを溜める。魔物はまた熱線の数を増やそうとした。

『邪魔つってんだろがああー!!!』

青白い熱線を魔物に向かって撃った。それを防ごうと、俺の熱戦と撃ち合いになる。だが、俺のほうが実力が上だったためか、撃ち合いに勝ち、魔物が消し炭になった。

「はあ…はあ…」

魔物を倒して、冬花達のところへと向かった。魔物を倒しても、効果は消えないらしい。

「くそ…どうすれば…」

おいヒカリ！これどうすればいい？！

『安心させればいいんじゃないか？』

それでいいのかヒカリ。

「安心…」

安心と言われ、冬花達と《ホルアド》の宿でやったことを思い出した。

「……冬花と桜は抱き締めるかキスで戻るとして、ユエはいつたい…いや、一人で考えるのはやめだ」

ユエを起こす方法を考えるのをやめて、冬花と桜にキスをした。すると、冬花と桜の目に光が戻った。

「え…？零斗？」

「よかった…」

「え、え、どういう…ツ!!零斗、右目が！」

「ん？ああ、別にいい」

「でも！」

「んなことよりもユエだ！どうすれ「キスしたらいいんじゃない？」は？」

突然、冬花がそんなことを言い始めた。

「桜、零斗を捕まえて」

「もう捕まえてる」

「あの？お二人さん？」

「ほっぺだけだから！」

そういい、ユエのほっぺにキスをさせられた。

「…あ……………レイト…？」

「ああ、そうだ」

俺がそう言うと、ユエが泣き始めてしまった。どうすれば良いのだろうか。

くノイントく

ブルツクの街で服や姿を変え、残り少ないお金で食べ歩きというの

をしています。

《例の子》はまだ地下なのででしょうか。そろそろ暇ですね。元主のところでは仕事を沢山押し付けられていますから、暇があるなんて最高ですね。もう元主のところには戻りたくないです。

お店で売っていた《アイス》とやらを食べながら街の中を散歩していると、冒険者ギルドの前に来ていました。

「……冒険者登録をして、お仕事依頼でもしましょうか」

楽しみですね。初めての元主以外からのお仕事依頼です。少し、張り切りましょうか。

真実ってなんですか？

あの《ヤマタノオロチ》のような魔物を倒したあと、魔物で隠れていた扉が開かれた。奥に進むと、先程との魔法陣とは違う魔法陣があった。

「これって転移魔法？」

「……いや、別の魔法だな。召喚でも転移でもない。少し、調べるから3人は離れ「何言ってるの！」桜？」

「どんなときも私達は一緒よ。零斗一人になんてしないわ」

「そうか……この魔法陣は乗ればいいかな？」

俺が乗ると、三人も続くように乗った。すると、目の前に映像のような物が出てきた。

『試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名は《オスカー・オルクス》。この迷宮を創った者だ』

「オスカー・オルクス？」

『あれから何年経ったのか、我々の名を知っているものは少ないだろう。反逆者と言えはわかるかな』

「反逆者…神代の時代に神に逆らったって言われてた人達の内の人ってこと?!」

桜がそう言うが、オスカーは何も返してくれない。

『あ、質問は許してくれ。これはただの記録映像のようなもので、生憎君…いや、君達なのかな？の質問には答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか…メッセージとして残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい……我々は反逆者であつて反逆者ではないということ』

「はっ」

オスカーの話によれば、神代の少し後の時代のこと、世界は争いで満たされていた。人間や魔人、様々な亜人達が絶えず戦争を続けていた。争う理由は多くあり、領土の拡大、種族的価値観、支配欲、他にも色々あり、その中での一番は《神敵》だからだった。今よりもずつ

と種族や国が細かく分かれていた。それぞれの種族、国がそれぞれに神を祭っていた。その神からの神託で人々は争い続けていた。

だが、そんな何百、何千年と続く争いに終止符を討とうとする者達が現れた。それが当時、《解放者》と呼ばれ、今では《反逆者》と呼ばれた集団である。

彼らには共通する繋がりがあった。それは全員が神代から続く神々の直系の子孫であったということ、人間や亜人、魔人とかけ離れた姿を持つ《宇宙人》と関わりを持っていたということだ。《解放者のリーダー》は、ある時《宇宙人》に神々の真意を教えられた。神々は、人間、魔人を駒にして、この世界を玩具のつもりで戦争をさせていた。《解放者のリーダー》は、神々が裏で人々を巧みに操り戦争へと駆り立てていることに耐えられなくなり志を同じくする者、《宇宙人》を集めた。

彼等は、《神域》と呼ばれる神々がいると言われている場所を突き止めた。《解放者のメンバー》でも先祖返りと言われる強力な力を持った七人、魔物以上に強い《怪獣》を操れる《宇宙人》を中心に、彼等は神々に戦いを挑んだ。

しかし、その目論見は戦う前に破綻してしまう。神々は人々を巧みに操り、《解放者》達を世界に破滅をもたらそうとする神敵であると認識させ、《宇宙人》は破壊者と認識させて人々自身に相手をさせた。その過程にも紆余曲折はあったのだが、守るべき人々に力を振るう訳にもいかず、神の恩恵も忘れて世界を滅ぼさんと神に仇なした《反逆者》のレットルを貼られ《解放者》達は討たれていった。

だが、最後まで抗った者達は《神の使徒》と戦った。その際、空から落ちてきた怪獣に食われ、消えていった。

最後まで残ったのは中心の七人と《宇宙人》達だけだった。世界を敵に回し、彼等は自分達では神を討つことはできないと判断した。そして、バラバラに大陸の果てにそれぞれの《宇宙人》と共に迷宮を創り潜伏することにしたのだ。試練を用意し、それを突破した強者に自分達の力を譲り、いつの日か神の遊戯を終わらせる者が現れることを願った。

『ここからは、私ではなく《彼》が説明してくれるだろう』

そう言い、オスカーの映像が消えた。消えたのと同時に、一つの扉が開かれ、奥から誰かが歩いてくる足音が聞こえた。

「誰だ？」

扉の奥から出てきた者は、異世界にはないはずのロボットのような物だった。だが、顔の部分に何かが入っていた。

『私はチブル星人。名はない』

「お前が…オスカーが言っていた《宇宙人》か？」

『そうです。このスーツは私が設計し、オスカーが作りました』

「それで、オスカーが言っていた説明って？」

そう言うと、スーツの手から映像のような物が出てきた。

「これは…」

『この世界の地図です』

地図には陸地に不自然な穴のような物があった。

「この穴は？」

『……先程、オスカーが話した空から落ちてきた怪獣…いえ、宇宙から降りてきた怪獣によって空けられた穴です』

「穴ですって…これ、《ハイリヒ王国》よりも大きいじゃないですか！」

『それほどヤツが危険な存在なのです。名は《メツドルス》です』

《メツドルス》ってこんなにヤバいのかよ。

『《アンカジ公国》の近くの砂漠、昔はここまで広くありませんでした。街や森があったのです』

「どういうことですか？」

『《メツドルス》によって街と森は焼け野原になり、砂漠へと変えられたのです……さ、話はこの辺りにして終わりましょう。こちらに来てください、オスカーが攻略者の為に作った部屋があります。そこでお休みになってください』

チブル星人が扉を開け、俺らを招き入れた。そこには人工太陽があり、ベッドや風呂、畑など沢山あった。

くチブル星人く

『ピッピ、こちらチブル星人。解放者リーダー《ミレディ》、オスカアの迷宮に攻略者が現れました。それも、《彼》が見た者達と同じでした』

『彼は《ウルトラマン》達の力を感じます』

『ええ、彼らならあの神、そして《メツドルス》を倒せるかと思われません』

『わかっています。彼らが《神》と戦うとき、私も——で加勢します』

『もうすぐ、貴方のところに行くかもしれません。なので、くれぐれも！煽らないでくださいね!! 貴方のその癖で彼が神側についてしまったら、我々に勝ち目はないんですからね!!』

『ほんと頼みますよ? 《彼》によれば、あの方が貴方の運命の相手らしいので』

『ええ、信じてませんよ。出会いが会いなので……報告は以上です』

新しい種族ってなんですか？

チブル星人に案内されたあと、俺達はベッドにダイブして、すぐに眠りについた。

『ほら、これ付けてよオロチ！オロチのために作ってみたんだ！』

『え、でも…私、こんな姿だよ？こんな綺麗な花冠…似合わないよ』

『大丈夫！似合うよ！俺が保証する！だって、オロチは可愛いから――』

どこか、懐かしい夢だった。だが、俺は知らない光景だった。でも、何処かで聞いたことあるような声だった。

「ん～…ん？」

謎の夢をもう一度見ようと思ったが、中々寝付けなかった。逆に目が覚めた。体に今まで感じたことない何かを感じ、目を開けた。目の前にユエがおり、左腕に冬花、右腕に桜が抱き着いていた。

「…………身動きできない。おい、お前ら起きろ」

「ん～…」

「…ん」

身動きできないため、このまま二度寝しようとした。すると、チブル星人が部屋に入ってきた。

『あの…』

「ん？」

『別に、私のことは気にせずによってもらっているんですけど…あまり騒がないでくださいね』

「え？ちよ、待て。やるって何を?!」

俺が言う前にチブル星人が出ていってしまった。そして、冬花達を見ると、三人共目を覚まして俺を見ていた。

「……………」

「さ、起きたのなら…飯を食いに行くぞ」

「待つて！」

起き上がろうとしたら、冬花と桜に腕を掴まれた。

「どうした?」

「…ん。レイト、聞いてほしいの」

「お、おう」

「昨日、零斗が寝てたあとに私達で話し合っていたの」

「それでね、ユエも含めて、みんなで零斗のお嫁さんになろうって話になったの!」

「話し合うなら俺にも相談して?」

「決めるのは私達だよ。零斗だと、一部の人も断っちゃいそうだからね」

「え、駄目なの?」

「好意を向けてくれる人を突き放すなんて駄目。それに《チブセル適合者》同士とか、《チブセル適合者》と普通の人間で子供できるのか知りたいもん」

俺は研究材料か?

「…ん。そういえば、三人はどうしてここにいるの?」

「ああ…」

ユエに聞かれて、俺達は俺達がなんなのか、ここまでの経緯、《チブセル症候群》、《チブセル適合者》について全て説明した。すると、ユエが泣いてしまった。

「ぐすん…レイト、トウカ、サクラ、悲しい…私も悲しい」

「お前のと比べれば優しい方だ」

「あ、そうだ! いいこと思い付いた!」

「「いいこと?」」

「そう! ほら、零斗って小悪党組やクラスメートに毎日のように《チブセル症候群は学校を来るな》とか《チブセル症候群は人間やめろ》とか言われてるでしょ?」

俺達は冬花が何を言いたいのかわかった。

「みんなが思ってる通り、私達三人は学校も人間もやめるのよ! ほら、みんな《チブセル症候群は》って言ってたし、私も桜もみんな知らないだけで《チブセル症候群》だし、零斗だけじゃなくて、私達のことも指してるからね!」

「なるほど、それいいな。あんな奴らと同じ種族になるのも嫌だしな」
「じゃあ、新しい種族を作る？」

「…ん。名前は《チブセル》がいいと思う」

「だな…よし！俺達は人間をやめるぞー！あと、学校もな」

「…てことは、その勇者達とはもう赤の他人？」

「…そうなるね」

「あー…母さんが驚きそうだな」

今日、俺達は学校と人間をやめ、新しい種族として誕生した。

閑話。勇者と愉快じゃない仲間

く恵里く

お兄ちゃん達がお城を出て数日、私達はまた《オルクス大迷宮》に
来た。天之河率いる勇者パーティー、そしてお兄ちゃんの戦いを見て
戦いたくないって人達は愛ちゃん護衛隊として、愛ちゃんと一緒に
《ウル》と呼ばれる街に行った。

そして、あの日からみんながお兄ちゃんに対する殺意で溢れてい
た。お兄ちゃん達が知らないだけで、冬花と桜は結構人気があった。
雫達と一緒に《四大女神》と呼ばれたときだってあった。その冬花と
桜を洗脳して消えたお兄ちゃんはみんなから恨まれていた。

「はあ…」

私はこんなことになるならお兄ちゃんに付いていけばよかったと
溜息を吐いた。私の溜息に一番最初に気づいたのは鈴だった。

「恵里、大丈夫？」

「うん…大丈夫だよ鈴。まさかお兄ちゃんがね」

溜息を付く理由はもう一つある。お兄ちゃんの部屋の棚の中に入
れていた私の非常食も一緒に持って行ってしまったことだ。まだ食
べてないのなら、再会したときに返してもらえればいい（その非常食
はもう食われました）。

「恵里、兄を思う気持ちにはわかる…だけど、アイツは俺達を裏切った。
だから俺達、クラスメートである俺達が倒さなくちゃいけないんだ
！」

「…そういうばさ、天之河くんってなんで檜山のことは信じてお兄
ちゃんのことには信じなかったの？」

「なんでって…それは檜山が言うとおり、アイツは冬花や桜の気を引
くためで、実際アイツは二人を洗脳して、連れて行ったからだ。恵里
もアイツには気をつけるんだ。《チブセル症候群》のアイツは何をす
るかわからない。《チブセル症候群》なんて、いないほうがいいんだ
よ。そのほうがみんな幸せなんだ」

「…そっか、そうだよね」

私達のような《化け物》はやっぱりいないほうがいいんだよね……は？なにコイツ、目の前の私は《チブセル症候群》なのに、よく堂々とそんなこと言えるよね。お前みたいなやつがいなくなったほうがみんな幸せになるんじゃないの？

「そんなこと言っちゃだめだよ光輝くん！《チブセル症候群》の人達だって好きで《チブセル症候群》になったわけじゃないんだから！いなくなっただけがいいなんて駄目だよ！」

「香織、君が優しいところは俺は好きだ。だが、《チブセル症候群》のせいで亡くなった人達は大勢いる。《チブセル症候群》がなかったら、彼らだって生きていたはずなんだ。《チブセル症候群》は無差別に人の命を奪っていつているんだ！」

それ、ブーメランってやつだよ。今の私達だって魔物の命を奪ってるんだから、同じだよ。

「お前達！この先はあの《65階層》だ！気を引き締めろ！」

そして、私達は《65階層》へと降りていった。降りると、崩落したはずの橋が元に戻っていた。

「橋が元に戻ってるってことは……」

案の定、魔法陣が展開されて、《ベヒモス》出てきた。《ベヒモス》が出てきたことにより、数人があの日を思い出したのか、足が震えていた。

「みんな！行くぞ！」

天之河くんが聖剣を振り上げたときだった。橋の下から突風が来て、橋が揺れた。突風というよりも、魔力の波動だった。魔力の波動が来たあと、《ベヒモス》や《トラウムソルジャー》がその波動に怯えているようで、一歩、また一歩と下がっていった。

「ど、どういふことだ？」

あの魔力の感じはお兄ちゃんだ。つまり、お兄ちゃん達はまだこの迷宮にいる。

そのころの零斗達←

「ああ……今日は駄目の日だったか……」

「ご、ごめんね！」

「零斗、魔力使いすぎじゃない？」

「いや、だって見ろよ！俺の喉を！溶けてるだろ？《神水》でも全然回復できねえんだよ」

「…ん。トウカの失敗作は猛毒として売り捌こう」

「え?!やめてよ！恥ずかしいよ！」

「あ、《冬花作猛毒無効》がついた」

「もう料理として見られてない?!」

なんだろう、冬花の料理で喉が溶けたお兄ちゃんの姿が見えたような気がした。

「みんな！今がチャンスだ！一気に畳み掛けよう!!」

お兄ちゃんの魔力の波動で弱った《ベヒモス》は尖った石を踏んで自滅してしまった。

「すげえよ天之河！聖剣を持つだけで《ベヒモス》を倒せるほど強くなったのか！」

「え？あ、ああ…！俺達は《ベヒモス》を倒したんだ！」

いや、なに夢見てんの？アイツ自滅しただけじゃん。なに自分が倒しましたみたいにいるの？

旅立つってなんですか？

俺達は数日間もここで寝泊まりしていて、平和過ぎて暇になってきた。

『そろそろ旅立たれるんですか？』

「ああ、世話になったな」

『いえいえ…あ、こちらに来てください。オスカーが作ったアーティファクトがあります。旅の役に立つかもしれない』

チブル星人にそう言われて、今まで開かなかった部屋に連れて行ってくれた。その部屋の中には地球で言う車や銃などが置いてあった。アーティファクト類を見ると、チブル星人が指輪のような物を持ってきた。

『これはオスカー作の《宝物庫》です。指に付けて使います。ありとあらゆる物を収納できます。もちろん、取り出せます』

「え、これ全部持っていいとか言わねえよな？」

『ぶつちやけ、ここに来る人多分いないので全部持って行ってください』

「あ、ありがとう…」

そう言い、チブル星人が倉庫の中にあるアーティファクトを全て《宝物庫》の中に入れてくれた。《宝物庫》に全て入れると、チブル星人が掃除道具を持って、部屋の掃除を始めた。長年掃除できてなかったためか、埃が多かった。

『助かります。正直、掃除できなくて困ってたんですよ』

「そ、そうなのか…あ、他の迷宮の場所とか教えてくれないか？」

『ああ、それでしたらこちらに地図があるのでお渡しします。昔の地図なので、地形が変わってたり、名前が変わってたりしても気にしないでください』

そう言われて一つの地図を渡された。その地図を見て、一番近い迷宮の場所を探した。

「《ハルツィナ樹海》が一番近いのか…よし、次の行き先は《ハルツィナ樹海》だな。なあ、チブル星人、《ハルツィナ樹海》ってどんな迷宮

なんだ？」

『すみません、それはわかりません。オスカー以外が作った迷宮は私ではわかりません』

「そうなんか」

『あ、《ライセン大迷宮》でお願いごとがあります』

「ん？」

『彼女はよく人を煽ります。ですが、どうか…どうか！神側に着かないでください』

「いや、神につくことなんかねえから…会いに行くが…それはアイツをボコボコしに行くためだ。なぜならせつかくの冬花の最高弁当を台無しにしたあげく、異世界に連れてきて、勝手に戦争の駒にしたことが許せねえんだ」

『ありがとうございます。この世界のことを頼みます』

「まあ、神をぶっ飛ばすことは約束しよう…で、出口ってどこ？」

『あ、こつちです』

冬花達に声をかけ、荷物を纏めて、チブル星人について行った。チブル星人が一つの部屋を開けた。その部屋に転移魔法の魔法陣があった。

『これに乗れば外に出れます』

「…ん。楽しかった」

「色々お世話になりました！」

「ありがとうございます」

「世話になったな」

『いえいえ、それでは、またいつか』

チブル星人がそう言うと、魔法陣が輝き、俺達は別の場所へとワープした。ワープした先はまた洞窟だった。

「何処かに隠し通路とか？」

「零斗、あそこの岩から光が差し込んでるよ」

「あ、ホントだ！」

その岩に触れると、岩が動き、道ができた。その道を進むと、日差しが強くなっていた。

「外だあ！」

「やったわね！」

「脱出成功だね！」

「…ん！」

俺達は脱出成功した。久々の日差しに、日焼けしそうだ。

ライセン大迷宮 兎☆耳

《オルクス大迷宮》をクリアし、《生成魔法》や《宝物庫》などを貰い、外に出た。外に出てすぐに《日焼け無効》《防熱》《断熱》《防寒》などを手に入れた。

「で、どうする？何で移動する？」

「なにがあるの？」

「えつとなあ：《四輪大型車》《二輪車》《ホバーカー》《ホバーバイク》《キングジョー》《プロメテウス》《ジャンバード》《ジャンスター》《静雲荘》《キングジョーストレイジカスタム》《ナーステツセイ号》《バートルラクトマックス》《バスターボラー》《スカイヴィッター》《ダイナストライカー》《ダイナウイング》とかあるぞ」

「ん〜：ホバーバイクかな」

「え？あれって結構難しいんじゃないの？」

「…ん。知らないものばかり」

「じゃー：ホバーバイクでお願い」

《宝物庫》からホバーバイクを取り出した。ただ、これは二人乗りだった。

「…ん。誰がレイトと乗る？」

「じゃんけんで順番を決めようよ！」

「それじゃ、一日毎に交代ね」

そして、三人による順番決めじゃんけんが始まった。じゃんけんはすぐに決まり、最初に乗るのは桜になった。

「安全運転でお願い」

「安心しろ…それはそうと、お前は後ろに乗るか、前に乗るのか、どっちにするんだ？」

「前がいい、後ろだと、少し身長が足りなくて景色が見えない」

「そうか。でも、俺はバイクの操縦しないとだから、触手で体を巻きつけるぞ」

桜が俺の前に座り、俺が背中からシートベルトのように触手を出した。

「そういえば冬花とユエは？」

「負けた二人が気になり、振り返った。」

「ユエ、大丈夫？」

「…ん。後ろにクッションがあるから寝れそう」

「私の胸をクッションって言うのやめて?!」

「…ん。わかった」

あつちはあつちで大丈夫なようだ。俺達は《ホバーバイク》を走らせ、谷からの出口を探した。探していると、奥の崖が突然崩れた。崩れた場所から土煙が立ち上がっていた。

「魔物か？」

「零斗見て！」

桜が指を指した土煙から人間にはない白くて長い耳を持った生物がその耳が似合うようにピョンピョン飛びながらこっちに向かって走っていた。

「零斗、どう「えーい！」…え？」

「触手を新しく生やし【超音波メス】で魔物の脳天を貫いた。」

「どうして？」

「ん？あれ本物だろ？地球にはない異世界にしかない希少種だろ？助けたほうがいいだろ？」

「ウサミミぐらいなら私達でも生やせるよ？」

「…ん。でも、兎人族は崖には住めないはず。崖にいるのはだいたい罪人」

「罪人ってこと？」

「ん…なんか、困ってるっぽいし、罪人でも《奴隷》にすればいいし…でもあのウサミミからは悪意を感じないからな」

「魔物が倒れたことに驚いているウサミミのところへと行った。」

「…はっ！助けていただきありがとうございます!!兎人族、ハウリアの長の娘のシア・ハウリアですう！助けてもらったばかりですが、私の家族も助けてほしいですう！」

「別にいいけど、なんでお前ら草食動物の兎がこんな草木も木も、何もない崖にいるんだ？」

「そ、それは…」

「零斗、怖がらせない。シア、順を追って説明して」

「はいですう！」

そして、シアを俺の後ろに座らせて、桜と同じように触手で体を縛って、走りながら話を聞いた。どうやら、《ハルツィナ樹海》に住んでいたが、そこにいた《亜人族》に魔法を使えることがバレ、一族全員追放されることになったらしい。《亜人族》は魔力を持たないはずだった。シアは異常な存在のようだ。

「それで、《ハルツィナ樹海》から追い出されたあと、《帝国兵》に見つかって、家族の何人もが捕まって…多分、奴隷として…」

「そうか…」

「運良く、ここに逃げ込んだんですけど、《ハイベリア》と呼ばれる魔物に見つかり、最初いた60人以上の家族がもう40人もいるかいなにかぐらいまで減ってしまい…」

「で、お前だけの逸れて逃げてたら俺達がいたってことか？」

「あ、ちよつと違います」

「…ん。どういうこと？魔力を持っていることと何か関係あるの？」

「はいですう！私、《未来視》って言う未来を見る力があるんですう。その《未来視》で皆さんを見つけたんですう！」

《未来視》がシアの固有魔法なのだろうか。それだと、食われる前に助けて正解だった。シアの案内のもと、バイクを走らせていると、複数の魔物の声がした。

「あの魔物の声…ち、近いですう！」

「よおつし！シア、お前これ持って俺が言う言葉を言え」

「へ？」

「いいから！」

「あ、はいですう！」

曲がり角を曲がると、ワイバーンのような魔物がシアと同じ生物を襲っていた。

「い、いました！みんなですう！」

「シア、『耳塞げ』だ。ほら、言え！」

シアが即興で作った《メガホンモドキ》を使い、俺が言ったことを復唱した。それを聞き、見えている何人かがウサミミをペタンと畳んでいた。

「お前らも耳塞げ！」

冬花は、自動走行モードに変えて、耳を塞いだ。全員、塞いだのを確認して、俺は魔力を喉に集めた。

グルアアアアア!!!

魔力を乗せた咆哮を出した。すると、ワイバーンのような魔物が白目を向いて落ちていった。

「なにをしたの？」

「魔力を乗せた咆哮を飛ばしたんだ」

「…ん。ハイベリアが落ちた理由は？」

「多分、さっきの咆哮で神経切れた」

そして、ハイベリアが完全に動かなくなり、シアの家族が岩陰などからぞろぞろと出てきた。

奴☆隷

シアの家族を助けたあと、崖を登ることになり、登れそうな場所を探していた。

「あ、そうだ。お前ら、これを首につけておいてくれ」

「これ、なんですか？」

「奴隷の首輪だ」

「?!?!」

「ど、どうしてですか!?!もしかして、私達を帝国兵に?!」

シアがそう言うと、シアの家族達が一步一步後ろに下がっていった。

「何言ってるの? シア、私達になんて言ったか覚えてる?」

「え? 帝国兵に家族が捕まって…」

「理由は貴方達が誰の物奴隷じゃないでもないからよ。だから、零斗は貴方達を自分の奴隷にして、守ろうとしているの」

「そ、そうだったんですね! あ、そういえば皆さんのことはなんて呼べばいいですか?」

シアに言われて自己紹介をしていないことを思い出した。

「そうだな、俺は零斗、んでこっちは冬花、桜、ユエでいい。よろしくな、シア、シアの家族達」

「はい! よろしくおねがいします! レイトさん、トウカさん、サクラさん、ユエさん!」

そして、全員が首輪をつけた。壁沿いに歩いていると、崖を登れそうな階段を見つけた。

「あ、レイトさん!」

「ん?」

「あの…この先に、帝国兵がいます…」

「そうか」

「そうかって…いいんですか?」

「なにが?」

「えっと…相手は人間ですよ? レイトさん達と同じ人間と敵対するん

ですか？」

「ああ…そういえば言っけてなかった、俺達は人間じゃねえんだ」
「え？」

シア達は俺が言っていることの意味がわからないようで、お互いの顔を見ながら首をかしげた。そして、俺達が地上に上がると、キャンプのようなことをしている帝国兵達がいた。

「ん？お、小隊長！兎人族達が生きて上がってきやしたぜ！白髪の兎人もいますよ！隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますついてるな。年寄りには別にいいが、あれは絶対殺すなよ？殺つちまったら隊長に殺されちまう」

「もちろんすよ…：…小隊長、女も結構いますし、ちよーつと味見してもいいつすよねえ？白髪以外ですし、俺達、何もないとこで三日も待たされたんだ。役得の一つや二つ大目に見てくださいいよお！」

「はあ…ったく。全部はやめとけ。2、3人ぐらいなら好きにしろ」
「ひやつほー！さつつすがあー」

帝国兵はシア達しか眼中にないらしく、俺達は見えてない。俺の場合は《認識阻害》で帝国兵に認識されていないだけだ。と言っても、冬花と桜にはバレるらしい。

俺は《認識阻害》を解いて、帝国兵達の前に立った。

「あ？何だお前、兎人族…じゃねえな」

「ツ！小隊長！見てください！兎人族の首に奴隷の首輪が嵌められてますー！」

「…：…テメエの仕業か」

「そうだ、コイツらは俺の奴隷だ」

「…：…ああ、もしかして奴隷商か？情報掴んで追っかけたとか？そいつあまた商売魂がたくましいねえ。まあ、いいや。そいつら皆、国で引き取るから「断る」…：…なんだと？」

「断ると言ったのが聞こえなかったか？」

そう言うと、帝国兵の目が変わった。

「…：…ガキ、口の利き方には気をつけろ。俺達が誰かわからないほど頭が悪いのか？」

「黙れよクソザコ。どうせ、兎人族という無害な種族を追いかけることしかできないほど雑魚なんだろう？」

「……………ああくなるほど、よおくわかった。てめえが唯の世間知らず糞ガキだつてことがなあ!!ちよいと世の中の厳しさつてのを教えよやる!……………くくく、そつちの嬢ちゃんえらいべつぴんじやねえか。てめえの四肢を切り落とした後、目の前で「喰らえ、ギドラ」あ？」

俺がそう言うと、帝国兵達のキャンプの横に黒い球体のようなものが現れた。いや、黒い球体というよりも穴だった。そこから、帝国兵達に向かって黄金の半透明の巨大な蛇のような生物、ギドラが地面を抉るように口を開けながら、帝国兵達とキャンプを食らった。帝国兵達を食べると、ギドラは穴の中へと戻っていった。

「よし、これで帝国兵は消えて「じゃないわよ!」え?」

「零斗、この新しく出来た谷はどうする気なの?」

見ればギドラが抉った場所が新しい谷になっていた。

「……………まあ、気にしなくていいだろう」

そして、《宝物庫》から馬車を複数だしてハウリアを乗せた。そして、今度は車をだして、馬車と車を紐で繋ぎ、車で馬車を引っ張って《ハルツィナ樹海》に行くことになった。

樹☆海

シア達が住んでいた《ハルツイナ樹海》の前にまで来た。馬車と車を《宝物庫》の中に仕舞うと、《ハルツイナ樹海》の中に入っていった。「レイト殿…様のほうがいいですか？」

「どっちでもいい」

「では、改めて…レイト殿、ここから先は我々から離れないでください」

「ああ…で、複数の魔力反応がこつちに近づいて来ているが…どうするんだ？」

「え？」

奥から虎模様の耳と尻尾が生えている亜人だった。その亜人達は俺達に武器の刃を向けてきた。

「お前達、何故人間という！種族と族名を名乗れ!!」

「あ、あの我々は!!」

「白い髪の兎人族?!…貴様ら、報告のあったハウリア族か!…亜人族の面汚し共め!長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは…!!反逆罪だ!もはや弁明など聞く必要もない!全員この場で処刑する!総員、かかッ!!」

シア達を襲おうとしていたため、虎族の前に立った。すると、一部の虎達が顔を青ざめ始めた。

「き、貴様!何者だ!」

「こいつらの主人だ」

「しゅ、主人だと?」

「よく見ろよ。首輪ついてんだろ?」

「…何が目的だ?」

「まず武器仕舞えよ。武器持たないと話し合いすらできないのか?」

俺がそう言うと、虎族は武器を仕舞った。

「俺達は樹海の深部、大樹の下へ行きたい」

「大樹の下だと?何のため?」

「そこに本当の大迷宮…解放者が作った七大迷宮への入口があるはず」

だからだ。俺達は七大迷宮の攻略を目指して旅をしている。シア達は案内のためと、保護の為に奴隷にした」

「本当の迷宮？何を言っている？七大迷宮とは、この《ハルツィナ樹海》そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外には決して進むことも帰る事も叶わない天然の迷宮だ」

「……いや、それは流石におかしい」

「おかしいだと？」

「ここが大迷宮なら、《オルクス大迷宮》と違いすぎる。

「まず、魔物がいない。樹海全体に《魔力感知》をしたが、どれも弱すぎる」

「そうか……お前達が国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと、俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かない……だが、一警備隊長の私ごときが独断で下していい判断ではないため、本国に指示を仰ぐ。お前達の話も、長老方なら知っている方もおられるかもしれない。お前達が大樹の下に行きたいなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機しろ」

「わかった。ここで待ってればいいんだな？」

虎族の一人が何処かへと走って行き、俺達は座って待っていた。待っている間、俺は暇を持て余そうと、バイクの点検作業をしていた。

「ねえ、零斗」

「ん？どうした？」

「零斗ってバイクの構造とかわかっているの？」

「全く知らん」

「ええ……」

点検が終わって《宝物庫》の中に入れると、数人の亜人族が来た。

「お前さんらが問題の人間族かね？名は何という？」

「あ、俺達は人間の見た目だが、人間じゃねえからそこは間違えないでくれ。俺は零斗だ。こっちは冬花、桜、ユエだ」

「私はアルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預らせてもらっている。さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。《解放者》とは何処で知った？」

「《オルクス大迷宮》の奈落の底にある解放者の一人、オスカー・オルクスとチブル星人の家だ」

そう言うと、アルフレリックが自身の顎に手を置いて、何かを考え始めた。

「…何か証明できるものはあるか？」

そう言われて、オスカーの指輪の紋章を見せた。

「……なるほど。確かにお前さんらは《解放者》の隠れ家にたどり着いたようだ。他にも色々気になるところはあるが……よかろう。取り敢えず《フェアベルゲン》に来るがいい。私の名で滞在を許そう……ああ、もちろんハウリア族も一緒にな」

「いいのか？ シア達は追い出されたはずじゃないのか？」

「お前さんと共にいる限り客人として扱わねばならん。その資格を持ってるのでな。それが長老の座に就いた者にもみ伝えられる掟の一つなのだ」

「ちよつと待って、大樹は？」

冬花に言われて、カムが真っ青になる。アルフレリックはそんなカムの横目に説明してくれた。

「大樹の周囲は特に霧が濃くてな、亜人族でも方角を見失う。一定周期で、霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるようになるのは十日後だ。亜人族なら誰でも知っているはずだ」

「「カム？」」

「あ、いや、その…」

みんなの冷たい目がカムに刺さる。シア達からも呆れた目を向けられていた。

「まあまあ、そんなぐらいにしろ。今は《フェアベルゲン》に行こうじゃないか。カム達は後で罰を受けてもらうから覚悟だけはしとけ」

「「そんなあ？」」

そして俺達は《フェアベルゲン》に行くことになった。

追☆放

アルフレリック達について行き、《フェアベルゲン》と言う亜人族の街に来了。歩いていると、突然霧が出てき始めた。突然の霧に少し驚いていると、アルフレリック達は迷うことなく霧の中を進もうとしていた。

「ちよ、おい！お前らが先に行ったら俺達が迷うだろうが！」

「ああ、すまない。だが、ここだけの話、あそこに青い光が見えるだろうか？」

そう言われて見ると、霧の中に青く光る何かがあった。どうやら、あれを目印にして進んでいるようだ。そして、青い光を頼りに進んでいると、今度は霧が晴れた。

「なるほど、あれが迷う原因なんだな……」

道なりに進んでいると、巨大な門が見えてきた。門の上には亜人族がこちらを見て、何か騒いでいた。

「…ん。人間とハウリア族を入れることが気に食わないみたい」

ユエがそう言うと、シアがウサミミを垂らして、今にも泣きそうになっていた。そして、アルフレリックの合図で重々しい音を立てながら門が開かれた。

「すごい……」

「…ん。綺麗」

「ああ、こんな綺麗な街を見たのは初めてだ」

「さ、こっちに来てくれ」

そしてアルフレリックに連れられてある部屋に来了。そこで話をしていると、下の階が煩くなってきた、俺達は様子を見に行くことになった。降りると、複数の違った種類の亜人族がハウリア族を睨みつけていた。数名は武器を手にとっていた。そして、俺達が降りてきたのに気づくと、ある亜人族がアルフレリックを睨みつけた。

「アルフレリック……！！……貴様、どういうつもりだ！なぜ人間を招き入れた!?こいつらハウリア族もだ!!忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によっては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ

!!

「……なに、口伝に従ったまでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ……事情は理解できるはずだが?」

「何が口伝だ!!そんなもの眉唾物ではないか!《フェアベルゲン》建国以来一度も実行されたことなどないではないか!!」

「だから、今回が最初になるのだろうか?それだけのことだ。お前達もそれぞれの種の長老なら口伝に従え、それが掟だ……我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする?」

「なら……なら!こんな人間族の小僧共が資格者だとも言うのか!敵対してはならない強者だ?!ふぎけるなよ!!」

「そうだ、決して敵対してはならぬ。敵とみなされ、この緑豊かな地が真つ赤な血で染まってしまふ」

ハウリア族とアルフレリック以外の亜人族達はこの場に人間と忌み子がいることが気に食わないらしい。

「……ならば……今!!この場で試してやろう!!!資格者かどうか、試させてもらう!!」

「やめろ!敵対してはならない!!」

熊の亜人族が剣を持ち、アルフレリックの忠告を無視して俺達に斬りかかろうとしてきたが、冬花が魔法を発動する。熊の亜人族が斬りかかろうと跳ぼうとしたときには、熊の亜人族の足元に魔法陣が展開され、そこから光り輝く鎖が出て熊の亜人族を拘束した。

「……お前ら亜人族は俺達の敵ってことでもいいか?俺達は大樹の下へ行きたいだけで、邪魔しなければ敵対するつもりはなかったんだが……お前らは俺達を敵と見なしたんだな?俺達は話し合いがしたかっただけなんだが……」

「我々の仲間を拘束しておいて、第一声がそれか?……それで友好的になれるとでも?」

「お前、さっきのを見ていなかったのか?長老と言うのはそこまで目が悪いのか?あの熊が俺達を殺そうとした。だが、俺達は殺さずに拘束した。拘束が駄目ならソイツがやろうとしたように、殺すべきだったか?」

そう言うと、桜が《神花》を熊の首に近づけた。

「き、貴様！ジンは、ジンは!!ジンは、いつも国のことを思って!!!」なら、私も家族のことを思って、この亜人族の首を斬るわっ?!」

「勘違いしないでよ？私達が被害者で、あの亜人族が加害者だよ？長老は罪科の判断を下すんでしょ？」

「だが…!!」……グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼の言い分は正論だ」ぐっ……」

アルフレリックがそう言うと、その場にいた亜人族全員が武器を仕舞った。

「我らフェアベルゲンの長老は、お前達を口伝の資格者として認める。ゆえにお前達と敵対はしないというのが総意だ……他の者にも手を出さないように伝える……しかし……」

「絶対じゃない……か？」

「ああ、知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいると言える。血気盛んな者達は長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に……さつき、拘束されたジンの種族である熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アイツは人望があるからな」

「…ん。他には何か言うべきは？」

「………どうか、お前達を襲つた者達を殺さないで欲しい」

「なるほど、同族が知らぬ場で殺されるのは嫌だな」

「そうだ、お前達の実力なら可能だろう？」

「ああ、再起不能にして、ここに送り返してやるよ。だが、同胞を死なせたくないなら殺す気で止めろ。それが上に立つ者の役目だろう？」

「ああ、わか「ならば、我々は大樹の下への案内を拒否させてもらう」ゼル?!なにを言っている?!」

「口伝には気に入った相手を案内するとあるが、気に入らない相手を案内する必要はないともあるからな!!……ああ、ハウリア族に案内してもらえとは思わないことだな。そいつらは罪人、フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。何があつて同道していたのか知らんが………ここで別れた。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを

匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒したも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下っている。さあ、ハウリア族をわた「断る」なんだと?」

俺はシア達を守るようにゼルとか言うの亜人族の前に立った。

「シアはもう俺の奴隷だ……シアだけじゃない。ハウリア族全員、俺の奴隷だ。人の奴隷を勝手に処分を下すな。下すなら、こちらも抵抗させてもらう」

そう言い俺の横の空間を割って、ギドラを呼び出した。

「シア達を殺すなら、こっちはお前らを殺す」

「レンさん……」

「…本気かね?」

「冗談でコイツは出さねえよ」

「なぜ、彼等にこだわる? 大樹に行きたいだけなら案内人は誰でもよからう」

「馬鹿が…奴隷に案内させるのは普通だろ? それに、こいつらは必ず助ける。そう決めたんだ」

「…それならもう果たしたと考えてもいいのではないのか? 峡谷の魔物と帝国兵からも守ったのだろう? なら、あとは報酬として案内を受けるだけだろ。報酬を渡す者が変わるだけで問題なからう」

「問題大ありだ馬鹿め、つか、報酬じゃねえんだよ。ドアホ、俺は奴隷として案内をさせるんだよ。まあ、報酬を求めて助けていたのだとしたら……なぜ、報酬が案内だけだと思ってるんだ?」

「……他になにを要求するんだ?」

「お前らが知る必要がないことだ」

「……………そうだな。では、ハウリア族をお前さんの奴隷とし、死亡とみなす。フェアベルゲンの掟では樹海の外に出て帰ってこなかった者、もしくは奴隷として捕まったことが確定した者は死んだものとして扱う。樹海の深い霧の中なら我らにも勝機はあるが、外では魔法を扱う者に勝機はほぼない。故に、無闇に後を追って被害が拡大せぬように死亡と見なして後追いを禁じているのだ……既に死亡と見なしたものを処刑はできない。それでいいな?」

「アルフレリック！それでは!!」

「ゼル、お前もわかっているだろう。この少年達が引かないこともその力の大きさも……ハウリア族を我々が処刑すれば確実に敵対することになる。その場合、どれだけの犠牲が出るのか……いや、この《フェアベルゲン》が世界中の地図からも消えかねん……長老の一人として、そのような危険は断じて犯せん！」

「しかし、それでは示しがかん！力に屈して、化物の子やそれに与するものを野放しにしたと噂が広まれば、長老会議の威信は地に落ちるぞ！」

「威信とこの未来、どっちが大事だ？」

「……あ、そうだ。最後に、俺達もシアのように魔力を直接操れるから、お前らのいう忌み子だが……俺らにも処分を下すのか？」

「いや、そんなことをすれば《フェアベルゲン》が消えてしまうだろう……では、ハウリア族は忌み子シア・ハウリアを筆頭に、同じく忌み子である夢咲零斗の身内と見なす。そして資格者である夢咲零斗に対して、敵対はしない。が、フェアベルゲンや周辺の集落への立ち入りを禁ずる。以降、夢咲零斗の一族に手を出した場合は全て自己責任とする……以上だが……何かあるか？」

「いや、それでいい。んじゃ、俺達は出ていく。冬花、桜、ユエ、行くぞ。もちろんシア達もだ」

「そう言い、シア達ハウリア族を連れて《フェアベルゲン》を出ていった。」

鍛☆錬

《フェアベルゲン》から追放され、俺達は近くに川がある場所に新しい集落を作った。簡易的なテントを数個置き、ちよつとした柵で囲った。

「それじゃ、私達は行ってくるね!」

朝早くに冬花達はシアを連れて、何処かへと行った。冬花達が何処かにいったため、俺はカム達を一箇所に集めた。

「よし、お前らには罰…いや、鍛錬をしてもらう」

「えつと…それはなぜでしょうか…?」

「聞くな、自分で考えろ」

「「「ええ…」」」

「はい、文句あるやつから送っていくぞ」

「「送るってどこに?!」」

「まあ、ちよつとした武器はやるが簡単に壊れる…だから、武器は行き先で自分で作れ」

リングなどを切るようなナイフを全員に渡した。そして、カム達の足元の空間が割れ、カム達が落ちていった。

「……………あ、行き先が間違つて超獣がいる場所になってるけど…大丈夫だったかな…」

死ねばこっちに帰ってくるように設定はしているが、心配だった。すると、送つてから数秒後にカム達が吐き出されるようになってきた。しかも一人残らず全員が出てきた。

「レイト殿!これはどういう…」

「アイツらを倒せるようになるまで帰ってくんな。安心しろ、あつちでの1日はこっちでの1時間だ」

そう言い、カム達を送り返した。それから、死んでも向こうで復活するように変えた。そういえば、カム達は何に倒されたのだろうか。

「さて…俺は暇になったのだが…どうしようかな…そういえば、スマホってまだ使えるのだろうか…」

そう思い、《万物収納》に入れていたスマホを取り出し、電源を入れ

た。すると、バッテリー残量も変わってなく、電波も届いていた。

「この世界に電波届いてるのなんで…?」

疑問は増えるが、取り敢えず母さんに電話をかけた。

『はい?どちら様ですか?』

母さんとは違う、男の人の声でした。

「あれ…?これ母さんの電話番号じゃ…」

『母さん…?あ、もしかして夢花さんのところさんの零斗くんか?!』

「え?あ、はい。そうですけど…どちら様ですか?」

『私は…天……だ…夢花さん……つちに……』

「もしもし?もしもし?!」

突然、男の人の声が聞こえなくなり、通話が切れた。

「くそ…駄目か…母さん、心配してるだろうな…早く帰りてえ…」

そして、俺は再び暇になった。

???

地球のパソコンとやらは素晴らしい。知りたい情報がだいたい出てくる。我が地球のことを調べていると、突然画面が暗くなり、動かなくなった。

「あれえ?!」

見れば使徒の一人がパソコンのコンセントとネットとやらのコードを抜いていた。

「ちよ、なにしてんの?!」

「それはこちらのセリフです。我が主、あなたは何をやっているんですか?態々地球とここを繋ぎ、ネットとやらで遊び…これではノイント様が出ていったのもわかります。それに、ここを開けている以上、彼らのスマートフォンとやらにも電波が行き、ここがバレてしまう可能性があります。今すぐ閉めてください。というか閉めなさい」「ア、ハイ」

成☆長

あれから数日がたった。スマホは使えなくなり、新しい連絡手段が必要になった。冬花達は今日も朝から何処かに行き、カム達は帰ってこない。

「……………ん？」

空を見ていると、空間が割れて奥からカム達が出てきた。だが、入ったときよりも顔が厳つくなっていた。

「陛下、目標を殲滅しました」

「……………は？お前、誰だよ」

急に陛下と言われて、戸惑っていると、奥からバラバラになった超獣達を持つてきた。

「コイツは……バラバ、バキシム、ベロクロンか」

「陛下、我々は勝利を勝ち取りました！」

「ああ……うん、すごいな」

カム達の変化が怖かった。あの優しかったハウリア族がここまで変わるとは誰も思わないだろう。

「よ、よおしくし！お前ら、今日は休んで「休む？なにを言っているんですか！」ん？」

「我々はまだ動けます！どうぞ、なんなりと命令を！」

「ああ………そ、それじゃあ…《ハルツイナ樹海》の魔物を一匹だけ倒してこい」

「「はっ！」」

そう言うときハウリア達が一瞬で消えた。

く冬花く

私達はシアの鍛錬をしていた。薄々気付いてけど、シアは零斗のことが好き。そして今、シアが桜かユエに傷を一つでも付けければ、零斗に言っただけの仲間にする約束をしていた。

「やあですうー！」

シアはハンマーで桜を叩き割る勢いで振り被った。だけど、桜の俊

敏な動きに重いハンマーはついていけなかった。

「甘い！」

「ふやう?!」

後ろに周った桜が《神花》をシアの耳を切り落とす勢いで振られた。すぐにウサミミ畳んでしゃがんだ。

「…ん。私を忘れない！」

だけど、前からユエが地面を凍らせながら氷壁を魔法で作った。氷壁の尖った部分がシアの喉に突き刺さりそうになったときだった。

「ひう?!」

シアがハンマーで氷を叩き割った。自身の氷が割られたことにユエが驚いている。だけど、桜が《神花》をシアの首元に当てた。

「そこまで！勝者はシア！」

「?!」

「ユエ、自分のほっぺに手を当ててみなさい」

「桜もね」

ユエのほっぺには傷ができていた。そして、桜のほっぺにも傷があった。

「やった…！やりました!!冬花さん、桜さん、ユエさん、約束しましたよね！」

「……ん」

「旅の仲間にするって!!」

「……ん」

「零斗さんをお願いしてくれるって!!」

「……私と桜が負けるなんて…」

「ユエ、勝負なんてこんなものだよ。いつかは必ず変わる。いつも勝者であることなんて不可能に近い。だよね?桜」

「ええ、そうよ。いつも勝者であり続けるのも大切。だけど…新しい子に次代を任せるのも大切なのよ」

「…ん。そうなの?」

「そうだよ。さ、集落に戻ろう！零斗も待つてるだろうし！」

そして私達は零斗が作ったハウリアの集落に向かった。

失☆敗

カム達が魔物を狩りに行き、数時間後に帰ってきた。大量の魔物の尻尾という魔物を倒した証拠品を持って帰ってきた。

「……おい。俺は一匹と言ったはずだ」

「ええ、そうなんですがね？殺っている途中で群が来まして……生意気にも殺意を向けてきたのでつい殺って帰ってきたんですよ」

「……ついだと？」

俺は失敗した。鍛錬の仕方を間違ったのだ。

「そうか……ふんっ!!」

「かはっ……」

俺はカムに腹パンを入れた。

「お前ら、一匹でいいと言ったのになぜ、他のも殺した？」

「そ、それはコイツらが「違うだろ？」……え？」

「お前らは狩りを楽しんでた。違うか？」

「!!」

「お前らはあの世界で何を学んだ？ただ敵を殺すことを学んだのか？」

「い、いえ！そんなことは「なら、もう一度行ってこい!!」へ、陛下!？」

今度は超獣ではなくグリーザがいる世界に送った。今度は戦うことや殺すことではなく、守ることを覚えて帰ってきてほしい。しかも、向こうの一年をこっちでの1時間に変えた。カム達が帰ってくるのを待っていると、冬花達が帰ってきた。

シアを今のカム達に会わせるのはやめようかな。

「シア、ちよつと大事な話がある」

「へ？な、なんですか？」

「ちよつと、カム達が大変なことになって「陛下！わかりました!!」チツ戻ってくるのが早えんだよ」

「へ、陛下って……？お父様?!」

「ん？おお、シアではないか!」

「それで、お前らは何を学んで来たんだ？」

「はい！我々は守るために力を使うと学びました！前の我々は相手を殺すことに快楽を覚えていたのかもしれませんが！！申し訳ございませんでした！！」

「！！申し訳ございませんでした！！！！」

あの世界で一体何があったのだろうか。

「ちゃんと大事な事をわかったのなら、今日はもう休め」

「！！はっ！！！！」

返事をしたカム達はそれぞれのテントの中に入っていった。

「それで、お前らの方は終わったのか？」

「はいですう！」

「ええ、終わったわよ」

「それでね、零斗…シアのこと何だけど…」

「ん？シアか？連れて行くつもりだけど…何かあったのか？」

「！！……へ？！！」

「やっぱりそうなのね…」

冬花達はわかっていなかったけど、桜だけわかっていたようだ。

「だって、零斗って新しい事に目がないのよね」

「あ、そうだったね」

「それに、あのカム達のところにシアを一人で置いていくのは可愛そうだからな………って、どうしたんだ？」

シアがフルフルと震えていた。よく見れば頬に涙があった。

「や…」

「や？」

「やったああー！！」

「うわっ?!」

シアが突然飛びついてきた。何かあったのだろうか。数分して、俺から離れたシアがウサミミをピンと立てて真剣な顔でいた。

「レイトさん！」

「ん？」

「貴方が好きです！」

「シア、俺には冬花と桜とユエという恋人がいる。それでも「大丈夫で

すう！」…そうなのか」

この短期間、俺と接してどこに惚れる要素があったのだろうか。

大☆樹

次の日、俺達は《大樹》に行く準備をしていた。数名が先に行き、下調べをしてから行くことになっていた。

「陛下！報告があります！」

「ん？どうした？」

「は！《大樹》への進行ルートに武装した《熊人族》の集団を発見いたしました！我々に対する待ち伏せかと思われます！」

「はあ…アルフレリックのヤツ、止めれなかったのか…」

「陛下、お任せ頂けるのなら、我らの力が奴らに何処まで通じるか、知っておきたいのです」

「別にいいが、《殺すな》。いいな？」

「「はっ!!」」

そう言うときカム達が大樹へのルートに向かっていた。数分後、俺達もシアを先頭に大樹へのルートを歩いていた。すると、人影のようなものが見えてきた。

「お、お前ら誰だよ?！」

「ち、違う！俺達の知っているハウリアはこんな強くねえ！」

「別族だ！別族の兎人族の襲撃だあ!!！」

ハウリア達に倒されて縄で拘束された熊人族とそれを囲っているカム達だった。

「ハウリア族の族長カムよ…俺はどうなってもいい。煮るなり焼くなり好きにしてくれていい。だが…部下は俺が無理やり連れてきたんだ。部下だけ見逃して欲しい」

熊人族のリーダーがそう言うと、カム達は拘束した熊人族の縄を解いた。それに熊人族達が驚いていた。

「な、なぜ俺も…?」

「ふん、貴様は好きにしろと言ったな?なら、部下を連れて帰れ!そして《フェアベルゲン》の者共に言っておけ!次はないとな」

「…ッ！感謝する」

熊人族は武器拾って《フェアベルゲン》へと帰っていった。すると

カム達の歓声が聞こえ始めた。

「まあ、お前らが頑張ってもシアだけ連れて行くんだけどな」

俺がそう言うと、カム達が静かになり、俺の方を見てきた。

「当たり前前だろう。シアをこんな野蛮な奴らのところに一人置いていくのも可愛そうだし、逆にお前ら全員を連れて行くってなったら、色々大変だからな」

「それはそうと、早く大樹に行こうよ!」

「そうね。そろそろ行ったほうがいいわね」

そして落ち込んでいるカム達を横目に大樹へと向かっていった。

「レイトさん!大樹が見えてきましたよ!」

先頭を歩いていたシアが立ち止まると、その後ろに《オルクス大迷宮》の最奥の魔物よりもデカかった。

「でも…」

「…ん。枯れてる」

ユエの言うとおり、大樹は枯れており、ボロボロになっていた。大樹の前には幾つかの石板のようなものがあつた。

「これは…」

その石板には《四つの証》《再生の力》《紡がれた絆の道標》《オロチの加護》《人ならざる者》《全てを有する者に新たな迷宮開かれる》と書かれていた。

「オロチの加護?」

「…もしかして」

俺は《オロチの加護》と書かれた石板に触れた。だが、何も起こらなかった。

「…冬花、桜がこれに触れてくれ」

「え?うん」

「あ、もしかして!」

冬花、桜が石板に触れるとその石板が光り始めた。どうやら、桜と冬花の謎の加護の正体は《オロチの加護》と言うことだろうか。

「それじゃあ…零斗が持つてる加護ってなんなの?」

「わからない。多分、この《人ならざる者》が俺だろうな」

そう言い、石板に触れるとその石板が光り輝いた。

「…ん。再生の力は私？」

そう言い、ユエが触れた。だが何も変わらなかった。どうやら、『再生の力』は別にあるようだ。

「4つの証は、迷宮の証だとすると…ここに来るのはまだ早いと言うことか…はあ…カム達はここに残っててくれないか」

「陛下！我々では力不足ということですか?!」

「ああ…いや、ちよつと違う。お前らは俺達が帰ってくるまで集落を守っててくれ」

「…は！仰せのままに!!」

そして俺達は最低限の荷物を持って『ハルツィナ樹海』を出た。

変☆人

《ハルツィナ樹海》を出て、俺達は近くの街を探した。この近くだと《ブルック》と呼ばれる街があるらしい。

「ねえ、シアの武器どうするの？」

「あ…そうだな。桜、シアに会いそうな武器ってあるか？」

「ハンマー…かな？シア、零斗が作るまでは私のを貸してあげる」

「あ、ありがとうございます！」

歩いていると、街の門が見えてきた。

「待て！ステータスプレートを出せ」

そう言われて、俺達はステータスプレートを隠蔽して渡した。

「ん？彼女のステータスプレートは？」

「ああ、悪い…途中で魔物に襲われてな、その時に落としてしまったんだ」

「そうか、それは大変だったな。行っていいぞ」

そう言われて、俺達は街の中へと入っていった。

「さて、街の中に入ったらまずやることと言えば…ギルド探しだ！」

「…え、そうなの？」

「…ん。初めて聞いた」

「私もですう」

え、違うの？

「違うと思うよ」

「違うと思う」

「…ん。同じく」

「同じくですう」

「ええ…ま、まあ…とりあえず、探すか」

そして街の中を歩いていると、ギルドらしき建物を見つけた。その中に入り、カウンターを探した。

「なんだい、両手どころか、沢山花を持っているのにまだ足りないのかい？残念だったね、ギルドの受付人が全員美女じゃないんだよ」

「…零斗？」

「改めて、冒険者ギルド・ブルック支部にようこそ。用件は？」

「魔物の素材の買取だ」

「素材の買取だね。まずステータスプレートを出してくれるかい？」

「え？買取にステータスプレートが必要なのか？」

「ん？なんだい、冒険者じゃないのかい？なら、ここで冒険者登録していくといい」

おばちゃんに言われて、ステータスプレートを見せた。すると、おばちゃんの目が変わった。

「あんた達、ステータスプレート隠蔽しているね？」

「!??!」

俺達はバレててしまったので、隠蔽解いてちゃんとしたステータスプレートを見せた。

「：何か事情があるみたいだね」

「ああ、できればこのことは内密にしてほしい」

「ああ、そこは大丈夫だから安心していいよ」

そして、俺達は冒険者登録することになった。冒険者登録したあとに魔物の素材を渡した。

「驚いた、まさか樹海の魔物の素材じゃないかい？こんなところでいいのかい？」

「ああ、宿泊する金ができればそれでいい」

「そうかい。あ、ならついでにこれもあげるよ」

おばちゃんが机の下からこの街の地図らしき物と買取金をくれた。

「いいのか？この地図なら、金を取れるだろう」

「趣味で作ってるだけだからね」

「そうか。オススメの宿屋ってあるか？」

「ああ、それならこの方がいいよ」

「ありがとう」

ギルドを出て、おばちゃんに教えてもらった宿屋に向かった。

「いらっしやいませ！ようこそマサカの宿へ！本日はお泊りですか？」

それともお食事だけですか？」

「宿泊だ。ギルドのおばちゃんが教えてくれてな」

「キャサリンさんの紹介ですね。何泊のご予定ですか？」

「一泊で食事付きと風呂付きだ」

「お風呂は15分100ルタです！どのくらい取りますか？」

「私と冬花は30分あればいいよ」

「なら…合わせて45分だ」

「はい！では、お部屋は何人部屋にしますか？最大、5人部屋までありますけど…」

部屋の割合は桜が決めて、5人部屋になった。桜曰く、シアだけ一人ぼつちは可愛そうだかららしい。そして俺達は買い物に行くことにした。

「ねえ、零斗」

「ん？どうした？」

「私と桜のマントが《オルクス大迷宮》と《ハルツィナ樹海》でポロポロになっちゃって…」

「わかった。新しいのをやるよ」

「ありがとう！」

そして俺達は服屋の中に入っていった。服屋に入ってすぐにヤベーやつがいた。

「あら〜ん、いらっしやい♡可愛い子達ねえ〜ん♡来てくれて、おねえ〜さん、嬉しいいわあ〜♡たくぷりサービスしちゃうわよお〜ん♡」

本当にヤバい生物がいた。冬花とユエはしれっと俺の背後に隠れ、シアはウサミミを畳んで俺の後ろでしゃがんでいた。桜は普通のように見えるが、俺の手を握っていた。

「あら〜ん、どうしたのおん？」

「ああ、悪い。この兎人族は巨体の人間に襲われたことがあってな、それがトラウマになっちゃってるんだ」

「あら〜ん、大丈夫う？おねえ〜さん、心配よお〜ん♡」

「あ、取り敢えず、この四人に会う服を頼む」

「いいわよお〜ん♡それじゃあ、こっちにきてえ〜ん♡」

そして冬花、桜、ユエ、シアが店の奥に連れて行かれた。この街の住民はヤバい奴らしいのだろうか。

混☆浴

あれから服を買い、食料も幾つか買ったあと、宿屋の宿泊する部屋に戻ってきていた。

「さて、冬花と桜のマントはどうするか…」

「あのお…レイトさん、少し聞きたいことが…」

「ん？なにか聞きたいことでもあるのか、シア」

すると、シアが俺の右目を隠していた髪を触ってきた。

「そういえば、どうなったのか見てないよね」

「私も見たい」

「…ん。気になる」

「俺も見たいから鏡取ってくれ」

「あ、鏡はここにあります！」

シアから貰った鏡で自分の顔を写しながら、恐る恐る髪を捲り上げた。

「!!」

「なんだこれ…?」

右目があった場所は目の形をした黄色いなにかになっていた。どうやら、この黄色い目でもちゃんと目としての機能はあるようだ。

「レイトさん、これ見えてるんですか？」

「ああ…お前が今、ウサミミをピョコピョコしてるのもちちゃんと見えているぞ」

「ねえねえ、その目に目薬さしていい？」

「やめろよ？そもそもそれいつのやつだよ」

「えっと…6年前の目薬だけど」

「なら余計に駄目に決まってるだろう?!つか、なんだその目薬?!」

「冬花、その目薬没収ね」

「そうだよね…」

その後、冬花の鞆の中から、5年前の目薬が出てきた。冬花達にバレないように、こっそりと目薬をさした。さした瞬間、少し目が痛くなり、右目だけばやけてきた。だが、数秒で元に戻った。

「零斗、私と冬花のマントを作るって話、どうなったの？あと、シアの武器も…」

「ああ、マントな…」

俺は背中から翼を生やし、その右翼から虹色の膜、左翼からは黄金の膜を切り取り、前と同じように冬花と桜にあげた。翼は切り取る、と、すぐに元に戻っていた。

「シアの武器のハンマーなあ……取り敢えず、《神速》、《空間破壊》、《万物撃砕》を付けたのでいいか？」

「え？あ、ハイです！」

俺は両手で持つハンマーを作り、《神速》《空間破壊》《万物撃砕》を付与した。だが、少し物足りないと思った俺は、《衝撃波》と《振動波》も付与してシアに渡した。すると、シアがパーツと明るい笑顔になった。

「…ん。零斗、お風呂行かないの？」

「ああ…そうだな。先に入るから、後で来いよ」

「…ん。わかった」

「え？私は？」

「たまには俺がいない風呂も楽しめ」

そう言い、着替えとタオルを持って浴場へと向かった。久々の一人風呂を楽しもうとしたときだった。浴場の扉が開かれ、煙の中から数人の人影が見えた。

「……………だいたいわかるけど…冬花、桜、ユエ…あと、奥にいるシアは何しに来た？部屋で待つてろって……」

「いつものことじゃん！気にしない気にしない！」

「そうよ、いつものことじゃない。気にするだけ無駄よ」

「…ん。背中流す」

「な、なんで皆さんは…そんな簡単に…」

シアとは違い冬花達はなんの躊躇いもなかった。冬花と桜は小さい時から一緒だからわかるが、ユエはそこまで長いわけではないのに、なぜここまで躊躇いがないのだろうか。

「って、おい！冬花、湯に浸かる前にまず髪を洗え！」

触手を伸ばして、湯に浸かろうとした冬花を引っ張り、隣に座らせた。

「零斗洗ってよ〜」

「髪ぐらい自分で洗え！桜は変わったのにお前は変わらねえな」

「えへへ、ありがとう」

「褒めてねえよ」

そう言いながら冬花の髪を洗う。

「零斗の優しいところ大好き」

「ありがとうな」

「零斗、次私がいい」

「わかったわかった。洗ってやるからまず、タオルを巻け!!目のやり場に困る!」

その後、ユエ達も髪を洗ってほしいと言い始めた。最初とやっていることが真逆になっているが、気にしてなくていいだろう。

「シアのウサミミってどんな感じなんだ?」

「ふえ?」

「あ、私も気になる!」

「…ん。触ってみたい」

「私も触りたい」

「え、えつと…その…お耳は…」

「駄目なら別にいいぞ?」

「い、いえ!大丈夫です!触るのはベッドの上でお願いします!」

シアがそう言ったため、俺達は風呂を出て着替えてすぐにベッドに座った。その後、ウサミミを触ると、生きている証拠の生暖かい温もりを感じた。その後、冬花達に色々触られてシアは撃沈した。

「零斗、これ見て」

「ん?...ッ?!」

振り返ると冬花と桜にウサミミが生えていた。ちゃんとピョコピョコ動く本物だった。二人のウサミミはシアと同じ感じだった。しかし、触っていると二人のウサミミが消えた。どうやら、時間制限があるようだ。明日は《ライセン大迷宮》に行く予定だが、撃沈して

しまったシアは大丈夫だろうか。

癡☆見

次の日、俺達は《ライセン大迷宮》を探しに《ライセン大峡谷》に行こうとしていた。面白そうな情報はないか、おぼちゃんのところに来ていた。

「《ライセン大峡谷》の情報ね…」

「ああ、なにかないか？」

「うくん…ないねえ」

「そうか」

「お、そうだ。あんたのこと占ってあげようか？占いで良さそうな情報が出てくるかもよ？」

「ふむ…良さそうだな。占ってくれ」

「ちよつと待ってな」

そう言いおぼちゃんが奥から水晶玉のような物を持ってきた。

「さ、それに手を乗せて。なにを占ってほしい？」

「俺の運命の相手」

「あの二人は違うのかい？」

「いや、ちよつと気になってな。どっちがそうなのかなあつて」

「わかつたよ」

そう言い、おぼちゃんが俺のことを占い始めた。しばらくして、おぼちゃんが何かを見つめ始めた。

「何が見えるんだ？」

「空も地面も星空になつてる場所だね、赤い竜のような魔物が泳いでる…でも、ここは私でも見たことないよ…あんたは知っているのかい？」

空も地面も星空？それって――

「まあ、《ライセン大峡谷》の情報はなしだね」

「そうか…時間を取らせたな。それじゃ、またな」

そしておぼちゃんが占った結果の赤い竜がなんなのか、考えながら冬花達と一緒に《ライセン大峡谷》へと行った。

あれから数時間、ずっと探していたが見つからず、夕方になっていった。

「――で、来てから何時間たった?」

「5時間ぐらいかな?」

「うくん…もう暗くなってきたね」

「…ん。この近くで野宿するべき」

「ですね」

そして近くの岩陰にテントを張り、夜明けを待とうとした。寝袋を出して、寝る準備をしていた。

「あ、ちよつとお花摘みに行つてきますう…」

そう言つてシアがテントの外へと行つた。

「うくん…空も地面も星空にいる赤い竜か…」

「どうしたの?」

「おぼちゃんがな、俺の運命の相手つて行つて空も地面も星空になつていゝ場所にいる赤い竜が運命の相手つて言つてきたんだよ」

「空も地面も星空になつていゝ場所…?それつて宇宙のこと?」

「それ以外に星空になつていゝ場所つてないわよ?」

「…ん。宇宙つてなに?」

「宇宙つてのは、あの雲よりも高い場所のことだ」

「…ん。レイトは行つたことある?」

「流石にねえな」

流石に俺でも宇宙に行つたことない。母さんはありそうだけど俺はない。そして俺達が話していると、シアがテントに帰つてきた。

「見つけました! 《ライセン大迷宮》!!」

「「え?」」

「ほお…」

「ごつちですう!」

テントを片付けてシアについていくと、岩と岩の間に道があつた。その先に行くと、謎の空間があつた。その壁に文字が書いてあつた。

《おいでませ♪ミレディ・ライセンとトレギアのドキドキワクワク大迷宮へ!》

「「は？」」

トレギアって誰だよ。誰か教えてくれ。

『トレギアは…ウルトラマンだ』

ウルトラマンなのか。あれ、ヤプールはこの世界に光の国がないって言っただけだったか？

『それはこの世界のトレギアに聞け。我々はこの世界の光の国の者じゃない』

そういうのは早く言え。

不☆正

シアがお花摘みに行ったときに《ライセン大迷宮》らしき物を見つけた。なぜ、花を摘みに行ったのにこんな岩と岩の間に行ったのだろうか。

「んで、どこに扉があるんだ？」

そう言い、壁をペタペタ触っていると、ある壁が俺を巻き込んで180度回転した。髪の毛が一本だけ挟まってしまったが気にしなくていいだろう。

「ん？」

奥から数本の矢が飛んできた。それを全て叩き落とし、拾い上げる。何も付与されていないただの矢だった。

「なんだこれ…つか、《魔力感知》とか《気配感知》に全く引つかからなかったな…もしかして、ここって大玉とかある系？」

この迷宮が魔法の罠なしだとしたら、本当に面倒くさい迷宮になる。冬花とユエにとって相性が悪すぎる迷宮だ。

そう思いながら、回転扉を90度回した。すると、また普通の矢が飛んできた。矢を全て叩き落としていると、冬花達がきた。

「その手に持つてる矢ってなに？」

「ああ…もしかしたら、ここは冬花とユエが無力化されて、桜とシアが主力になるかもしれない」

「…え?!」

「もしかして、魔法が使えないとか？」

冬花とユエが【火球】を出そうとした。すると、【火球】は出てきたのだが、蝋燭の火よりも小さな炎になっていた。

「レイトの言うとおり、私とユエが力になれない…」

「…ん。シア、この迷宮では貴方が頼り」

「ええ、シア、一緒に頑張りましょ？」

「は、はいですう！」

そして、俺を先頭に歩いていっていると、俺の右足がガコンツと言う音と共に沈んだ。すると、前方から丸ノコのような物が壁を走りながら

こっちに来た。

「危なっ?!」

「?!」

身を低くして避けた。やはり、ここは物理攻撃系の罠が多いようだ。異世界要素どこ行つた。

「よ、よし…行くぞ」

それから、いくつもの罠にハマつた。天井が落ちてきたり、壁から杭が飛び出したり、落とし穴だったり、色々な罠があつた。そして、俺達は一本の坂道を登つていた。

「シア、いいか? 次の罠が大玉とかだったら、お前のそのハンマーで叩き割れ」

「はいですう!」

そう言い、ハンマーを持った瞬間だつた。シアの足元の床が沈んだ。そして、上から重々しい何かが落ちてきた音と、何かが転がる音がした。前を向けば、大玉が転がってきていた。

「シア! やつてやれ!」

「はいですう!」

シアのハンマーが大玉を粉碎した。

「…ん。シア、頑張つた」

「ああ、よくやつた」

「えへへ…ありが『ガコン』…へ?」

シアを褒めていると、また上から何かが落ちた音が聞こえた。そして、また大玉が坂の上から転がってきた。だが、今回の大玉は緑色の液体を出していた。俺達は来た道を全力で走つた。そして、来た道が少し変わっていることに気づき、前を見ると道がなくなっていた。

「零斗! あそこ、道がないよ!」

「いいから走れ!!」

道が途切れたところで身を放り投げるように跳んだ。すると、道の先は空間になっていて、下が巨大な棘がびっしりとあつた。

「《アクセスモード・ダイナウイング》!!」

部屋ぎりぎりの大きさの《ダイナウイング》を出して、俺達は《ダ

イナウイング』の上に乗った。そして、下を見てみると、さっきの大玉が転がり落ちるのが見えた。

「…ん。ここからどうするの?」

「取り敢えず、道が全て変わっていることがわかった。だから………迷宮の壁を壊す」

「「「え?」」」

「アクセース、フラッシュユ!《アクセスコード・バスターボラー》!!」

俺が《グリッドマン》に変身すると、《バスターボラー》が変形して体に装着される。

『武装合体超人!バスターグリッドマン!!』

「おお!かっこいいですう!!」

「…ん。初めて見る」

「他にも形態あつたのね…」

『お前ら、《ダイナウイング》に乗っとけよ!「ツインバスターグリッドビーム」!!』

「ツインバスターグリッドビーム」を壁に打ち、壁を壊していく。そして、謎の暗い空間を発見した。

「零斗!あそこに見たことない部屋があるよ!」

『よし、そこに行くぞ』

変身を解除して、《ダイナウイング》の上に乗る、冬花が見つけた謎の空間へと入っていった。中は真っ暗だが、《暗視》でよく見える。だが、この部屋はなにもなかった。すると、上から《魔力感知》に何か引つかかった。見れば巨大な何かが降ってきた。

『やつほー!みんなのアイドル♪ミレディたんだよ!』

巨大なゴーレムがそう言い、俺らに向かってピースをしていた。

戦☆闘

降りてきたゴーレムは自身をミレデイと名のり、アイドルがやりそ
うなピースをしていた。

『おーい？挨拶されたら、挨拶を返す！これ常識だよ！それと、人の家
を壊しちや駄目なんだぞ！』

「ああ…壊したのは悪い。道がわからなくてな」

『駄目駄目！わからないからって、壁を壊すのはルール違反だよ！
ちやーんと道を通らなくちや！』

「とりあえずさ？」

『ん？』

俺は《ゴジラ》に変身して、ミレデイの前に立った。

『お前をボコボコにすればクリアだよな？』

『…え？』

ミレデイが呆気にとられ、動こうとしなかったため、エネルギーを
長く溜め、ミレデイに「ハイパスパイラル熱線」を撃ち込んだ。

『?!と、トレギア！早く来て!!』

ミレデイがそう言うと、上に青黒いワームホールのような物が現
れ、そこから白色と赤色の怪獣が出てきた。

『……って、トレギア?!さっきはスネークダークネスじゃなくて、トレ
ギアが来るって話だよね?!』

『グウウ…』

スネークダークネスと呼ばれる怪獣はミレデイの肩をポンポンと
叩き、俺を睨みつけてきた。

『冬花と桜は俺と一緒にスネークダークネス、ユエとシアはミレデイ
を頼む！』

冬花と桜がロツソ（フレイム）とブル（アクア）に変身した。

『ちよ、相手3人だけど大丈夫なの?!』

『グウウ!』

スネークダークネスは任せろと言わんばかりに右手を胸に当てて
いた。

『なんか、アイツ余裕って顔してね?』

『私達の見せちゃお!』

『倒そう!』

『グウウ!』

スネークダークネスは俺らを見て余裕そうな顔を見ていた。その顔を見ていると、煽ってるように見えて、頭に血がのぼる。

『フツ』

『ああ?!』

『え、零斗?』

スネークダークネスが冬花と桜のことを鼻で笑った。

『上等だテメエ!ブラックホールの中までぶっ飛ばしてやる!!冬花、桜はミレデイのところに行け!』

俺はあの謎の怪獣に変身して、スネークダークネスに噛み付いた。

『零斗って怪獣の声聞こえるのかな』

『多分、聞こえてると思う。だから、怒ってるんじゃない?』

『なにを言われたんだろう…』

『零斗が怒ること…私達のこと何か言われたとか?』

くミレデイく

『上等だテメエ!ブラックホールの中までぶっ飛ばしてやる!!』

『え…?』

女の子とウサギちゃんと戦っている最中にあの人が私も見たことない怪獣に変わってスネークダークネスに噛み付いた。

『ちよちよちよ、ちよつとトレギア?!スネークダークネスを止めて?!』

『ハハハハハハ!』

私がそう言うと、トレギアの笑い声が聞こえる。

『トレギア?!』

『いやあ、すまない。彼がどれほど強いのか知りたくてね』

『《メツドルス》と対の存在なんだから、ヤバいに決まってるじゃん!?!なに煽ってるの?!チブル星人に煽るなって言ってたよね?!それ二人で聞いてたよね?!』

『いやあ〜…すまない』

『すまないじゃないよ?!』

〜零斗〜

コイツはあ！コイツだけは絶対に許さん!!

スネークダークネスが口から【トラジエディシャウト】を撃ってきた。俺はそれに対抗するように【マガマガアークデスシウム】を撃ち、光線の撃ち合いになった。

『まだまだ!!』

『?!』

撃ちながら背びれでエネルギーを溜めて、「マガマガアークデスシウム」に上乘せするように撃った。スネークダークネスは【マガマガアークデスシウム】を顔に直撃し、爆散した。

『テメエ、今度冬花と桜のことを馬鹿にしてみろ！D4を撃ち込んでやるからな!!』

〜冬花〜

零斗がスネークダークネスと戦い始めたのと同時に、私達は時間切れになっちゃって、人の状態でミレデイと戦うことになった。

『に、人間の君達に私が倒せ「早く終わらせる!」え?』

桜が《神花》でミレデイを切り付けた。すると、《神花》の刃は欠けなかったのに、ミレデイの体には大きな傷跡がついていた。

「ユエ、シア！私が桜が付けた傷に水をかけるから、ユエが凍らせて、シアが氷を叩き割って!」

「…ん。わかった!」

「はいですう!」

『わ、忘れたの?ここは魔法使えないんだよ?』

「水は魔法だけじゃないよ!」

『え?』

私は水のループクリスタルを使ってミレデイに水をかけた。どういう原理かは私は知らない。

「ユエ！」

「…ん!!」

ユエが水を全て凍らした。

「シアー！」

「はいですう!!」

シアのハンマーが氷を砕いた。砕くと、ミレデイの体の中に赤く丸いコアがあった。

「私に任せて！はああ!!」

そう言つて桜が《神花》をコアに突き刺した。コアを壊されたミレデイは何も喋らずに消えていった。消える演出が凄く綺麗で、いいんだけど、ミレデイはまだ死んでない。

回☆想

ミレデイとスネークダークネスを倒したあと、何処からか、一つの立方体が降りてきた。俺達がそれに乗ると、急に動き出し、何処かへと連れて行かれた。

「で、どう思う冬花。ミレデイはまだ生きてると思う?」

「うん、零斗が思ってる通り、ミレデイはまだ生きてるよ。だって、魔物やゴーレムが倒されてもあんなのでないもん」

そして、一つの部屋に連れてこられた。その部屋には金髪のポニーテルのユエと同じぐらいの背の女の子が体が青い仮面をつけた人をポコポコと殴っていた。

『ん?ミレデイ、彼らが来たみたいだぞ?』

「え?!うそ?!来るの早いよ!」

女の子はミレデイらしい。あのゴーレムがミレデイと言うわけはないらしい。ミレデイは服についた埃をパツパツと払った。

「や、やあ!さつき振りだね!私がミレデイだよ!」

『それで私がウルトラマントレギアだ。スネークダークネスがすまなかったね』

なあ、トレギアってウルトラマンだよな?」

『ああ、ウルトラマントレギアって自分から名乗ってるだろう?』

いやさ…ヤプールが光の国、ウルトラマンの星がないって言っただろ?なら、トレギアってどこで生まれたんだ?」

『さあ?』

さあじゃねえよ!」

『ん?なにかな?私のことで何か気になることでもあるのかい?』

「…ある宇宙人がこの世界に光の国、ウルトラの星はないって言っていたんだが、お前はどこで生まれたんだ?」

『……………』

「トレギア…」

トレギアが何か思い詰めたような顔をしている気がする。それを見て心配するミレデイ。

『私がどこで生まれたのか……それはもちろん、M78星雲光の国だ』

『どういうこと？光の国はないんじゃない？』

『ない？違う。なくなっただ』

『は？』

『「え？」』

『話すべきか迷っていたが……話すしかないか……』

トレギアの回想

私がタロウの息子であるタイガに敗れ、私の中から《グリムド》が解き放たれ、グリムドと一体化した私はタロウ達に倒された。そして、気が付けば倒されたはずの私は宇宙を彷徨っていた。

『ここは……あれは!!』

周りを見てみると、見覚えがある星が見えた。だが、私が知っているものと少し変わっていた。

『いったい何が……』

見覚えのある星に向かおうとしたときだった。目の前に光の国の建物が流れてきた。私は光の国に何があったのか気になり、急いで向かった。そして、光の国があった場所には多くの怪獣や光の戦士、ロボットや宇宙船、光の国の建物などの残骸などが漂っていた。だが、光の国自体が見えなかった。そして、近くにウルトラマンジードの静雲荘が浮いていた。半分ほど壊れており、殆どの機能は失われている。だが、映像のような物だけ残っていた。

『こ、これは……?!』

映し出された映像を見て、自分の目を疑った。この記録によると、どこからともなく、今まで倒された宇宙人や怪獣達が蘇り、光の国に攻め入った。それだけではなく、別世界の怪獣や宇宙人もいた。種族や生息域などは関係ないようだ。まるでダークスパークウォーズの再現のようだった。だが、今回はジラースに似ているが、エリマキがない怪獣やそれと似た怪獣達、私も知らない金色の3つの首を持つ怪獣など、ウルトラマンもしらない世界の怪獣達がいるだけではな

く、これを起こした主犯はダークルギエルとは別のようだった。

『こんなことをできる者なんて…』

ダークルギエルさえ、あんな怪獣を連れて来れなかったのに、今回の主犯はダークルギエルよりも強いようだ。

『なんだこの力は…!!』

いざ、戦いが始まると、黒い怪獣が口から出す青白い炎はゾフィーのM87光線を押し返した。そしてゼロとベリアルがぶつかろうとしたときだった。光の国から何かの波動のような物が全員を襲った。その波動のせいでウルトラマン達のカラータイマーが一斉になった。その瞬間、光の国に巨大な亀裂が生まれた。

『?!』

この静雲荘によると、さっきの波動はプラズマスパークコアから出ていたと記されていた。そして、その巨大な亀裂から触手のような物が現れた。出てきた触手は宇宙船や怪獣達を次々と貫いていった。そして触手が貫いた怪獣達からエネルギーを吸い取り始めた。殆どの怪獣やウルトラマン達からエネルギーを奪い取ると、触手が亀裂の中へと戻った。すると今度は亀裂から怪獣のような手が出てきて、こじ開けるように亀裂を広げた。

『な、なんてデカさだ…』

ギンガ、ダークルギエル、ノア、ダークザギが巨大化して出てきた怪獣と戦おうとしたときだった。怪獣が咆哮を上げると、ギンガ達が巨大化する前まで戻り、ノアがネクサスまで退化した。

『夢でも見ているのか…?』

そして亀裂から出てきた怪獣はウルトラマンや怪獣達、宇宙船を食らっていった。食い終わると、今度は光の国自体を食い始めた。

（零斗）

『そして、私は宇宙を流れ、そしてここにつき、ミレディ達に出会った』
「つまり、光の国はあったけど、その怪獣に食われたってことか?」

『ああ、私が着いたときにはもう光の国はなかった。君が彼らの力を受け継いだ理由はわからない』

「その怪物が《メツドルス》なの？」

『ああ、《メツドルス》だ』

「え、ねえ…トレギアの出身地を聞きにここまで来たんじゃないよね？」

そして俺達は《メツドルス》の誕生を知り、ミレデイのことをすっかり忘れていたのであった。

変☆化

《メツドルス》の誕生の話、トレギアの話聞いていた俺達はミレデイの存在をすっかり忘れていた。それを知ったミレデイは泣き始めてしまった。

「ぐずん…これが運命の相手とか本当なのかな…」

「「え?」」

ミレデイが言った言葉に俺達は驚いた。

「ちよつと待て。運命の相手ってどういうことだよ。おばちゃんが占ったときは宇宙を泳ぐ竜って…」

『ふむ…すまないが、ミレデイを連れて行って上げてくれないか?』
「なんでだ?」

『ミレデイを占ったとき、君と後ろの彼女達と一緒にいる未来が見えた。なら、ここで別れるよりも君と一緒に行かせたほうがいいのではと思ってるね』

「そうか…連れて行く、連れて行かないはあとにしてさあ、取り敢えず神代魔法をくれない?」

『ああ、すまない』

トレギアに案内されて、一つの魔法陣の上に乗った。すると、俺の体が浮き始めた。

「……これって神代魔法の影響?」

「ううん。私の神代魔法は《重力魔法》だから浮くなんて…」

ミレデイの話を聞きながら、宙を泳ぐように移動した。

「あ、これ結構いいかも」

「え、いいの?」

「零斗、なにか新しい技能があるんじゃないの?」

桜に言われてステータスプレートを見た。すると、《浮遊》と《無重力》と《重力魔法》と言う技能があった。

「この《無重力》と《浮遊》が原因か?」

「それじゃない?」

「どうやったら止まるんだ?」

「あ、《無重力》と《浮遊》を止めればいいじゃない？」

そう言われて2つの技能を止めた。すると、俺の足が地面に着けた。

「そ、それで…私を連れて行くかって話は…」

「俺的にはそれでいいけど、冬花達は？」

「私はいいけど…零斗を独り占めにしないなら」

「私も、零斗を独り占めにするのなら嫌だ」

「そんなことしないよ！」

「トレギアはいいのか？」

『ああ、それでいい』

そしてミレディを連れて行くことになった。出口は何処かと聞くと、トレギアが一つの紐を引っ張った。それを見たミレディが嫌な顔をしていた。

「おい、その紐は何だ？」

「あ、あれはね…無理矢理追い出す紐で…」

ミレディが説明し終わる前に、トレギアが消え、部屋の奥から大量の水が押し寄せてきた。結界を張る暇もなく、俺達は激流に流された。

『冬花、桜、ユエ、シア、ミレディ！無事か?!』

『私達は大丈夫!』

『…ん。大丈夫』

『大丈夫だよ!』

シアだけ念話に入ってこなかった。俺はすぐに水面へと上がり、周りを見た。すると、後ろから何かがぶつかってきた。振り返って見ると、気絶したシアが流れてきた。

「シア!？」

俺はシアを引っ張って近くの陸に上がった。どうやら、シアは溺れたようだ。

「さて…溺れたときはどうすればいいんだっけ…」

「溺れたときは人工呼吸がいいよ！」

いつの間にか来ていた冬花にそう言われた。俺はシアが動かない

ように触手を伸ばしてシアの手足を拘束して、人工呼吸をしようとした唇を重ねた。すると、シアがカツと目を覚ました。

「コイツ、キスだけで目覚めたぞ」

「私達でも同じだと思うよ？それはそうと。シア、どうしたの？」

「あ！聞いてください！この川に人の顔をした魚がいたんです！ソイツが《なに見てんだよ》って言ってきたんです！」

シアがそんな人面魚の話をしていると、ミレデイ達が来た。シアが無事で安心していた。

「ここに人面魚とかいるんだね」

「しかも念話か…今度、コンタクトでも取ってみるか」

「それで、これから何処に行くツ?！」

ミレデイは何か感じたのか、空を見上げていた。何かを見つけていた。

「…ん。ミレデイ、どうし「逃げて!」?!」

ミレデイがそう言うと、俺達の目の前に銀髪の鎧をきた女性が降りてきた。

「見つけました。探しましたよ、我がマツ?!」

そう言いながら女性が着地した瞬間、足をぐねったのか、横に倒れた。それを見た俺達は少し驚いていたが、一番驚いていたのはミレデイだった。

魔人族襲来 元真なる神の使徒

ぐねって倒れた女性は動かなくなつた。ミレデイは今にも女性を殺す勢いで魔法を構築していった。

「待った。お前なにしてんだ？」

「レイトは黙って！よくのうのうと私の前に現れたわね!!ここであつたが百年目！絶対に潰してや「だから待て！」ひゃ?!」

言うことを聞かないミレデイを持ち上げると、そんな声をあげた。顔を真っ赤にしているが気にしなくていいだろう。

「それで、コイツはなんだ？」

「こ、コイツはノイント。あのクソヤロー神の人形だよ！」

目の前の女性、ノイントは倒れたまま起き上がろうとしない。

「それで、コイツは起き上がろうとしないけど…」

「きつと、助けようとしたところを殺すんだ！レイト、今すぐに「だから、待てつて」あう…」

ミレデイが静かになつたあと、冬花と桜がノイントに近づき、何かを確認した。

「零斗、ミレデイが言ってる通り、この人は人形っぽい」

「そういうのって見てわかるのか？」

「うん、体が冷たいのもそうだけど、目が生きてない」

「…ん。どういうこと？」

「絵で描いたような目つてこと」

「コイツ、降りて来て早々に倒れた「あう…ああ…」!？」

ノイントがゾンビのような声で喋り始めた。驚いて、距離を取つたが、ノイントは動こうとしなかった。

「おい、喋れるか？何しに来たんだ？」

「元主に…私の…大切な物を…奪われ…神の使徒を…やめて…来ました…」

「それで、俺のところに来て何がしたかつたわけ？」

「…新しい体と…感情が…欲しいです…」
「うん…」

俺は人形の怪獣から《キリエロイド2》と言うのを召喚した。
『キリキリ?!』

「あ、取り敢えず、お前は消えてくれ」
『キリキリ?!』

キリエロイド2を爆発させた。肉片などがあちこちに飛び散ったが、大体の体が残っているため、そこに《スファイア》を召喚し、キリエロイド2の肉片と融合させた。そして、《スファイアロイド》というノイントの新しい体が完成した。

「感情はまだ無理だが、体は作れる。これに入ってくれ」

ノイントの魂やらを《スファイアロイド》に入れると、《スファイアロイド》が少し変形し、前のノイントの体と同じ姿になった。

「っ!ち、力の制御が…!?!」

「ああ、そうだったな。慣れるまでこの首輪を着けてくれ」

そして力の制御のために首輪を着けた。すると、ノイントの力の暴走は止まった。

「すごい…ありがとうございます。我がマスター」

「…え?」

「は?我がマスター?」

「はい。私はもう《真なる神の使徒》でも、あの神の部下でもありません。我がマスターの部下です」

「はあ…」

「あ、気になったんだけど、何を奪われたの?」

「はい。ある学校の《文化祭》というので開かれた《女神店》というお店で作られた《四大女神冬花作プレミアムクッキー》と言う食べ物です」

「…え?!」

俺達は冬花のクッキーに驚いたが、それ以上に地球に来ていたというのに驚いていた。

「《文化祭》という期間限定のイベントの中でもかなり希少な初日限定

の上、そのお店はもうないので……最後の一個として残していたのですが、元主に食べられたので、出ていきました。いつかは復讐をしたんです……どうされました？」

「ノイント……そのクッキー……また食べるぞ？」

「ですが、お店はもうありませんよ？」

「いや、そのクッキーを作った調理人冬花がここにいるぞ？」

「本当ですか？」

あのクッキーは文化祭期間ずっと販売したかったが、冬花の事情により1日限定となつてしまった。だから、《プレミアム》として販売。そしてその二時間後に完売。

「えっと……調子がいい日になら……」

「ありがとうございます。なら、尚更元主から離れて正解でした」

「ミレデイも、コイツが俺の部下ならいいだろう？」

「むう……まあ、零斗がいいのなら……」

そして俺達にノイント、《スフィアロイド》が加わった。そして、技能に《スフィアロイド》が追加された。

商隊護衛

ミレディとノイントが新しく仲間に加わってから、数日が経ち、別の町に行くことになった。

「別の町かい、寂しくなるね」

「まあ、いつかは帰ってくるだろう。それでだ、なんか良さそうな依頼とかないか？」

「それなら商隊の護衛依頼に一つだけ枠があるよ」

「なら、それを受けよう。ちなみに、どこに向かうんだ？」

「ああ、《フューレン》と言う街だよ。あ、そうだ。これを持っていきな。ギルドの人に渡せばいいよ」

おばちゃんが一つの手紙のような物をくれた。中身が気になるが、見ないほうが良さそうだ。

「それじゃ、明日の朝一で正門に行つてね」

そう言われた翌日。おばちゃんに言われた通り、正門に来た。そこには馬車が数個と冒険者と商人らしき人達がいた。

「君達が最後の護衛かね？」

「そうだろう。あ、これ依頼書」

「…確認した。私の名はモットー・ウンケルだ。この商隊のリーダーをしている。君達のランクは未だ青だそうだが…キヤサリンさんからは大変優秀な冒険者達と聞いているよ。道中の護衛は期待させてもらうよ」

「まあ、できることはする」

「そうか。それはそうと…後ろのシアとノイント亜人と奴隷……売る気はないかい？」

「は？当たり前前だろ？大事な仲間だぞ」

「だが、今なら「コイツらは仲間だつて言つてんだろ。あまりにもしつこかったら…お前が次の日を迎えることなんてなくなるぞ？」!？」

そう言くと、モットーは離れて言った。その後、商隊が出発して、俺達も出発した。移動中は暇で、することがなかった。そして、そのまま夜になった。夜になり、シアが飯を作っていると、他の冒険者達も

来て食い始めた。

「うめえ!!ホント、美味いわあ、流石シアちゃん!もお、亜人とか関係ないから俺の嫁にならない?」

「テメエ!なに抜け駆けしてやがる!シアちゃんは俺の嫁!」

「は?お前みたいな小汚いブ男が何言ってるんだ?身の程を弁えろよ。ところでシアちゃん、町についたら一緒に食事でもどう?もちろん、俺のおごりでね」

「な、なら、俺はサクラちゃんだ!サクラちゃん、俺と食事に!」

「なら、俺はトウカちゃんだ!トウカちゃん、今度一緒に食事をしない?」

「ミレデイちゃんのスプーン……ハアハア」

「フツ:ノイントちゃん、一緒に夜の見回りにいかないか?」

そう言っている冒険者達を見て、冬花達が俺の後ろに隠れるように逃げた。

「つまり、お前ら全員人の嫁を奪う奴らなんだな?キャサリンのおばちゃんに報告しとくわ」

「二!それだけのご勘弁を!!二」

食事が終わったあと、再出発した。出発して数分後に、見張りの冒険者が声をあげた。

「敵襲!前方から1000以上!」

「なんだと?百以上だと?!最近、襲われた話を聞かなかつたのは勢力を溜め込んでいたからなのか?!街道の異変くらい調査しとけよ!!」

「くそ、引き返すぞ!今のうちならまだ「ああ、その必要はない」ひ、必要はないだつて?!1000以上だぞ?!」

「ああ、問題ない」

「だが、君達はランク青だろ?!」

「そうだな。最近登録したからランク青だな」

そう言い、ノイントに目線を送ると、ノイントが領き、馬車の前に降りた。

「行きます……【分解】」

ノイントがそう言うと、1000以上の魔物が一瞬にして塵になっ

た。それを見た冒険者達は開いた口が塞がっていなかった。魔物が消えると冒険者のリーダーらしき人物がきた。

「礼を言う、ノイントちゃんのおかげで被害無しで切り抜けることが出来た。ありがとう」

「気にするな。大したことじゃない。だろ？ノイント」

「はい。大したことないです」

「そうか…それでだ。さっきのは何だ？」

「なんだ…と言われましたも「言わなくていい」はい」

「別に聞いてもお前にはなんの得もないだろう？ほら、さっさと行くぞ」

「そ、そうだな。すまない」

そして、馬車が出発した。

あれから、何度か襲撃にあったが、俺の【暗黒火球】、冬花の【ライトニングジャベリン】、桜の【神花】の【エクスイリュージュン】、ユエの【破天】、シアの【ハンマー】、ミレディの【重力魔法】、ノイントの【分解】で難なく倒し、予定よりも早く街が見えた。

ランクは青

街が見えてくると、モットーがまた俺のところに来た。どうやら、シアやノイントのことを諦めていないらしい。

「もう一度「何度も言うが、コイツらを売る気ない」……そうですか」「なあ、護衛はここで終わっていいか？これ以上仲間を売り物として見られたくないんでな」

「そうですね。わかりました。護衛依頼はここで終わりで構いません」

そして、俺達はモットー達から離れ、街の中へと行った。そして、街の一つの机を囲み、宿探しをしようとしていた。

「どこがいい？要望があれば聞く」

「みんなで寝れるような大きいベッドがいい！」

「大きいお風呂も欲しい」

「…ん。ふわふわのベッドがいい」

「レイさんにトリミングしてもらいたいですう！」

「それはあとでやってやる」

「あ、貸し切りの温泉とかがいい！」

「要望意外と多いな…ノイントは？」

「私は…もう一度、トウカ様のクッキーを食べたいです」

各々の要望を聞き、いざ宿を探そうとしたときだった。デブ男が冬花達を気持ち悪い目付きで見ている。

「お、おい、ガキ！」

「ヒィ!？」

シアとミレデイが横にいたデブを見て、すぐに俺の後ろへと来た。

「あ？んだよテメエ」

「ひゃ、100ルタやる！そ、その亜人族と奴隷を渡せ！ほ、他の女は、わ、私の妾にしてやる！っ、ついてこい！」

わけのわからないことを言い始めたデブが相当気持ち悪かったのか、全員俺の後ろに来た。見れば冬花と桜が俺の裾をギュツと握りしめていた。

バキバキツ

それを見た瞬間、俺の中の何かにヒビが入ったような感じがした。俺はデブを睨み着け、右手には「八つ裂き光輪」があった。

「ヒイツ?! ね、レガニド! そのクソガキ共を殺せ! わ、私を殺そうとした! なぶり殺せえ!」

「坊ちゃん…流石に殺すのはヤバイですけど…半殺しぐらいにしときましようや?」

「やれえ! いいからやれえ! お、女共は、傷つけるなよ! 私のだあ!」

「了解ですぜ。報酬は弾んで下さいよ」

「い、いくらでもやる! さ、さっさとやれえ! お、女共は傷つけるなよ!」

デブが呼んだ冒険者、レガニドが俺の前に来た。

「おう、坊主、わりいな。俺の金のためにちよつと半殺しツ?!」

俺はレガニドの顔を持ち、壁に叩き付けた。少し、血が飛び散ったが、気にせず、今度は机に叩きつけた。机が真つ二つに割れた。その時にはレガニドは気絶していたが、俺にはどうでもよかった。

「お、おい! レガニドってランク黒の《暴風のレガニド》だろ?! あの冒険者に負けてるぞ?!」

周りにいる人達から声が聞こえたが、気にせずレガニドをデブに向けて投げた。

「ヒイ!?!」

血まみれのレガニドを見たからか、デブが怖がっていた。だが、そんなのお構いなしに、数回蹴った。すると、デブは気絶したのか、動かなくなった。そして、俺はレガニドの腕を千切る勢いで引っ張ろうとした。

「零斗! 止まって!!」

「もういいから、やめて!!」

冬花と桜の声がして、ハッと我に返る。

「…あれ、俺…何してたんだ?」

「それはこつちのセリフだよ!」

「零斗、さつき殺す勢いで力を振るってた」

「ま、マジか…なんでだろ」

そこにギルド職員を名乗る人達がやってきた。そして、おばちゃんから貰った手紙を渡すと、何故か客室に招かれた。

く桜く

零斗がレガニドと呼ばれる冒険者を殺す勢いで攻撃していた。その時、零斗の右目が赤くなっていた気がする。気のせいだといいいけど…なにか、零斗じゃない何か零斗の体を使って暴れたみたいない感じがした…そういえば、零斗が変身する怪獣の名前は何なのだろうか。

搜索依頼

おばちゃんから渡された手紙をギルド職員に渡すと、なぜか客室に連れて行かれた。

「ねえ、零斗。あの怪獣に名前あるの?」

「多分…ないな。ウルトラマン達の記憶の中にもあんな怪獣はいなかった」

「…ん。なら、みんなで決めよう」

「だね」

そこから、待たされている間、俺が変身する怪獣の名前を決めることになった。色々な案が出て、決めるのは難しかった。

「あ、じゃあ、《レト》なんてどう? 《零斗》から《い》だけ取って《レト》」

「…ん。レト、いい名前」

「《レト》……か」

そして、《レト》という名前に決まったのと同時に、部屋に誰かが入ってきた。

「レイくん、ハナくん、ハルくん、ユエくん、シアくん、ミレディくん、ノイントくん…でいいかな? 冒険者ギルド、フューレン支部支部長イルワ・チャングだ」

「なんのようだ? あのデブに関しての話か?」

「いや、それとは別件だよ。先生の手紙で君達のごことは把握した……: 単刀直入言う、君達の実力を見込んで一つ、依頼を受けてほしい」

イルワの顔が真剣そうな顔になった。そして一枚の紙のような物を俺達に見えるように机の上に起いた。

「…内容だが、これに書いてある通り、行方不明者の搜索だ。北の山脈地帯の調査依頼を受けた冒険者一行が予定を過ぎても戻ってこないため、冒険者の一人の実家が搜索願を出した。というものだ。伯爵は家の力で独自の搜索隊も出しているようだけど手数は多い方がいいと、ギルドにも搜索願を出したんだ。つい、昨日のことだが…最初に

調査依頼を引き受けたパーティーはかなりの手練でね、彼等に対処できない何かがあったとすれば、並みの冒険者じゃあ二次災害だ。相応以上の実力者に引き受けてもらわないといけない……だが、生憎この依頼を任せられる冒険者は出払っていてね。そこへ、君達がタイミングよく来たものだから、こうして依頼しているというわけだ」

「ふむ……俺達のランクは《青》だが……おぼちゃんの手紙を見て、俺達に依頼を持ってきたってわけか？」

「……そうだ。頼めるだろうか……」

「……俺達がソイツを連れて帰って来れたら、依頼報酬以外に、コイツら全員分のステータスプレートを無償でくれ」

そう言うのと、隣りにいたメガネが何か言おうとした。だが、イルワに止められた。

「いいだろう。ステータスプレートはこちらで用意しよう」

「頼んだぞ？」

そう言い、俺達は街を出た。街から少し離れた場所で《ダイナストライカー》を出した。そして、《ダイナストライカー》を運転して、依頼書に書いてある街、《ウル》に向かった。

「あ、そういえばなんだけど、元クラスメートとかにあったときはどうすればいいの？」

「ああ、前と同じで洗脳されたみたいなのでいいぞ。まあ、そんなことはないだろうがな」

「それって、私達もしたほうがいい？」

「いや、しなくていい。やると少しめんどくさいからな」

この時の俺は知る由もなかった。この近い未来、元クラスメート達と再会するなんて。

再会

（愛子先生）

「はあ…私は先生失格です」

私は生徒の暗躍を気づけず、清水くんもいなくなってしまうした。生徒のことをわからない私はいつまで経っても担任になれないんです。

「愛ちゃん、アイツのことなら私達も同じだよ。神咲さんも洗脳された雰囲気なんてなかった。アイツ、清水の《闇魔法》以上の《洗脳魔法》を使えるんだね…」

「ほんと、最低よね。四大女神の二人を洗脳して自分の物にするなんて…好きでもない相手の傍にいるなんて…女の敵よ！」

「ああ、アイツは女だけじゃない。俺達全員の敵だ」

「今度あったら絶対にボコボコにしてやる！」

「……………」

「園部さん？どうしたんですか？」

みなさんが夢咲くんの事を許せないと言っている中、園部さんだけ下を向いていました。

「え？あ、いや…夢咲は本当に私達を陥れるためにやったのかなって…」

「そうに決まってるよ！」

「そっか…園部はアイツに助けられたのか。そりや疑いたくなるよな」

「うん…もし、もう一度会えるのなら聞いてみようかなって」

「愛子達を罠にかけたヤツだ。嘘を付くだろう。勇者の言うとおおり、ヤツは最低だな」

そして、話している私達のところにお料理が来ました。皆さんと一緒に夕飯を食べていると、お店のオーナーさんが私達のところに来た。

「皆様、大変申し訳ないのですが…香辛料を使った料理は今日限りとなります」

「ええ?! どうしてですか?!」

「申し訳ございません。材料が切れまして…いつもならこのような事がないように在庫を確保しているのですが、ここ一ヶ月ほど北山脈が不穏ということで採取に行くものが激減しております。先日も、調査に来た高ランク冒険者の一行様が行方不明になりました。ますます採取に行く者がいなくなっていました。当店も次にいつ入荷するかわからない状況なんです」

「あの…不穏っていうのは具体的には?」

「何でも魔物の群れを見たとか、大きな魔物を見たとか、目撃者が日に日に増えるんです。山を越えなければ安全な場所なんです。山を一つ越えるごとに強力な魔物がいるようです。わざわざ山を越えてまでこちらにはくることはないようです。ですが、何人かの者が山向こうで魔物の群れを見たのだとか…」

「それは心配ですね…」

「ですが、その異変ももしかするともうすぐ終わるかもしれません」

「どういうことですか?」

「実は今日、新規のお客様が宿泊にいらしたのです。何でも、先の冒険者方の搜索のため山脈へ行かれるらしいです。フューレンのギルド支部長様の指名依頼のようで、相当な実力者のようです。もしかしたら、異変の原因も突き止めて、解決してくれるやもしれません」

私達が喋っていると、お店のドアが開く音が聞こえました。

「噂をすれば、彼等です。騎士様、使徒様方、彼等は早朝にはここを出るそうなので、もしお話になるのであれば、今のうちがよろしいかと…」

「そうか、わかった。しかし随分と若い声だな? 《金》にこんな若い者がいたのか?」

デビッドさんがそう言い、顎に手を当てて、首を傾げました。すると、外から冒険者さんの声が聞こえました。

「レイト、ここのお店はサクラの料理よりも美味しいの?」

「さあ? 食べてみないとわからないな。だが、ここは米を使った料理があるらしいからな」

「レイトさんは何が好きなんですか？」

「このカレー…《ニルシツシル》が思った通りの味なら、最高だな」

「トウカとサクラはどれがいい？」

「私もレイトと同じのかな？」

「私も！レイトとサクラと同じの！お母さんが作ったカレーが一番好きなんだよねえ」

聞き覚えのある名前と声が聞こえてきて、私達の手からスプーンなどが落ちそうになり、慌てて持ち直し、お皿の上に起きました。そして、私はカーテンを開けて言いました。

「神咲さん!!」

そこには神咲さんと夢咲くと、知らない女性達がいきました。

「あ、先生」

く零く

なんか、知らない女の子が出てきて、冬花と桜のことを呼んだ。しかも冬花と桜が《先生》と呼んだ。つまり、コイツは俺達の元先生と言うことだった。

「…せっかくの再会なのに俺に挨拶はなしか？」

「っ！夢咲くん！今すぐに二人の洗脳を解いてください！」

「……はあ」

どうやら、先生は檜山達の戯言を信じているようだな。

『零斗、喋っていい？』

ああ、好きにしてくれ。《チブセル症候群》がくとか言われたくないから早めにな。

「先生、聞いてください」

「神咲さん！…よかった…夢咲くん、神咲さん達を返してください！」

「先生、話を聞いてください」

「な、なんですか？」

「零斗が私達を洗脳したっていうのは嘘です。私達は洗脳なんかされてません」

「でも、天之河くんは洗脳されたって！」

「それは零斗が殺されてしまうかも知れないからです」

「そ、そうだったんですね…夢咲くん、さつきはすみませんでした」

「愛ちゃん！ソイツがそう言うように指示してるだけかも知れないのに信じるの?!」

「はい、私は二人を信じます！」

そう言われて、俺達はVIP席に案内された。そこには俺を睨みつける元クラスメート共と教会の騎士らしき集団が俺を睨みつけていた。元クラスメート共の中に、何故か下を向いているのが一人いた。

「それで、俺達をここに入れて、集団ランチにでもしようってか？」

「そんなんじゃないですね！幾つか聞きたいことがあるんです。神咲さん達はなんで夢咲くんに付いていったんですか？」

「そんなの、最愛の人を一人で何処かに行かせないよ。ね、桜」

「ええ、最愛の人を一人にすることなんてできない」

「え、ちよつと待って下さい！《最愛の人》ってどういうことですか?! さつき、洗脳されてないって…!」

先生の後ろの元クラスメート共はやっぱりと言った顔で俺を睨みつけてきた。

「勘違いしないでよ？私達が付き合ったのは高校に入る前なのもちろん、桜もね」

そう言うと、後ろの元クラスメート共の男が驚き、スプーンなどを落とした。

「そ、そうなんです…次に夢咲くん！幾つか質問させてください！」

「2つまでな」

「……わかりました。まず、その右目はなんですか？」

「なにつて…自分で言ってるだろ？目だよ」

「そ、そうですか…もう一つ、なぜ、神咲さん達を洗脳したように見せかけたんですか？」

「そうじゃないと天之河達が冬花と桜が俺を好きって思うかもしれないからな」

「それでいいじゃないですか!どうして…!」

「質問は2つまでと言ったはずだ。話は終わりだ」

そう言い、立ち上がって出ようとした。すると、一人の騎士が俺を怒鳴りつけた。

「貴様！愛子が質問しているだろう！真面目に答えたらどうだ!」

「はあ…他の客に迷惑だろ？行儀よく飯を食えよ。それすらもできないのか?」

「行儀よくだと?その言葉、そっくりそのまま返してやる。人間と同じ机にその《薄汚い獣風情》だけではなく、奴隷を座らせるなど、お前の方が行儀がなっていないな」

「はあ…コイツらは俺の女。奴隷 シアヒノイントコイツらをどうしようが俺の勝手、お前が一々口出していいことじゃない」

「貴様！愛子達と同じ神の使徒なら、エヒト様の「うるせえな。黙れよ」なんだと?!貴様、エヒト様から力を授かったくせにツ!!」

騎士がうるさかったので、騎士の上から人間サイズの《キングジョー》を落とす。

「夢咲くん!やめてください!デビッドさんが潰れてしまいます!」

「別にいいだろう?コイツらは俺の大切な女だ。奴隷 シアヒノイント大切な女を傷つけられたんだ。こうなつて当たり前だろう?」

「ですが!」

「零斗、ここでソイツを殺すのはやめて、ご飯食べる前にされると、ご飯が不味くなっちゃう」

「……それもそうだな」

桜に言われたため、《キングジョー》を戻した。すると、違う騎士が俺達の前に来た。

「夢咲くんですら優しいでしょうか…先程は隊長がすみませんでした。何分、我々は愛子さんの護衛を務めておりますから、愛子さんに関することになるかと少々神経が過敏になってしまうのです。どうか、お許し願いたい」

「別にいい。で、なに?」

「はい、貴方が持っていたあのアーティファクト……でしょうか。寡聞にして存じないのですが、相当強力な物とお見受けします。一体、

何処で手に入れたのでしょうか?」

「そ、そうだよ!今の、《オルクス大迷宮》の時とは違うけど、ロボットだろ!?なんでお前がそんなものを持つてるんだよ!」

「ロボット?玉井はあれがなんなのか知ってるんですか?」

「ああ、知ってるよ。だって、俺達の世界であんなの見たことあるから…」

「つまり、この世界のではないと…つまり、異世界人によって作成されたもの…作成者は当然…」

「さあ?俺も製法は知らねえからな」

「ですが、それを量産できればレベルの低い兵達も高い攻撃力を得ることができます。そうすれば、来る戦争でも多くの者を生かし、勝率も大幅に上がることでしよう。あなたが協力する事で、お友達や先生の助けにもなるのですよ?」

この騎士は《ダイナゼノン》や《キングジョー》が欲しいのだろうか。

「ならば「待つて下さい」…なんですか?」

「なんで、人間という別種族に私達種族の武器を渡さなくてはならないんですか?」

「「「え?!」」」

「神咲さん、別種族ってどういうことですか?!人間じゃないってことですか?!」

「どういうって…先に言ったのはみんなでしょ?『チブセル症候群は人間やめろ』って、言ったの忘れたの?」

「そ、それは…でも、それと神咲さん達が人をやめる理由なんて!」
冬花は先生が言った言葉に首を傾げて言った。

「わからないの?私と桜も零斗と同じ《チブセル症候群》ってことだよ?」

「「「?!」」」

「話は終わりだ。さ、行くぞ」

そう言って外に出ようとした。すると、先生とは違う、さつきまで下を向いていた女が腕を掴んでいた。

「腕を離せ。話は終わりだと」「最後に聞かせて!」…なんだ?」

「《オルクス大迷宮》での罾は本当に夢咲が檜山に命令したことなの?!」

「……………ああ、そうだ。俺がそう命令した」

「なんで…!?!」

「お前らが邪魔だからだ」

「!?!」

「答えた。そろそろいいか?これ以上俺の邪魔をするなら、誰であろうと殺す」

「……………」

これ以上付き纏われたくないため、嘘を付いた。すると、腕を掴む力が弱まり、俺達はVIP席を出た。

殺すと嘘を付けばもう邪魔しないだろう。

「マスター、少し用事ができたので外に出ます」

「ん?ああ、わかった」

そう言つてノイントが出ていった。

~~~~~

この世界に絶望していると、ノイントから電話が来た。

「もしもし!?!」

『お久しぶりです、元主』

「ノイント、こっちに帰つて『黙つてもらえます?』…はい」

『要件は一つです。亜人族に対する扱いを直さない。でない、マスターに元主の場所を教えます。では、もうかけないので』

そう言つて、ノイントからの通話が切れた。

亜人族に対する扱いを直せ…え、異世界物で亜人族つてだいたい奴隷じゃないの?そういうものじゃないの?あと、我は絶対に変えないぞ!亜人は奴隷!これこそ異世界!!

## 搜索

次の日、誰も起きてないような時間に起きた俺達は先生達と会いたくないため、すぐに正門の方へと行った。だが、俺達が来るよりも先に誰かが来ていた。

「……何をしているんだ？」

先生達だった。どうやら、騎士はいないようだ。よく見ると、少し眠そうだった。一番わかりやすいのは園部だった。昨日よりも落ち込んでるように見えるが、眠たいのだろう。

「私達も行きます！行方不明者の搜索ですよ？なら、人数は多いほうがいいですよ」

「無理だ。来るな」

「な、なぜですか?!」

「なぜ？お前らが足手まといな上に昨日も言った通り、邪魔だからだ」  
「じゃ、邪魔って……！」

俺がそう言うと、後ろにいた1人が俺を睨みながら言った。

「ちよつと！貴方が私達を恨んでるのはわかるけど、貴方を信じてる愛ちゃんにまで八つ当たりしないでよ！」

「は？邪魔を邪魔と言って何が悪い。お前らも俺らを邪魔だから、『消えろ』だの『どっか行け』だの言ったんだろ？」

「そ、それは……」

「そういうことだ。邪魔だからもう話しかけるな。搜索したければ勝手にして「待って」……桜？」

最後まで言う前に、桜に止められた。すると、桜が念話で話しかけてきた。

『付いてこさせて、わからせたほうがいい。私達がもう人じゃないってこと』

そうだな……仕方ないか。

「いいだろう。付いてくるなら来い」

そう言うと、先生はパーッと明るい顔になった。そして、先生達を連れて街から少し離れた場所に来た。



「ゆ、夢咲くん…ここで何を？」

「お前らが来るからな、新しいのを用意しなくちゃならねえんだよ」

「あ、新しいの？」

「そうだ。めんどくせえが、少し大きめの物を出さねえとな。アクセスマード・ダイナストライカー!!」

そう言いながら、《ダイナストライカー》を出した。

「こ、これは…!」

「さ、お前らも乗れ。乗らないのなら街に帰れ」

「ツ!!乗ります!」

先生はそう言い、《ダイナストライカー》に乗った。先生に続いて他の奴らも乗っていき、俺達も乗った。

「さ、出発するぞ」

「え?場所とかわかってるんですか!」

「知らん。道なりに進んで見るだけだ」

そう言い、《ダイナストライカー》を発進させて、や人が通った道を進んだ。周りの木が倒れていつているが、俺には関係ない。

「え、夢咲くん!周りの木が!!」

「知らん。そんなこと一々気にしてる暇などない。冬花、反応とかあるか?」

「…あつたよ!このまままっすぐ行つた場所!」

冬花がキャッチした反応を目指して進んでいると、川に出た。普通の川に見えたこの川だが、向こう岸の一部が何かでエグリ取られたあとがあつた。

「…ん。レイト、あそこになにかある」

ユエに言われて見ると、血のついた鎧やらかな武器やらが落ちていた。俺は《ダイナストライカー》を向け直して駆け寄り、落ちていた装備などを見た。

「ベヒモス…いや、ベヒモス以上の相手か?」

「ベヒモス以上って!大変じゃないですか!今すぐ街に戻って「駄目だ」ツ?!何故ですか?!」

「ベヒモス以上の相手なら、一々街に帰ってる時間が惜しい。冬花、何

処から反応がある?」

「あの滝と同じ…うん、それよりも少し向こう側?」

「滝の後ろに通路があるとかですか?」

「なるほど。ユエ、ミレデイ、できるか?」

そう聞くと、ユエとミレデイは頷いて魔法を発動した。すると、滝が割れて、奥に行く通路のような物があつた。

「この先か?」

「うん!この先だよ!」

冬花に確認を取り、奥へと進んでいった。すると、一人の子供が倒れていた。近づくと、寝息が聞こえた。俺はそれに少々イラついたので、悪夢を見せて無理矢理起こした。

「あ、貴方は…?!」

「お前はウイル・クデタか?」

「え?」

「どっちなんだ?答えろ」

「はい!ウイル・クデタです!」

本人かどうか確認して、イルワから依頼が出て探しに来たことを話した。

「そ、そうなんです…イルワさんに迷惑をかけてしまった…」

「ウイル、話は後だ。取り敢えず、ここを出て「そうだ、《ヤツ》はどこに行ったんですか?!」…なに?」

「た、大変だ…!」

ウイルが慌て始めるのと同時に、外から怪獣とは違う咆哮を聞いた。それを聞いたウイルの顔は真青になっていた。その正体が気になったので、外に出た。そこには真黒な龍が俺らを見下していた。

## 黒竜

黒竜は俺の後ろにいるウィルを見て、殺意を乗せた咆哮をあげた。その咆哮は怒りや憎悪などは感じず、心がないような感じだった。

「零斗！この竜、操られてるよ！」

「ほお…操られているのか？」

「うん、僅かに《闇魔法》を感じる！」

「《闇魔法》!?!」

なぜか《闇魔法》に先生が驚いていた。俺は先生を睨みつけながら言った。

「おい、なぜ《闇魔法》に驚いているんだ？何か知ってるのか？」

「え、あ…ち、違うといいんですが…数日前に何処かに消えてしまった清水くんが《闇魔法》を使えて…それで…」

「なるほどな。冬花、無理矢理正気に戻せないか？」

「う…ん…無理かな。かなり強力な闇魔法で、ある程度ダメージを与えるかしないと起きなさそう…」

話していると、黒竜がエネルギーを溜め始めた。

「ツ！避けろ!!」

「!?!」

「え、え、え?!」

俺がそう言うと、冬花達は避けれたが、先生達が避けようとしなかった。急なことに混乱しているのか、全く動こうとしなかった。

「チツ！」

そして、黒竜のエネルギーが溜まり終わったのか、口元に紫色の光球ができていた。俺は先生達の前に立ち、体の中から盾を出して、黒竜の攻撃を防ぐ準備をした。そして、黒竜の口元に溜められたエネルギーがレーザーのように一直線に俺に向かって放たれる。

「くっ…そうか、向こう側が抉れてた理由はコイツか！」

盾がどんどん溶けていき、盾にちよつとした穴ができた。そこからレーザーが俺の右目に直撃する。

「ぐっ…！ユエ、シア、ミレディ！」

「はいですう!!」

ユエとミレデイの【重力魔法】で黒竜が地面に叩き付けられたようで、レーザーが止まった。盾が少し溶け、後で修理が必要だ。

「ゆ、夢咲くん…」

「これでわかっただろ?お前らが邪魔だつてこと」

「うっ…」

「ノイント、コイツらを頼む」

「わかりました」

地面に叩き付けられた黒竜を叩こうとシアがハンマーを振り下ろした。だが、黒竜に当たることはなく、ただ地面にあたっただけだった。

「外しちゃいました?!」

「いや、あの状態でかわしたんだ!それほど強いと言うわけか…」

「零斗!またレーザーが来るよ!」

「ノイント!」

黒竜は俺達ではなく、先生達の後ろにいるウィルにしか目がないようで、またウィルを狙って撃たれた。だが、ノイントが銀色の羽を出して、レーザーを防いだ。

「なんだあの羽…」

「あの羽で色々な物を《分解》できるの。敵のときは本当に厄介だったけど、仲間になるとあんなに頼もしいんだね」

「そうか…桜、援護してくれ!アクセース、フラーツシュ!!」

そして、黒竜がレーザーを出しているすきにグリッドマンに変身した。そして、黒竜の首に膝蹴りをして、レーザーが止まったのを確認して、脳天に肘打ちをした。すると、黒竜の動きが止まった。動かなくなつたのを確認して、変身解除した。解除したら先生達が来た。

「もう用はないだろ?さっさと街に帰れ。俺はウィルをイルワの所に連れて帰るからな。もうお前らと会いたくねえから、さっさと俺の前からいなくなってくれるか?」

「っ…ご、ごめんな「嫌よ!」そ、園部さん…?!」

謝ろうとした先生の言葉を遮って、なぜか園部に拒否された。

「何が嫌なんだよ。別に、俺らがいなくなつて良かっただろ？お前らの願いが叶うんだぞ？ハッピーエンド、それで「違うー」…は？」  
「みんなはそうかも知れない。でも、私や愛ちゃんは一度もそんなこと思ったことも、願ったこともないわよ!!」

「はあ…それで？先生やお前が違うのなら、何を願つてるわけ？」  
うざつたらしかつたから、適当にやっていると、園部の目から涙が溢れ始めた。

「愛ちゃんはみんな地球に帰るのが願いなのよ！そのみんなには貴方だつて、神咲さん達だつて入ってるわ！それに、私のだつて…私だつて…!」

何か言いたそうだが、言えない感じだった。すると、園部がもつと泣き始めた。

あれ、俺何かしちやつた？園部を泣かすようなことした？見に覚えがない。え、え、どうすればいいの？

急に泣き始めたことに少し焦っていると、園部は泣きながら言った。

「ほ、ほら…わ、私達が邪魔なら…放つて行けばいいじゃない…な、なのに…そうやって…」

なるほど、完全に罠にハマつたと。

「それで、なにが言いたいわけ？」

「ぐすん…《オルクス大迷宮》での罠の本当の事を言つて！昨日言ったのは嘘なんですよ?!それに私達が邪魔ならそう言つて…でも、お願いだから本当の事言つて…」

「はあ…わかつたよ」

これ以上嘘は通じなきそうなため、本当の事を言うことにした。

「ああ、そうだよ。俺が命令したのは嘘。檜山が自分のために鉱石を採ろうとして、罠にかかった。俺は関係ないし、檜山なんか頼まねえよ」

「じゃ、じゃあ…なんで…」

「あ？言つても信じなかつただらう？つか、園部はなんで気づいたんだ？」

「だ、だって…私達が邪魔なら、態々助けるのおかしいし…貴方があのとき助けてくれたとき、そんな雰囲気なかったから…」

「どうやら、あのとき助けたのは園部だったらしい。それを教えたら、園部が少し泣き止んできていた。」

『あ、あのお…妾はこのまま寝といたほうが良いじやろうか…?』  
「「「?!」」」

声のする方を振り返ると、寝ていた黒竜が目を開けてこっちを見ていた。その目が、何処か温かい目に見えたのは気のせいだろう。

## ウルの防衛作戦！

嘘を見抜かれて、真実を話していると、黒竜が話しかけてきた。

「起きてたなら先に言え」

『うつ：なんかいい雰囲気じゃったから邪魔するのと思ったってだな…』

「それで、テメエはなんだ？」

「…ん。喋れるってことは竜人族？」

『む？いかにも。妾は誇り高き竜人族の一人じゃ。偉いんじやぞ？凄  
いんじやぞ？』「そういうのいいから、お前を操ったヤツを教えろ」ぬう  
……恐ろしい男じゃ。闇魔法に関しては天才と言っていていい、そんなレ  
ベルじやろうな。そんな男に丸一日かけて間断なく魔法を行使され  
たのじゃ。いくら竜人族の妾と言えど、流石に耐えられんかった』

そんな闇魔法を使えるのはこの世界でもいるかわからない。可能性が一番あるのは異世界組だけだろう。

「取り敢えず、お前名前は？」

『ティオじゃ』

「それじゃあティオ、お前竜人族なんだから人になれるな？なら、ウイ  
ルをイルワのところは無事に届けられるように護衛しろ」

『む？それぐらいなら構わんのじゃ』

そう言い、ティオが人の姿になり、《ダイナストライカー》に乗って  
移動しようとしたときだった。俺と冬花と桜はあり得ないほどのエ  
ネルギーを感じ取った。

「ノイント、上空から辺りを見回して、何かないか見てくれ」

「了解です」

ノイントが銀色の羽を出して、星空に向かって飛んだ。

「ど、どうかしたんですか？」

「気のせいだといんだけど…」

飛んでいったはずのノイントがすぐに帰ってきた。表情筋が死んで  
るから感情は読み取れないけど、何処か焦つていそうだ。

「数万の魔物が《ウル》に向かって進行しています」

「さっきのは魔物の…？いや、流石に…」

「い、急いで街の皆に知らせないと…!!」

そう言い、ウィルが走って街に戻ろうとした。だが、俺はそれを見逃さず、ウィルに触手を伸ばして捕まえた。

「今から走ってどうする。それだと間に合わない。時には諦めることも大事だぞ」

「ツ!!? 貴方は諦めれるんですか?!」

「ああ、俺達の依頼はあくまで「夢咲くん」…先生、人が別の人と話してる時は喋りかけちゃ駄目だろ…いや、俺は人じゃないからいいのか…で、なんだ?」

「はい、夢咲くんが依頼以外で人を助けられないのなら、私が依頼主として、夢咲くん達に依頼します!」

「あのさあ、依頼つてのは対価があるんだ。金とかさ、あんたに払える物とかあるのか?」

「た、対価…ですか…?」

まさか、元恩師だから何でも行けると思われてた? それはそれでショックだな。

「そう、対価だ。決めるなら早くしろよ? お前が悩めば悩むほど、魔物の大群が街に迫っていくんだからな」

「そ、その対価は後で払うのは駄目ですか…?」

「…:はあ、仕方ねえな」

そう言いながら俺は先生達を掴んで《ダイナストライカー》の中へと投げ込んだ。それに続いて冬花達も入っていき、最後に俺が操縦席に着いた。

「仕方ねえが、今回だけだ」

そう言い、《ダイナストライカー》を発進させた。だが、《ダイナストライカー》で間に合いそうに無いため、ウルは街へのワープホールを《ダイナストライカー》の路線上に出して、そのワープホールの中へと入り、ウルにかなりの近道で行った。

着いてすぐに全員を降ろして、《ダイナストライカー》を直した。

「冬花、街に壁のような物を作るか?」



「うん、やって見るね！」

そう言い、冬花が25メートルぐらいの高さがある壁を作った。そして、準備をしていると、先生達が近寄ってきた。

「夢咲くん、何か手伝うことはありませんか？」

「……そうだな。集中したいから、話しかけないでくれ、俺のを手伝う暇があるなら、対価ぐらい考えとけ」

「貴様！愛子が……自分の恩師が声をかけているというのに何だその態度は!!本来なら、貴様の持つアーティファクト類の事、大群を撃退する方法についても詳細を聞かねばならんところを見逃してやっているのは、愛子が頼み込んできたからだぞ？少しは「もう一度言う。話しかけるな」貴様!!」

「テメエ一人のせいでも万全じゃない状態で戦って、ウルの街が消えてもいって言うのならば、続けろ」

「デビッドさん、少し黙ってください」

「うぐつ……承知した」

先生がそう言うのと騎士は黙って何処かへと行った。そして、今度は邪魔されないように壁の上で準備をし、丁度終わったところにシアが来た。

「レイトさん、魔物が見えてきました」

「わかった。なら、やるか……」

そしてウルの街の防衛戦が始まろうとしていた。それと同時に、誰も知らない場所で何者かが動いていた。

く???  
く

「我が主、報告です！先程、《メツドルス》から複数の生命体が《ウル》に向かって発射されました。物凄いスピードです！」

「《メツドルス》の分身体とかか?!」

「いえ、分身とは少し違うようで……もうすぐで大気圏に突入します！」

「何という速さだ……《メツドルス》がいる場所は1光年以上も離れた場所のはず!!そこからもう大気圏にだと?!」

## 防衛

魔物の群れが見えたとき、俺は《グリッドマンキャリバー》と《ベリアロク》を持って魔物の前に立った。冬花、桜、シア、ノイントも各々の武器を持って降りた。ユエとテイオは街の防御をしていた。

「グリッドキャリバーエンド」！「デスシウムフアング」！！」

二種類の武器を使い分けながら、魔物殲滅に専念した。桜も《神花》、シアはハンマーを使って魔物を一層した。途中、見たことない白い魔物がいたが、《ベリアロク》の前ではなすすべなく散った。

「やっぱり数が多い!!」

「零斗、見て!!」

冬花に言われて空を見上げると、怪獣がいた。怪獣の見た目は右手にハサミ、左手に巨大な目を持ち、腹にも顔のようなものがある《ファイブキング》と呼ばれる怪獣だ。

「チツ……！天空を駆ける、高速の光!!ウルトラマントリガー!!」

トリガーのスカイタイプに変身してすぐに上空を飛び、サークルアームズをアローに変え、ファイブキングに向かって矢を撃った。ファイブキングは腹から複数の光弾を発射させて、矢を撃ち落としてきた。

『なら、これはどうだ!!』

アローの刃の部分で斬りかかり、横から数本の矢を撃った。何本かはファイブキングによって落とされたが、残った数本はファイブキングの羽に当たり、飛べなくなつて落ちた。

『キュハハハ!!』

ファイブキングは飛べなくなつたが、俺を倒す以外のことを考えたようで、街に向かって体の全てから光弾、炎、レーザーなどを街に向かって撃った。

『させない!!』

冬花と桜がロツソフレイムとブルアクアに変身し、バリアを張って防いだ。

『待つてろー！アクセス、フラッシュシュー！アクセスコード・バスターボ

ラー!!武装合体超人!バスターグリッドマン!!』

冬花達が防いでいる間に俺はバスターグリッドマンに変身し、ファイブキングに向かって「バスターグリッドミサイル」を撃った。ファイブキングは横からの攻撃に驚き、標的を俺に変えた。

『冬花、桜!』

『うん!』

冬花と桜は頭のとさかから《ループスラッガー》を出してファイブキングに斬りかかった。ファイブキングは左手の巨大な目と左手の巨大なハサミを失い、怯んだ。

『決めるよ!桜!』

『うん、わかった!』

最後は二人の「フレイムアクアハイブリッドシュート」を受けて爆散した。そして、俺が戦っている間にユエ達によって魔物は全滅し、防衛戦は終わったように思えた。だけど、爆散したファイブキングの体が元に戻り始めた。

『なにつ!!勝利を掴む、剛力の光!!ウルトラマントリガー!!』

復活したのかとトリガーのパワータイプに再変身し、身構えた。だが、何も起こらず、ファイブキングは再び爆散した。

『なんだったの...?』

『わからない...けど、不思議』

『いや、怪獣が動いたことに驚けよ。つか、なんのために...?』

なぜファイブキングが動いたのか考えていると、ファイブキングの右手のハサミが突然、俺に向かって飛んできた。

『ぐっ...!!?』

『零斗!!?』

『二レイト!!?』

体はないのに突然動き始めた。首を挟まれてすぐにカラータイマーが鳴り響いた。ハサミをこじ開けようとしたが、パワータイプでも開けられなかった。そして、ハサミは少し緩くなったと思ったら、さっきの倍の力で挟んできた。その結果、耐えれずに俺は変身解除された。その時、ガッツスパークレンスとマルチタイプ、パワータイプ、

スカイタイプ、エタニテイのガッツハイパーキーが俺の手元から離れた。

「ひひひ…これを待っていた…」

謎の黒いローブを着た男がガッツスパークレンスとハイパーキーを盗んで魔物達が来た山の方へと消えていった。

「ま、待ちやがれ！」

『あ、待って零斗！』

黒いローブを着た誰かを追いかけると、謎の黒いローブを着た誰かと十字架に貼られた数名の魔族がいた。どうやら、魔族は死んでいるみたいで、息をしていなかった。

「夢咲くん!!」

「先生か…：…おい、お前は何者だ。そのアイテムを返せ」

俺がそう言うのと謎の黒いローブを着た誰かがそのフードを外した。すると、黒いフードで隠れて見えなかった物が見えた。

「ッ!?清水くん!!?」

「久々だな、先生」

「今までどこに行っていたんですか?!先生、心配で…」

先生はそう言うが、清水という男は無視をしてガッツハイパーキーを一つずつ魔族の前に置いた。それを見て先生達は吐きそうになっっていた。

「何をやる気だ?」

「何を?面白いことを聞くな。もちろん、光になるんだよ。お前と同じようにな。だが、人間ではなく魔族の光にだ」

「お前にそれが使えるわけ無いだろう?返せ」

「いいや、使える。なぜなら、俺もお前と同じ《チブセル症候群》だ。

しかも《チブセル適合者》なんぞな」

そう言うのと、清水は魔族が貼り付けられている十字架の中央にガッツスパークレンスを起き、鞆のような場所から取り出したもう一つのガッツスパークレンスのトリガーを引いた。すると、魔族が光始めたと思うと、それぞれの光の粒子になって清水が持っているガッツスパークレンスに集まった。ハイパーキーも同じようにエネルギー

ギーだけが集まった。魔人族が完全に消えると、清水が黒い光に包まれていった。そして、光が消えると、清水がいた場所に巨人がいた。トリガーに似ているが、トリガーとは全く違う。

『来い、お前が光ならば、俺は影だ!!!』

俺はガッツスパークレンスとハイパーキーを取り、清水を見て少し笑った。

「俺が光?.....違うな。俺は光と闇だ!!宇宙を照らす、超古代の光!!ウルトラマントリガー!!」

変身して清水の前に立った。清水の体から闇エネルギーが放出するように、俺の体からも光のエネルギーが放出していた。

## 光と闇VS光の影

『これが、これが光の力か…!!』

そう言いながら、清水は黒いエネルギーを纏い始めた。俺は《サークルアームズ》と《グリッターブレード》を出した。

清水の腕と俺の腕が交差し合うように打つかった。清水は本気を出しているのか、少し圧されはじめた。

『お前はいいよなあ、俺と違って変威獣<sup>カ</sup>があつてよお!!』

『なんだと…?』

『その力があれば、地球を自分の物にすることも、人間を絶滅させることもできる! 魔族も例外じゃねえ!! 最高じゃねえか! なんで今まで隠してたのか不思議なくらい、いい力じゃねえか!!』

清水にそう言われて、頭の中の何かが切れた。確かに俺には力がある。だが、力を手に入れるのと引き換えに人間としての存在も、血の繋がった家族も失った。

『これがいいだと…?…お前のほうがまだいいだろうが……俺達と違って人間として過ごせたんだからなッ!!』

『ッ!?!』

眩しい光のエネルギーと一緒に全てを塗り潰す黒いエネルギーが混ざり合い、俺の体へと集まってきた。そのエネルギーが体の中に入ってくると、底から力が湧いてくる。

『なんだ?! なんで圧されるんだ?! これはお前と同じ力のはず?! お前か』

ら奪った力だぞ?!なんで俺が圧されるんだ!!?」

『ふざけるな…俺の力とお前のその紛い物と一緒にするな!!』

『ぐっ…!!俺は!光になるんだあ!!お前ら人間…特に先生だ!!アイツを殺せば俺も光にツッ!!』

清水の顔を殴ろうとしたが、当たりそうにないため、エネルギーを纏わせた右足で蹴ることにした。足先から清水へと光と闇のエネルギーでできた斬撃が体を切り裂くように清水を襲った。

『があ?!』

清水のカラータイマーが鳴ってすぐに清水の変身が解除され、人間に戻り、俺から奪った力も消えていた。

「なんで…なんで…うぐっ!!」

俺は清水の胸ぐらを掴んで、殴りかかった。だが、何か俺の腕を掴んで、止めようとしてきた。振り返ってその正体を確認した。その正体は先生と園部だった。

「離せ。コイツを殺せねえ」

「なら尚更駄目です!」

「夢咲、言ったよね?先生の願いはみんなで地球に帰ることって…」

「…………それは生徒達の先生だからか?生徒が人殺しにさせないためか?」

「いいえ、先生は生徒が間違った道を行かないようにするのが仕事です!!」

「……………」

「零斗…清水さんからはもう敵意を感じない。だから、先生に任せればいい」

桜にそう言われて清水を離れた。清水は俺に恐怖を覚えたのか、清水の体が震えていた。清水に寄り添うように近寄った。

その時だった。ダークザギの未来予知で先生と園部が死ぬ未来が見えた。

「ツ!危ねえ!!」

「レイトさん?…ツ!避けてください!!」

「え…?」

シアが二人を守るように覆いかぶさり、俺が3人を守るようにレトに変身した。すると、空に浮かぶ星からレーザーのような光線が二人に向かって撃たれ、俺がバリアを張って防いだ。

『星からレーザー？』

レーザーを撃つてきた方を見ると、数体の球体が浮いていた。眺めていると一つの球体に他の球体が集まり、なにかの形になった。

『あ、あれは…確かルーゴサイト…！だが…色が違う！』

球体が集まって変化したのはルーゴサイトだった。だが、色が違った。俺が知っているルーゴサイトとは色が少し違い、赤っぽい色の皮膚が黒くなり、青色の鎧のような部分が白色に変わり、爪や頭の角のような物が紫色に変わっていた。

『我が名は滅亡集合体《コスモイーター》。我が主…メツドルス様よ、我が主の対となる存在の排除を命じられ、ここに参上した』

「対になる存在…？」

『そうだ。貧弱な生命体に紛れたその者こそ、我が主の対となる存在だ』

そう言い、コスモイーターは俺を指さした。

『俺…？』

『そうだ。お前が我が主の対になる存在。ここで排除する！』

そう言い、右手にエネルギーを集中させ、刃のような物を作り、俺に向かってきた。



零斗？

くユエく

レイト達がコスモイーターの攻撃を受け止めて、私達が避難する時間を稼いでくれていた。その間、私達は街の方へと走っていた。

「…ん。先生方、こっち」

「は、はい！」

「これ、テイオさんで飛んだほうが早くないですか？」

「防衛は任せてください」

そして《竜化》したテイオの背中に乗って街へと向かった。後ろに振り返ってレイト達を見るとコスモイーターがサクラとトウカを念動力で投げ飛ばし、レイトが熱線をコスモイーターに向かって撃つけど、コスモイーターは魔法陣のようなバリアを出して防いだ。

「夢咲くん達は大丈夫でしょうか…」

「大丈夫だよ。レイト達とはそこまで長い付き合いじゃないけど、わかる」

ミレディの言う通り、レイト達なら大丈夫。私もシアもそう思う。

く零斗く

俺が思っている以上にヤバいことが起こってしまった。コスモイーターの念動力は凄まじく、俺達は一方的に倒されるだけだった。

『零斗、駄目…今の私達じゃコスモイーターにダメージを与えることができない』

『うん、悔しいけど…桜が言ってる通り…』

『くっ…認めたくないが、俺もだな…』

俺達がそう話していると、コスモイーターは余裕を見せるかのように俺達の前に降りてきた。

『まだ本気を出さないようだな。我を侮っているのか？』

侮っている？俺達はいつも本気（人間以外）だ。

『零斗。二人に闇と光のクリスタルは渡さないのか？』

謎の声にそう言われて、俺は手元にある2つのクリスタルを見た。

コスモイーターに勝つためにはこの2つを冬花と桜に渡すべきなんだろう。だけど、何故かこれを渡してしまうと、二人が変わってしまう。そう思った。だが、渡さなかったら二人が死んでしまうような気がした。

『……冬花、桜……二人にこれを渡す』

そう言って二人に光と闇のクリスタルを渡した。

《ウルトラマン！》

《ウルトラマンベリアル！》

《弾ける！最強の力！！キワミクリスタル！！》

『『セレクト！ クリスタル！』』

《兄弟の力を一つに！》

『『纏うは極！金色の宇宙！』』

《ウルトラマンループ！》

冬花と桜の後ろに極という文字の幻影が現れた。そして、二人を中心に竜巻のような物が発生した。

『ほお……面白そうなものが見れそうだ』

そして竜巻が弾けて、二人がいた場所に一人のウルトラマンがいた。そのウルトラマンからは冬花と桜と同じ気配を感じる。

『凄い……』

『変身するとき、兄弟って言ってなかった？ 私達姉妹なのに……』

『気にしないほうがいい』

『二人共、目の前の敵に集中しろ』

冬花と桜、改めてループはコスモイーターに向かって跳んで急接近し、ループコウリンで斬りかかった。コスモイーターはそれを華麗に避けて念動力でループを跳ね飛ばした。

『なるほど。貴様らも本気ではなかったのだな。なら、我も本気を出そう』

『うそ……?!』

『今までののは全然本気じゃなかったってこと?』

『そういうことだ』

そう言うと、コスモイーターの尻尾からミサイルのような物が俺達

に向かって撃たれた。

『任せて!』

冬花がそう言うと、ループの周りにギンガ達の幻影が現れ、幻影がコスモイーターに向かってそれぞれ光線を撃った。コスモイーターのミサイルは全て撃ち落とされた。

『ぐっ……なら!!』

コスモイーターは念動力で幻影の光線を防ぎ、瞬間移動で俺達の後ろに回った。そして、ループに向かって触手を伸ばした。

『そこに来るのは予想済み!!』

『なにッ!』

桜がそう言うと、ループコウリンで後ろから攻撃しようとしたコスモイーターに斬りかかった。

『うぐっ…!!なぜだ!』

『俺達が今も成長しているということだ!!』

『なにっ?!』

右手の爪のようなところにエネルギーを溜めコスモイーターに斬りかかった。だが、俺の爪は片手で止められた。

『……そんな一本の爪で我を倒せると思っているのか?それほど我を見下すか……なら……消え失せろ』

その言葉とともに、コスモイーターは再び空まで飛び、手を広げてエネルギーを溜め始めた。それを見てすぐに、未来予知で何が来るのかを見た。それを見て、俺の中で何かの鎖が壊れて、何か解き放たれた。

く冬花く

『死ぬがいい。貴様のような者が我が主の対になるなど、間違っているのだ』

コスモイーターはそう言うと、私達に向かって極太レーザーを撃ってきた。さつきみたいに光線を撃つ時間もない。私達は死んでしまう。そう思った。

『……やっただな』

『え……?』

零斗がそう言うと、レーザーを左手で跳ね返した。跳ね返されたレーザーは宇宙へと飛んでいった。

『雰囲気が変わった……?しかし……この感じは我が主とどこか』

『零斗……?』

『零斗なの……?』

零斗?は自身の手を握ったり、肩を回したりして、まるで体の動かし方を覚えようとしているような感じだった。

『ふむ……こんな感じか』

『貴様は何者だ?なぜ、先程雰囲気が違う?』

『メツドルスの細胞獣か……眠気覚ましの運動程度にはなるか?』

『何をごちゃごちゃと……!!』

コスモイーターは先程と同じようにエネルギーを溜めて、レーザーを撃とうとした。

『零斗、危ない!!』

桜がそう言うと、零斗?は一瞬だけ振り返って私達を見た。

『………流石というべきか、なんと言うべきか』

『え?』

『………』

コスモイーターは零斗?に向かってさっきのとは段違いのレーザーを撃った。だけど、零斗?はそのコスモイーターのレーザーを片手で弾き返した。

『あ、あれは我が主の技でもあるのだぞ!!』

『………なら、メツドルスが弱くなった。そういうことだな』

『なんだと!?!』

『おしやべりはここまでだ。次はこちらから行かせてもらう』

零斗?はそう言うと、レトの姿で出せるのか不思議に思うぐらいのスピードでコスモイーターに斬りかかった。

『だが、スピードはこちらも負けては……!!』

『まだまだ!【ライトニング】!!』

零斗?がそう言うと、額のクリスタルや体の一部一部が青白くな

り、電気のようなものを纏っていた。

『グルアアア!!』

『早いッ!?ぐっ…!!』

私達の目でも追えないほどの速さになった。まるで、雷になったかのようなスピードだった。そのスピードでコスモイーターに斬りかかった。コスモイーターは何度も瞬間移動するが、零斗?は空中を蹴って方向転換してコスモイーターに攻撃する。

『凄い…』

『零斗なのかな…』

『わからないよ…零斗の感じはするけど、どこか違う感じ…』

私達が話していると、零斗?はコスモイーターに向かって熱線を撃った。

『我は絶対に負けぬ!!』

コスモイーターもレーザーを撃つけど、零斗?のレーザーには敵わず、なんの抵抗もできずに爆発した。コスモイーターが爆発して、消えると零斗?は人間に戻ったようで、いつもの姿に戻った。だけど、なぜか動かずに地面に向かって落ちていった。

『『零斗!!』』

私達は急いで零斗の落下地点まで行って、零斗をキャッチした。

『よかった…』

『うん、そうだね』

でも、今の私達は気づけずにいた。零斗の右目がまた変わっていること…

## 約束

「ん…うん…」

この頭の下にある柔かい感触は…冬花のでも、桜のでもない…なら…誰だ？

重い瞼を持ち上げ、誰なのか、確認した。そこには冬花でも、桜でも、ユエ達でもない。園部優花だった。寝ていた場所はどこかの宿の部屋のようにった。

「…なにをやっている？」

「神咲さん達が…／＼／＼」

園部は何故か顔を赤らめていた。冬花達がなにを言ったのか疑問を持ちながら、体を起こして、時間を確認した。

「昼か…」

「えつと…ご飯食べる？」

「そうだな…飯ぐらくわねえとな…」

「あ、ちよつと待ってて！」

「あ？」

園部が部屋から出ていき、俺だけが取り残された。部屋には鏡があつた。

「あ？」

鏡に映っていた俺の右目が前の目と違っていた。

「なんだこれ…」

前のような目とは違う。爬虫類のような、猫のような目になっていた。

「まるで怪獣…いや、俺は《変威獣》だったな…」

自分の変わってしまった姿に少し驚いていると、園部が部屋に帰ってきた。なにかの美味そうな匂いがして、振り返ると園部が料理を持ってきていた。

「その目…」

「もう人間じゃない…その証拠だな」

「そ、そうなんだね…」

「それはそうと、その飯…くれるのか？」

「え？あ、うん。私が作ったんだけど…口に合うかな？」

そう言いながら、料理を俺の前に置いてくれた。

「美味しいな…」

「あ、ありがとう…」

なぜ、コイツはここまで俺に優しく接するのだろうか。人間ではない、あんなに冷たく接していたのに、なぜなのだろうか。俺はそれが不思議で園部を見た。

「ど、どうしたの？」

「なんで、俺にそこまで優しくするんだ？」

「え?!／／／そ、それは…」

園部は言いたくないのか、下を向いて、なにか言っていたが、俺には聞こえなかった。そこへ桜が入ってきた。

「零斗、起きたの？」

「ああ、ついさっきな」

「あ、お、お皿片付けてね！」

そう言うと、園部は逃げるように出ていった。

「ユエ達は？」

「先生達と話してる。それよりも零斗、園部さんが言いたいことがあるって言ってたんだけど、なにか言われた？」

「ん？なにも言われてないぞ？」

「そう…」

桜と話していると、園部が帰ってきた。桜は園部の手を取って、俺の前に座らせた。

「えつと…神咲さん？こ、これは…」

「零斗に言いたいことを言って」

「そ、それは…「好きなんですよ？零斗のことが」なんで…?!」

「見てたらわかる。園部さんの目は恋する乙女目の目。園部さんは零斗が人間をやめたってことを認めたくなかった」

「ッ!？」

「零斗が自分から裏切ったって言ったのに、園部さんだけ信じなかつ

た。好きな人が敵になるのが嫌だった。違う?」

「そ、それは…」

桜が言っていることがわからなかった。桜が言っていることが本当なら、園部は俺のどこに惚れたのだろうか。

「多分、零斗が《オルクス》で助けたときだと思う」

「ああ、あの時か…園部」

「え?…な、なに?」

「桜が言っていることは本当か?」

俺がそう聞くと園部はゆっくりと頷いた。

「なら…無事に地球に帰れたとき、お前のその気持ちが変わらなかったかどうか、俺が聞く。もし、変わらなかったら…その時、お前が一番したいことを言え。大抵のことはやってやる。」

「ほ、本当に…?」

「ああ、約束だ。んじゃ、桜、みんなを集めろ。そろそろウィルを連れて出発するぞ」

「わかった」

そう言い、部屋を出た。ウルから出ていくとき、園部だけ何も言わずにジツと俺達を見ていた。その後、ウィルを乗せて、《フューレン》まで車を走らせた。



## 無事帰還

ウイルを連れて無事に《フューレン》に帰ってきた。帰ってきてすぐに、ウイルを連れて、イルワのところへ向かった。

「ウイル！ウイルなのか？！無事なのかい？！」

「イルワさん！」

二人はお互いを確かめ合うように抱きしめあった。

「イルワ、報酬の《ステータスプレート》」

「ん？あ、ああ、すまない。もう用意はできている」

「早いな」

「君達が出ていってすぐに用意したからね」

早いな。ウイルが死んでるかもしれないのに、用意したのか。

「ウイル、グレイルやサリアに顔を見せてくるといい。君の無事ともう連絡してある。案内させよう」

「父さんとママが？！レイトさん、お礼は後で必ず！」

「ああ、お礼とかいいからさっさと親のところに行け」

ウイルが風のように早く部屋を出ていった。ウイルが出ていったのを確認すると、イルワが俺達の前に座った。

「今回は本当にありがとう。まさか…本当にウイルを生きて連れ戻してくれるとは思わなかった。感謝してもしきれないよ」

「依頼を無事にこなす。それが俺達だ」

「そうか…ここからは一ギルドの支部長として聞きたい。いったい、あの山で何があった？」

「…聞いても驚くなよ？」

俺はイルワに魔物の一万を超える群のことだけを言った。

「そんなことが……わかった。依頼の報酬に追加報酬をつける」

そしてイルワが報酬であったユエ達の《ステータスプレート》をくれた。

ユエ 323歳 女 レベル：75

天職：神子

筋力：1200  
体力：3000  
耐性：600  
敏捷：1200  
魔力：69800  
魔耐：71200

技能：自動再生・痛覚操作・全属性適性・複合魔法・魔力操作・魔力放射・魔力圧縮・遠隔操作・効率上昇・魔素吸収・想像構成・複数同時構成・血力変換・身体強化・魔力変換・体力変換・魔力強化・血盟契約・高速魔力回復・生成魔法・重力魔法・■■■の加護

シア ハウリア 16歳 女 レベル：40

天職：占術師

筋力：60 (6100)  
体力：80 (6120)  
耐性：60 (6100)  
敏捷：85 (6125)  
魔力：3020  
魔耐：3180

技能：未来視・仮定未来・魔力操作・身体強化・部分強化・変換効率上昇・集中強化・重力魔法・■■■の加護

テイオ クラルス 564歳 女 レベル：89

天職：守護者

筋力：770 (4620)  
体力：1100 (6600)  
耐性：1100 (6600)  
敏捷：5800 (3480)  
魔力：4590  
魔耐：4220

技能：竜化・竜鱗硬化・魔力効率上昇・身体能力上昇・咆哮・風纏・

魔力操作・魔力放射・魔力圧縮・火属性適性・魔力消費減少・効果上昇・持続時間上昇・風属性適性・魔力消費減少・効果上昇・持続時間上昇・複合魔法・■■■の加護

ミレデイ 17 (自称) 歳 女 レベル：79

天職：道化師

筋力：1200

体力：3000

耐性：600

敏捷：1200

魔力：69800

魔耐：71200

技能：重力魔法・■■■の加護

あれ？ミレデイの技能が《重力魔法》だけになってる…？

「あ、そうだ。イルワ、俺達はこの後、少し用事があるから、依頼の報告はこれでいいか？」

「ウィルの両親が君にお礼を言いたいらしいんだが…その後では駄目だろうか」

「うくん…お前らは大丈夫か？」

全員に確認して、ウィルの両親のところへと向かった。ウィルの両親がいる部屋に向かうと、凄い数のお金を渡された。5キロは軽く超えているだろう。それほど、ウィルが大事だったらしい。

「親…か…」

その日の夜、俺達はもういなくなった親のことを思い出した。記憶は少ししかないが、大切な親だったということだけは覚えている。

「あれから15年…あつと言う間に過ぎたな…二人は元気かな…今の母さんはなにやってるんだろう…」

俺、冬花、桜は星空を眺めながら話していた。

「もしかして、こっちに向かってたりして！」

「流星にそんな…なんて言えない」

「ああ…実際、謎が多すぎて俺達もあの人の人間関係も、仕事も知らないんだよな…」

「あ、家の掃除はできてるのかな？」

その頃の家

「あの…隊長、掃除しろって上から言われてましたけど、奥さんの部屋って入っても大丈夫なんですか…？」

「いや…やめておけ。上に怒られちまいそうだ…」

「隊長！子供の部屋はどうするんですか?!男の子一人、女の子三人らしいですけどー！」

「なにい?!女子の部屋は後回し…いや、誰か女性隊員呼んでこい！」

「隊長！ヤツです！Gです！Gが出現しました!!」

「なにい?!」

家は結構大変な状況のようだった。この後、彼らはGに苦戦を強いられ、丸一日たったのは、また別の話。

## デート♪デート♪byシア

ウイルの親に挨拶しに行くと、多額の報酬金を渡された。依頼報酬の数倍ほどの量に少し戸惑っていた。

「こんなに貰えねえよ…もつと少なくしてくれないか？」

俺はそう言った。だが、二人は金額を変えるつもりはなく、その金を置いて家へと帰っていった。

「はあ…金は貰うしかねえか…」

「別にお金で困ってるわけじゃないんだけどね」

「ううくん…どうするの？」

「…ん。今日中にいっぱい使う」

「えつと…ユエさん、お買い物に行く…とかですか？」

「…ん。レイトと一人一回のデート」

「…「それだ!!」」

「それでは今日、皆さん一人一回だけ我がマスターとデートですね。私は含まれますか？」

「含まれてるだろう」

「それじゃあ…あ、《じゃんけん》で決めよう！」

「俺に拒否権はなしなのか…」

そして数秒で決着がついた《じゃんけん》ではシア、ユエ、桜、ノイント、ミレディ、冬花ということになった。

「ふっふーん！私が一番ですう!!」

「シアに…負けた？」

「そんな…」

「シアがこんなに強いとは思わなかった…」

いや、シアは普通に【未来視】しただけじゃね？

「さあ、レイトさん！行きますよ!!」

「ああ、そこは別にいいんだが…シア、こっちおいで」

俺は手招きでシアを呼んだ。すると、シアがピヨコピヨコしながら俺のところへとやってきた。俺はシアの頭に手を伸ばし、そのウサミミを触った。

「ひゃわわわ?!／／／／」

「シア、お前さっきの戦いで【未来視】を使ったか？」

「へ?いえいえ、使ってませんよ!」

「そうか…なら、別にいい」

俺はシアの手を引つ張って街の中を探索することにした。

「あ、見てください!スイーツがありますよ!」

「食べたいのか?」

「食べたいですよ!」

「よし、なら好きだけ食べ。残ったら俺が食ってやるからな」

「本当ですか?!

」嘘はつかない」

そう言うと、シアが俺の手を掴み、店の中へと入っていった。店の中に入り、席に座るとシアはメニュー表を見てすぐに注文をした。

「なに頼んだんだ?」

「秘密です!」

しばらくして、シアの頼んだ物が来た。振り返って《ソレ》を見たとき、驚愕のあまりにメニュー表を落としそうになった。

理由はシアが頼んだ物、それは巨大なパフェモドキだった。地球では体が大きい人などが食べているイメージがある。それほど巨大なパフェモドキがあった。

「シア、本当に食べるんだな?」

「はいですよ!」

「なら…俺はそれを信じよう」

こんなパフェは冬花達でも食べないだろう。

「あ、レイトさん。こっちに向いてください!」

「ん?」

振り向く、スイーツが乗ったスプーンが近づけられていた。

「あ、あくん…／／／／」

シアがそうやってきたため、俺は口を開いた。すると、口の中にスイーツが入ってきた。甘すぎない気がするが、これはこれで美味しい。

シアのスイーツを見ると、スイーツは別腹という言葉が本当かのよ

うに、スイーツが残りわずかになっていた。

「すごいな…」

そして、食い終わって代金を払い、俺達は別の場所へと向かっていった。しばらく街の中を歩いていると、面白そうな物を見つけた。

「あ、レイトさん！あそこに海の生物が見れる場所があります！行きましょう！」

「ああ、ちょうど俺も気になっていた所だ」

水族館かよ。リヴァイアサンとかゲスラとかいないかな。

そう思いながらシアと一緒に水族館へと向かった。水族館の中は暗く、魚のような生物が沢山いた。

「わあ、すごいですね！小さい生物が沢山いますう！こっちの生物はハサミを持つてるんですね！こっちは…!!？」

「どうした？」

シアが何かの水槽を見て驚いていた。俺もシアと同じ水槽を見ると、そこには人の顔をした魚がいた。名前はリーマンというらしい。

「ん？人間の顔…魚…：シア、お前が見た人面魚ってコイツのことか？」

「そ、そうですそうです！こんな感じですよ！」

俺は水槽に近づき、人面魚に念話を送ってみた。

『なあ、リーマン…だったけ？…俺の声は聞こえるか？一応念話で喋ってるんだが…』

すると、人面魚は少し驚きながら俺の方へとやってきた。

『若えの、ただの人間じゃねえな？』

俺はリーマンと少し雑談をした。リーマンに俺のことを説明すると、急に泣き出された。

『なあ…リーマン、その水槽に革でできた袋を入れた。その中に入れてくれないか？』

『袋って…コイツか？なんのために？』

『魚ってのはな…こんなに小さい場所で泳ぐんじゃねえ、もっと広い場所で泳ぐんだよ』

リーマンが袋に入った瞬間、俺の魔力で作られたラドンのような鳥

が現れ、リーマンの水槽を壊し、リーマンが入っている袋を掴んで飛んでいった。

「じゃあ…おっちゃん」

「レイトさん、あの鳥さんはどこに向かったんですか？」

「海だろうな。さ、デート再開だ」

水族館を出て、服を買いに行こうとしたときだった。何かの生体反応を地下から感じた。

「シアー！」

「私にも引つ掛かりました！」

俺達は路地裏に入り、マンホールを開けて、下水道へと入っていった。

「す、凄い臭いですね…」

「吸うな。酸素マスクをやる。それをつけろ」

「はいですう！」

シアと一緒にその生体反応がある場所へと向かった。すると、下水道に子供のようなのが流れていた。シアとは違う亜人族のようだった。



零斗は親です？

シアとデートをしている最中に謎の生体反応を感知した。微弱だが、生きている。そして、俺達は感知したその生体反応のところへと向かった。そこは下水道でかなりの激臭がした。

「あ、レイトさん！見てください、あそこに女の子が流れています！」  
シアが指差した方向を見ると、シアとは違う亜人族の小さな女の子が流れていた。俺は近寄ってその小さな女の子を抱き上げた。

「んみゆ…？」

「あ…？」

そんな可愛らしい声がして、抱き上げた女の子を見ると、ジッと俺のことは見ていた。

「だれ…？」

「俺は零斗だ。お前の名前は？」

「…ミュウ」

「そうか。ならミュウ、さっさとここを抜け出すぞ。流石に…。」

グウウウウ

ミュウを見ると、腹の辺りに手を置いていた。

「出たら飯でも買おうか…」

来た道を帰り、地上へと出た。出てすぐ近くに焼き鳥の屋台があった。そこで一本だけ買い、ミュウに食べさせた。

「ミュウ、ゆつくり食べよ」

「はいなの！」

ミュウに焼き鳥を食べさせながら宿に帰った。宿に帰ってすぐにシアとミュウが風呂に入っていた。それと同時に冬花達が帰ってきた。

「おかえり」

「あれ、シアは？」

「風呂だ。風呂で保護した亜人族女の子を洗ってるはずだ」

「その保護した子をどうするの？」

「考えてなかったな…：…どうしようかな…：…《メツドルス》とかで時間

も限られてるし…」

ミュウについてみんなで考えていると、ミレデイが何か閃いたような顔で俺を見た。

「レイトがその子のパパになれば故郷に返さなくてもいいんじゃない？」

マジで言ってるのかこの金髪ロリ二号。ちなみに一号はユエだ。

ミレデイが言った事に驚いていると、シア達が出てきた。ミュウは少し濡れた髪のまま俺のところに来た。ミュウを見たミレデイが少し驚いた顔をしていた。

「海人族の子だったの?!」

「それがどうしたんだ？」

「あ、いや…ごめん。昔のことを思い出しちゃったんだ…」

ミレデイの過去と海人族にどんな関係があるって言うんだ…つか、ミレデイは何をやらかしたんだ？

「ミュウちゃんはパパはいるの？」

冬花?!そんなドストレートに聞くもんじゃねえだろう?!

「んみゆ…ミュウね、パパいないの…」

いなかったああ…!!

すると、ミレデイがミュウに近づいた。ミュウと同じ目線までしゃがんだ。

「じゃあさー…このお兄ちゃんがパパとかどう？」

「ぱば…？」

ミレデイに言われてミュウが俺の顔を見てきた。ミュウは少し考える素振りを見せて、俺を見てニツコリと笑った。

「パパア!!」

ミュウはそう言いながら俺の足に抱き着いてきた。それを和むように見ていた冬花達は《誰がママになるか決闘》を始めた。だが、始めて数秒でミュウによってその決闘は消し去られた。

「パパ…か」

初めての言葉のはずなのに、どこかで聞いたような言葉だ。

寝転びながら考えていると、ミュウが俺の腹の上に乗ってきた。す

ると、桜がちよつとしたお菓子をミュウに食べさせた。俺の腹の上で  
「ねえミュウ」

「んみゆ？」

「どうやってこの街まで来たの？」

「「「あああ!?!」」」

肝心なことを忘れていた。ミュウは姿だけでも判断できる海人族だ。本来、海人族は名前の通り海にいるはずだ。ここは海から近くない。逆に遠いはずだ。ここで母親と逸れる。なんてことはないはずだ。

「ミュウね、ママと逸れちゃって…変な叔父ちゃん達がママに合わせ  
てくれるって…そしたらこの街にまで連れてこられて…暗いところ  
に入れられて…そこにミュウと同じような子が沢山いて…上から  
らくしやつ? って声が聞こえて…怖くなって、逃げたの」

「その先で俺らと会ったってわけか」

落札。つまり、オークション会場のことだろう。ミュウと同じよう  
な子。奴隷オークションだろう。

「ここは…父親として仕事をするか…冬花達はミュウと一緒にいて  
くれ」

そして俺はワームホールを開き、イルワのところへと向かった。顔  
だけ出すと、イルワが椅子から滑り落ちていた。

「イルワ、今からこの街で奴隷を売ってる場所を潰すから、後始末頼ん  
だ」

「奴隷を売ってる…《フリートホーフ》か!」

「あ? あそこそんな名前なのか？」

「ああ…それならば…始末書も簡単だろう…」

「そうか。なら、潰したら戻ってくるから」

そう言つてワームホールを閉じた。閉じてすぐに《フリートホー  
フ》のオークション会場へと向かった。そこでは仮面をつけた人間が  
沢山いた。俺は一つの怪獣カプセルを起動して、ジードライザーで読  
み込ませて、空に向かってトリガーを引いた。

「来い。ギャラクトロン」

すると、夜空に魔法陣が現れ、そこからギャラクトロンが現れた。ギャラクトロンは降りてきてすぐに破壊活動を始めた。ギャラクトロンが全員の注意を引いている間、俺は亜人族達が捕まっているところへと向かった。突然入ってきた俺に少し驚いていたが、俺は関係なしに亜人族達の手足を拘束している鎖を壊した。

「お前ら、このワームホールの先に行け。そこで保護してもらえ」  
そう言うと、亜人族達はすぐにワームホールの中へと入っていった。そこへ仮面をつけた男のようなのが来た。

『テメエ！俺の商売を邪魔しやがって！このマグマ星人の邪魔をするとはいい度胸じゃねえか!!』

すると、右手にランスのような物をつけて俺に突き出してきた。横に避ると、後ろにあったコンクリートの壁に穴が空いた。

「チツ：ゼロ!!シエア!!」

人間サイズのゼロに変わると、マグマ星人が冷や汗をかいていた。『う、ウルトラマンだと?!ベリアル軍に滅ぼされたはずじゃなかったのか?!』

『は、そんなわけあるか!』

俺はマグマ星人に向かって走り、一本手前で飛んで殴った。マグマ星人はランスで防御したが、ランスが粉々に砕け散った。

『こうなったら…!!』

マグマ星人が巨大化した。俺も巨大化して、マグマ星人の前に立った。マグマ星人が何かを呼び出そうとした時だった。ギャラクトロンの髪の毛にあるクロウがマグマ星人の首元を掴んだ。

『ぎゃ、ギャラクトロン?!クソ！二体一とか卑怯だぞ!!』

するとマグマ星人が赤い玉のような物を空に掲げた。

「来い！ブラックキング！レッドキング！」

すると、オークション会場近くの瓦礫の下が光り輝き、そこからブラックキングとレッドキングが現れた。マグマ星人の手下のようだ。ブラックキングとレッドキングはギャラクトロンと俺を睨みつけていた。夜空の街で戦いが行われそうになっていた。

スファイアレッドキング？俺達の敵じゃねえな

マグマ星人と俺は真夜中の街で戦っていた。近くではギャラクトロンがレッドキング、ブラックキングと戦っていた。

『串刺しにして『エメリウムスラッシュ!!』なっ?!』

マグマ星人のランスを「エメリウムスラッシュ」で破壊し、回し蹴りで怯ませようとした。だが、マグマ星人は後ろに飛んで距離を取ってきた。

『まだだ!』

するとマグマ星人が何処からか先程と同じランスを取り出し、腕に嵌めた。

『いったい、幾つあるんだよ!』

『レッドキング、ブラックキング、何をやっている! さっさとその口ポットを破壊しろ!!』

マグマ星人の無茶な命令を聞き、レッドキングは怒ったのか、後ろからマグマ星人に体当たりをした。突然の不意打ちにマグマ星人はなんの対処もできずに倒れた。

『いってて……この、なにしゃがる!』

マグマ星人は反抗してきたレッドキングをランスで串刺しにしようとした。だが、レッドキングに片手で止められ、ランスをまた破壊されていた。レッドキングは無防備なマグマ星人に襲いかかった。

『ええ……これどうすればいいんだ……?』

そこへ、冬花と桜が変身して駆けつけた。だが、今の現状を見て、何がなんなのか困惑していた

『れ、零斗……これどういうことなの?』

『俺もわけがわからん』

俺らが話し合っていると、マグマ星人が白いスライムのような物を取り出した。

『ええい!……これと言うことを聞け!!』

『ギユワオオオオン?!』

マグマ星人が白いスライムをレッドキングの体に当てた。すると、

白いスライムがレッドキングの体を包んだ。すると、黄色い体だったレッドキングが真っ赤な体になり、白い突起物のような物が生えた。

『ギョワオオオオン!!』

声もさつきまでのとは違うくらい高い声になっており、レッドキング自体が変化したことがわかった。

『ハッハッハ!!これがス『ギョワオオオオン!!』ぐわああ!!?』

レッドキングはマグマ星人の首を握り潰した。マグマ星人は爆発して、消えていった。マグマ星人がいた場所にはランスが落ちていた。

『ねえねえ!絶対ヤバイよあの怪物!』

『ああ、俺でもヤバいってわかるぞ』

『どうする?』

『倒すしか…ねえよな!』

レッドキングがエネルギー波のような物を放出すると、ギョラクとロンとブラックキングが突然爆発して消えた。そして、周りには影響がなかったが、俺達には影響があるようで、少し風圧に押された。

『冬花、桜はアイツの注意を引いてくれ、俺は後ろからアイツを攻撃する!』

『わかった!』

『任せて』

すると、冬花と桜がレッドキングに向かって光弾を撃ち始めた。そこまで聞いていないのか、レッドキングは光弾を撃つ二人に向かって余裕があるように歩き始めた。俺はレッドキングの後ろ側に飛んだ。背中は白い結晶のよいな突起物が大量に生えており、捕まえようとしたら、大変なことになっていただろう。

『ギョワオオオオン!!』

少し驚いたような素振りを見せるが、エネルギー波を放出して、俺のことを吹き飛ばしてきた。吹き飛ばされた俺はマグマ星人のランスの近くまで飛ばされた。

『結構強いな……あ?このランス…』

俺はランスを拾い、自分の右手に装着した。

『零斗、この怪獣のパワーすごい……握り潰されそうだよ……!』

『ループになっても抗えないほどのパワー……流石にキツイ』

見ればレッドキングが冬花と桜の首を掴み上げていた。

『あ、ちよ、待ってる!!』

俺はレッドキングの後ろから【ゼロキック】をして、何とか注意を引こうとした。だが、レッドキングの皮膚は硬く、結晶もあってなのか、全然ビクともしなかった。

『なら……』

俺は一度レッドキングから距離を取るために後ろへ下がった。そして、レッドキングに向かって走り、一歩手前で飛んだ。そして、レッドキングの背中目掛けてマグマ星人のランスを突き刺した。

『ギョワオオオオン……?!!!』

すると、レッドキングの体、ちょうど冬花と桜の間を貫いた。レッドキングから離された二人は、変身解除して地面に着地した。そして刺されたレッドキングは爆発して消えた。消えたのを見て、俺も変身解除した。

「零斗、さっきのレッドキング……」

「ああ、かなり強かった。あのスライムみたいなのを研究する必要があるそうだな……」

そして俺達はミュウ達が待つ宿に向かった。ついてすぐにイルワが寄越したギルド職員と鉢合わせになり、イルワに物凄い報告書を書かせることになっていた。

閑話。《変威獣》と怪獣、その違いもわからない

（零）

私達は今日も《オルクス大迷宮》に来ていた。あの日、零斗が消えた日から、みんなは光輝の言うことを殆ど信じるようになり、零斗を倒し、冬花と桜を救うためと訓練に励んでいた。そして今日は《90》階層に向けて《89階層》を走っていた。

「みんな、止まって！」

突然、恵里がそういった。すると、全員が止まり、周りを警戒し、香織を中心に円状の陣を作っていた。

「……………」

いつまで経っても魔物が襲ってくる気配はなく、ただ静かな時間があるだけだった。すると、恵里が一つの岩の近くへと向かった。

「ねえ、貴方は魔物なの？」

恵里が突然誰かに話しかけた。すると、岩陰から黄金のワイバーン、異世界などでよくあるドラゴン、それを模した機械のような黄金の体を持つ何かが現れた。

『ギユウウン…』

恵里はその何かと会話をするかのように話していた。光輝達はそれが気に食わないのか、その龍を見る目が虫などを見る目と一緒だった。

「そうなんだね…貴方はゴールドバーンって言うんだね！」

『ギユウウン！』

「え、貴方は怪獣なの？そっか…君はお兄ちゃんの置き土産みたいなの《変威獣》だって?!恵里、今すぐ離れるんだ!!」え?うわっ?!」

「ちよ、光輝！」

すると、光輝が恵里の肩を掴んで、私達の方へと投げ飛ばした。私は投げられた恵里をキャッチした。そして光輝は聖剣を抜き、ゴールドバーンと呼ばれる子に向けた。そして、詠唱を始めて、ゴールドバーンを殺そうとしていた。

「だ、駄目!!」



恵里はその小さな体で光輝に体当たりをした。するとその小さな体の何処にそんな力があるのか、恵里が光輝を突き飛ばした。

「何を考えているの?!この子は私達が知っている怪獣じゃないんだよ?!」

「恵里、君が優しいのはみんな知っている。だが、《変威獣》は全て倒さないといけないんだ」

「この子は《変威獣》じゃない、怪獣だよ?!」

「何も変わらない。怪獣だろうと、無害であろうと、《変威獣》だ。全て根絶やしにしないといけない。これ以上人々を悲しませてはならないんだ!!退くんだった恵里!!」

光輝がそう言うけど、恵里は退かず、ゴールドバーンを守るように抱き締めた。すると、鈴や香織も恵里に賛同するように光輝の前に立った。

「なっ?!何をやっているんだ!!三人がやろうとしていることは自殺行為だぞ!!《変威獣》を守るだなんて、殺されるぞ!」

「そんなの知らない!私は…私達はこの子を守る!!」

「何を馬鹿な…」

はあ、これ以上はパーティーが目茶苦茶ね……零斗、どうしてゴールドバーンをこの迷宮に?

〜その頃の零斗〜

「あ、待てミュウ!髪は乾かせ!」

「はーいなの!」

「すっかりパパになってる…」

……………今の娘だれ?冬花と桜の娘なの?……………って、私は何を言ってるんだろう…誰も聞いてない…わよね?

「恵里!」

「離れないもん!!」

まだやってたのね…はあ、止めるしかないわね。

私はこれ以上はパーティーの壊滅に繋がると思い、恵里と光輝の間

に割って入った。

「雫……雫からも言ってくれ、《変威獣》を守ることがどんな悲劇を齎すか」

「雫！雫からも言ってくれ！怪獣と《変威獣》は違うって！」

「……………そうね」

私がゴールドバーンを見ると、わかってくれたか、そんな顔をする光輝が頭に浮かんだ。私はなんとなく、その顔に苛立ちを覚え、ゴールドバーンを少し撫でた。

「光輝、恵里の言うとおりの怪獣と《変威獣》は違うわ。漢字も意味も違うわ。恵里が言っているのは昔から存在する怪獣よ。光輝が言っているのは《チブセル症候群》の《変威獣》でしょ？なら、《変威獣》じゃない怪獣は殺さなくても別にいいでしょ」

「だが、どっちにしろ簡単に人を殺せるんだぞ!!人を殺してからじゃ遅いんだ!!今、やらないと！」

そこからまた恵里との口論が始まろうとしていた。だが、今は迷宮攻略が優勢とされ、口論の続きは迷宮後にされることになった。

## 閑話。魔人族襲来

く恵里く

90階層への階段を降りようとしていた。ここまでお兄ちゃん達の痕跡はなにもなし。そもそも《オルクス大迷宮》に向かったのかすら知らされてないけど。

『ギユウウンー!』

私だけ怪獣の言葉がわかるようで、ゴールドバーンが何を言っているのかわかる。

「うん、お兄ちゃんなら無事だよね…」

ゴールドバーンは私の肩で羽を休ませ、周りを警戒している。まるで、子を守る親のようだった。

「みんな、気をつけて!!」

階段を降り、目の前に広がっていた光景に思わず自分の目を疑った。魔物は一匹たりとも見当たらない。だけど、魔物の血が壁や地面に大量についていた。

「これって…」

「血…ね」

「魔物の血…」

すると、ゴールドバーンが唸り声をあげ、下への階段がある方を向いていた。

『ギユウウン…!!』

「ゴールドバーン?どうしたの?」

ゴールドバーンは暗い奥のなにかに警戒していた。

「雫、みんな、戻ったほうがいい!」

「ええ、そうね…なんだか嫌な予感が「駄目だ」光輝?」

この馬鹿勇者は正気なの?こんな大量の血があるのに、先に進むって言うの?」

「こんな大量な血だ。つまり、ここの魔物よりも強い魔物がいるってことだ。後々倒さなくちゃいけないんだ。だったら、今倒したほうがいい」

「駄目！ゴールドバーンがなにかに警戒してる。ゴールドバーンがこの先は駄目って「うるさい！《変威獣》の言っていることなんて信じるな!!」……ああもう！」

この勇者は本当嫌だ。言うことを聞くのも、話をするのも嫌だ。

「ゴールドバーン、お兄ちゃん居場所がわかるなら、このことを『ギユウウン!!』ゴールドバーン?!」

ゴールドバーンが突然、私達の前に出た。そして体の形を変え盾へと変わった。

「ゴールドバーン、何して…」

私が聞こうとした瞬間、何かの光線がゴールドバーンに向けて撃たれた。それを盾となったゴールドバーンが防ぐ。

「おや、面白そうなのを持つてるんだね」

ヒールのような足音と共に、奥から耳が尖った人、魔族が現れた。その後ろには光線を撃ったであろう魔物と見たことのない魔物が沢山いた。

「魔族…!!」

魔族は私達を見て、何か少し考えたあと、勇者である天之河に話しかけた。

「勇者は……あんたでいいんだよね？そこのアホみたいにキラキラした鎧着ているあんたで……もしかして違う？」

「アホ?!う、嫌い！魔族なんかアホ呼ばわりされるいわれはないぞ！それよりもなぜ、魔族がこんな所にいる!!」

「質問を質問で返さないでもらえる？まあ、私達の目的はあんたとその盾になってる怪獣よ」

煙の中から、ボロボロになったゴールドバーンが出てきた。私はすぐに駆け寄って、倒れそうになったゴールドバーンを支えた。

「ゴールドバーン、大丈夫…?」

『ギユウウン…』

「待ってて、私すぐにこの魔族を倒すから…」

「倒す？舐められた物だね…そこの怪獣を超える力を持つてるところちに、あんたらが叶うわけないだろう?」

「…何が目的？」

雫が私達の前に立って武器を向けた。

「へえ…：その勇者よりも話ができるようだね。話は簡単よ。そこ  
の勇者と怪獣、あとあんたらお仲間さんも一緒にこっち、魔人族側へ  
勧誘するためだよ」

「断る。俺達は王国を裏切ることなんてしない!!」  
「あっそ」

そう言うと、突然雫が横に飛んでいった。私達は何が起こっている  
のかわからなかった。壁にぶつかって地面に落ちる雫を見て、ようや  
く攻撃されたとわかった。

「雫ううう!!! よくも雫をおおおお!!!」

「へえ、あの女、雫って名前なのかい。いい名じゃない」

天之河が魔人族に斬りかかるけど、その前に手下である魔物に聖剣  
を止められた。

「■■■■、あの雫って女を捕まえな」

すると、発音がよくわからず、なにを言っているのか全くわからな  
かったけど、魔人族がそう言うと、奥から触手のような物が雫の体を  
縛り、暗闇へと引き釣りこまれた。

「雫ううう!!! 雫を返せ!!」

「返せ? 彼女はあんたの恋人かなにかなわけ？」

「そんなわけないだ「なら、もう彼女は私達の物だ」なっ?!」

「光輝! 今すぐ逃げるぞ!」

「龍太郎?! 何を言っているんだ?! このまま雫を置いていく気か?!」

「今のままじゃ叶うわけねえだろ!! 戻って、作戦を立て直すんだ!」

「だが…!!」

待って、この馬鹿二人は何を言っているの? 敵の前で作戦を考える  
ことを言っただけなの? バレちゃったよ? バレちゃったよ?!

「逃げようとしたってそうは『ギユウウン!!!』なっ?!」

ゴールドバーンが突然光り輝き、私達を包んだ。そして、気がつく  
と私達は85階層にいた。どうやらゴールドバーンが私達が逃げる手伝  
いをしてくれた。

「ありがとう…ゴールドバーン…」

すると、天之河が私達のところに来て、ゴールドバーンの首を掴んだ。「なぜだ！なぜ俺達をここに戻したんだ!! 雫が拐われたままなのに、なんでだ！……やっぱり怪獣なんて信じられない、コイツはあるとき殺しておけば!!」

天之河がゴールドバーンを持つ力が強まった。だけど、ゴールドバーンよりも強いためか、全く効いてはいなかった。だけど、このままにするのは良くないと思った私達は天之河を止めようとした。

「やめて！ゴールドバーンを虐めないで!!」

「やめてよ天之河くん！その子の首を離して!!」

「光輝くん！その手を離して!!」

「光輝！やめろ!!その手を離せ!!」

「みんな、何を言っているんだ！コイツが邪魔さえしてこなければ、雫を助けたんだぞ!!」

鈴は天之河に杖を向け、言った。

「何を言っているの！その前に私達は死んじゃったたかもなんだよ!! その子が助けてくれなかったら、雫に会う前に死んでたんだよ!!?」

「だが!!」

私はこの小さな体と勇気を振り絞って天之河に向かって飛び蹴りをした。すると、天之河はゴールドバーンから手を離れた。

「何をするんだ！恵里、君はいったい何がしたい」「もうやめる!」やめる? いったい何を? やめるんだ?」

私は決めた。お兄ちゃんがいない今、ゴールドバーンを守れるのは私だけ。そして、魔族に對抗できるのも私だけ、だから私はみんなに、特に鈴と香織に向かって深く謝罪をした。

「ごめんね、騙してて」

私が今、できることをやる。そう心に決めた。

## 閑話。 恵里の覚悟

く恵里く

私は鈴や香織、みんなに向かつて深く謝罪をした。私が何に対して謝っているのか、誰一人として気づいていなかったけど、私はゴールドバーンを連れて90階層へと向かった。私は86階層への階段を降りてすぐに、階段をゴールドバーンに破壊してもらった。理由は鈴達が降りてこないように、そして魔族が鈴達のところに行かないために。そして、各階層を降りては階段を壊して塞ぐを繰り返し、89階層までやってきた。すると、魔族がそこで待つており、私を見て少し驚いたあと、さつきと同じ笑みを浮かべていた。

「へえく…腰抜け勇者と違って、あんたは結構度胸あるようだね」

「…確か、貴方の目的は勇者とこの子…だよな？なら、雫を返して」

「悪いんだけど、これを嵌めちやつたから返せない」

すると、奥から禍々しいオーラを放つ首輪のような物をつけた雫が歩いて魔族の横へと来た。

「この首…嵌めた者の言うことをちゃんと聞く奴隷…なんだけど、不便なところがあったね…一度つけければ外せない首輪だったわけ」

「それじゃ…雫は！」

「死ぬまで奴隷…つてところだね」

私は今までの人生で一番後悔していた。私がつと早く来ていれば雫を助けられたかもしれない。でも、まだ何処かに方法があるのかもしれない。私はそう思った。

「ウジュイカ・レエガミヨ!!」

私は杖を強く握り、そう唱えた。すると、私の体から魔力が放出され、それが集まって幾つかの怪獣が生み出された。

『ピポピポピポピポピポ…ゼエツトオーン!!!』

電子音のような声のあとに響く絶望を掻き立てるような声。

『アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!!』

笑い声のような不気味な声

『ギャハハハハハハ!!!』

狂ったかのように笑う声。

『パオオオオオオオオオオン!!』

聞くだけで身の毛がよだつような声。

『ファオオオオオオオオン!!!』

さつきとは少し違う声。

そして最後に。

『ゴガアアアアアアアアアアアア!!!』

王の目覚め。

さあ、みんながいるときは出せなかった私の本気之力、お兄ちゃんに見せたかった本気之力を見せてあげる。

く魔人族く

私は今、目の前の光景に目を疑った。目の前の人間の女、いや女だった何か。が怪獣を何体もしようかんした。しかも、どれも噂程度でし



か聞いたことのない物ばかりだった。

来たれば星を壊すと言われている《宇宙恐竜ゼットン》。空の上の世界にしかないと言われている《虚空怪獣グリーザ》。現れれば地上を地獄に変えると言われている《閻魔獣ザイゴーク》。文明を滅ぼし、世界に闇を齎す《邪神ガタノゾーア》。星のコアに触れ、世界を混沌で包むと言われている《邪神メガロゾーア》。そして、怪獣達の王として君臨する《怪獣王ゴジラ》。

目を疑いたくなるのは普通だ。なぜならグリーザは空の上でしか現れない。それを目の前の女はこの迷宮内で召喚したのだから。

く恵里く

グリーザ、怪獣として扱っていいのかわからないけど、そもそも出現することなんて不可能。なら、なぜできたか。そもそもこの世界の空間が歪んでいるからだ。だからここに出せた。

『さ、みんな！ 雫を助けるために手を貸して!!』

そう言うと、怪獣達が声を上げて私に手伝ってくれることを言った。そして魔族が従えている大量の魔物に総攻撃を始めた。

「チツ…あんたはあの友人を殺しな！ 他の奴らはあの怪獣達を!!」

魔族族がそう言うと、向こうの魔物も怪獣達に向かっていった。そして、雫が私のところに来て、剣を振ってきた。

「えり…に…げて…おね…がい…!」

微かの聞こえた雫の声は弱々しく、今にも消えてしまいたいそうだった。

『嫌だ！ 雫は仲間、親友なの！ その親友をそのままにしておくなんて、私にはできない!!』

「でも…これは…もう外れない…!」

私は雫の剣を叩き折って、雫に向かっていった。

『私ができなくても、お兄ちゃんや冬花ならできる!』

「そんな根拠、どこにあるっていうんだい!」

『根拠なんていくらでもある! 私とお兄ちゃん達が出会ったのは偶然なんかじゃない! 私は《チブセル症候群》、人間にはできない力を、可

能性を秘めてる!!』

すると、私の体が光、なにかに変わった。

『これって…』

『ギユウウン!!』

『《グリッドナイト》？それが…これの名前なの？』

ゴールドバーンがそう言うと、私の背中に引っ付いていた。すると、ゴールドバーンと意識が繋がり、体の底から力が沢山湧いてきた。

『《グリッドバーンナイト》…それが私達の新しい姿!!』

そこから私達は雫を助けるために魔人族と魔物と戦った。

（鈴）

恵里を追いかけて下の階層へ向かおうとしたけど、階段が塞がれて、下へ行こうにも行けなかった。恵里が謝った理由、聞かないでお別れなんてしたくない。

閑話。お兄ちゃん早く来て

く恵里く

私は雫を連れて上の階層へ逃げ込んだ。私の力はまだ未熟だから、あの怪獣達は魔人族が連れてきた一匹の怪獣に全て倒された。

「はあ…はあ…雫、大丈夫…？」

「だ、大丈夫…恵里こそ…大丈夫なの…？」

「うん…でも、ここもすぐに見つかる…」

私は周りを見た。周りには隠れるものが何一つなく、あるのは柱のような物だけだ。上への階段は私が壊したからもうない。

こんなことなら壊すんじゃない…帰りのこと忘れてたよ。

「どこか…どこか隠れる場所は…」

すると、下層への階段から雫に向かってレーザーが撃たれた。私はなんとかレーザーを防いだ。

「うっ…」

「恵里、大丈夫?!」

レーザーを防いだのと同時に、私の体に強い衝撃が来た。その衝撃だけで私は倒れそうになった。だけど、この攻撃が来たということだけは。

「なんだい、この先の道がないじゃない…あんたがやったのかい？」

「…キラキラの勇者は？それにそのお仲間さんは？」

「…知らない」

私が剣を魔人族に向けたのと同時に、後ろの階段があつた場所が爆発した。煙の中からキラキラの鎧を着た勇者、天之河さんがやってきた。メルドさん達もいた。遠藤くんだけ見えない、いつものことだけだ。

「雫、恵里大丈夫か!？」

ああ、もう、このバカは…はあ、いつもいつも。

「まさか、標的がそつちから来るなんてねえ」

魔人族の狙いは天之河さん、それと雫だろう。

「お前達！急いで上の階層へ逃げろ！ここは俺達が抑える!!」

そう言い、私達の前にメルドさん達が来て、魔族と魔物に剣を向ける。そして私達は上の階層へと逃げていく。雫につけられた首輪に気づいた天之河さん達が何か騒いでいた。だけど、今はそんなことを言っている場合じゃない。

「メルドさん達じゃ時間稼ぎにならないかも……そう言えば、遠藤くんは？」

私は見えない遠藤について鈴に聞いた。

「えつとね、地上に助けを求めに行ったんだけど…影が薄いから誰も気づかないかも…」

そんな心配そうにする鈴とは違い、天之河さん達は雫に取り付けられた首輪を外そうとしていた。

「駄目！それを外さないで！」

「何を言っているんだ恵里！雫はこれで操られるんだろう？なら、これを外せばいいじゃないか!!」

そう言い、また天之河さんが首輪に触れようとしたときだった。下の階段からメルドさんが飛んできた。鎧はボロボロで、体は傷だらけだった。折れた剣が地面に突き刺さった。

「メルドさん!!」

下から魔族と魔物も上がってきた。

「良くもメルドさんをおお!!」

天之河さんは怒って《限界突破》して魔族の魔物を薙ぎ倒さんと聖剣を強く握りしめた。私も剣を構えた。雫の首輪が光った。すると、刀を持って私達と敵対するように前に立ち、刀を構えた。

お兄ちゃん、早く来て

## 久しぶりの《オルクス大迷宮》

新しくミュウが旅の仲間に加わってから数日後、俺は《ダイナストライカー》を運転していた。冬花と桜は後ろの座席でミュウを挟む感じで座っており、その後ろでテイオとミレディ、ノイントがいる。そして助手席でユエが外を見ている。

『ヒヤッハー！ですう!!』

通信機から発せられる声はシアの声だ。俺は横目で外を見た。すると、シアが二輪バイクのような物を乗り回していた。

「…映画の撮影か？」

「パパあ！ミュウもあれ、あれやりたいの！」

「……今度シアに頼んでみるか」

すると、後部座席から冬花が身を乗り出してきた。

「ねえねえ零斗。この近くに《ホルアド》があったよね？ちよつと寄つて、恵里の様子を見に行かない？」

そう言われて、《ホルアド》という存在を思い出した。《ホルアド》のある《オルクス大迷宮》の百階層、俺達は一度も見たことない。なぜならショートカットをしたからだ。だが、そんな時間はない。しかし、恵里が心配だ。

「……よし、《ホルアド》に——」

行こうと言おうとしたときだった。《ホルアド》、しかも《オルクス大迷宮》の中から《コスモイーター》と同じエネルギーを感じた。

「キャッ?!」

「なんじゃ?!」

考えるよりも先に、俺は進路を変え、《ダイナストライカー》を《ホルアド》に向かわせた。恵里が心配だ。もし、《コスモイーター》と同じなら恵里達人間は一瞬で塵と化すだろう。

「シア、進路を変えるぞ。目的地は《ホルアド》だ！急げ!!」

『は、はいですう』

俺達は全速力で《ホルアド》へと向かった。恵里が無事であることを祈るしか、今できることはない。

そして《ホルアド》の近くで《ダイナストライカー》を戻し、ギルドへと向かった。理由はイルワが《何かあったらギルドにこの手紙を渡してくれ》と言っていたからである。

俺はギルドの扉を開け、《ホルアド》のギルドの中に入った。ギルドの中はギロリとした目付きの男が沢山いた。

「ひやうツー・パパあ!!」

ミュウが近付いて来た男に睨みつけられ、顔を伏せて泣いてしまった。

俺はその睨みつけて来た男の顔を掴みあげ、近くのテーブルに叩きつけた。すると、テーブルが真つ二つに割れ、男が動かなくなった。

「おい、ここのギルド長に会いたい」

「え、あ、あの…《ステータスプレート》を…」

そう言われ、俺は《ステータスプレート》を受付の人に渡した。

「え、《金ランク》?!…あ、も、申し訳ございません!」

「いいから、早くギルド長に会わせてくれ!」

この時間が勿体ない。今もヤツの仲間が《オルクス大迷宮》で暴れているかも知れないのに。

そんな時だった。ドアが開かれ、真黒い服を着た人間が倒れ込んできた。

「い、今《金ランク》って言ったか?!」

「…誰だお前」

名も知らぬ冒険者。俺は無視してギルド長を纏うとした。だが、この冒険者には微かだが《オルクス大迷宮》の匂いが着いていた。そしてこの冒険者はボロボロだ。

「その声…まさか夢咲か?!」

俺の名前を知っている。つまり、何処かで出会ったことがある。

俺はなんとか思い出そうとしたが、思い出せなかった。

「俺だ!遠藤だ!遠藤浩介だ!」

「え?!円堂○?!」

「ちげえーよ!遠藤浩介だ!」

そこで影が薄いで有名遠藤を思い出した。

「頼む！一緒についてきてくれ！」

「は？嫌に決まってるだろう」

「頼む、俺達が今までにしてきたことを考えればそうなのかもしれない。だけど、みんながピンチなんだ！」

「……詳しく話せ」

そこで遠藤から《オルクス大迷宮》で起きたことを聞いていた。

「それで…夢咲が…」

夢咲、それは恵里のことだろう。俺はそこまで聞き、遠藤の体に触手を巻き、ギルドを飛び出した。

「テイオ、お前はミュウと一緒に残ってる!!」

そう言い、俺達は足早に《オルクス大迷宮》の中へと入った。

「一気に20階層まで開ける!!」

腕をL字にして、真下に向かって光線を撃った。そして光線で出来た穴に飛び降りる。もちろん、遠藤もだ。そして、20階層について周りを見渡す。あの時と同じ、《ロックマウント》が擬態している岩がある。

俺は《ロックマウント》を無視して、あの日と同じ、壁を壊して寶石を見つけ、そして罫を発動させる。

眩い光が消えると、橋の上にあった。遠藤達も一緒にいる。そしてあの部屋にいた《ロックマウント》も全ている。そこへ魔法陣から《ベヒモス》が召喚される。

「邪魔だアア!!…ゴガアアアアアア!!」

魔力を帯びた咆哮を上げると、《ロックマウント》、《ベヒモス》、《トラウムソルジャー》が消えていった。

「え、え…」

その事に驚いている遠藤を無視して俺達は目的の90階層まで急いだ。

く恵里く

今のこの状態を二文字で表すのは簡単だ。

絶望

目の前の魔人族と怪獣は笑っている。

『この俺様、滅亡集合体《テストロイジエノ》がそんな怪獣モドキ共で倒れるわけねえだろお！主、悪足掻きはやめとけ。もうすぐ、《メツドルス》様が人間族を食らうんだからな！ガハハハ!!』

そう言い、《テストロイジエノ》が自身の角に赤黒いエネルギーを溜めた。

『安心しろ。痛みは一瞬だ。それが終わったらテメエらは一緒の場所に行ける』

嫌だ…お母さん…冬花…桜…そして

「——お兄ちゃん」

誰にも聞こえないほどの小さな声でそう言った。そして《テストロイジエノ》の角からエネルギーの斬撃が私達に向けて放たれる。

そこで走馬灯のような物が見始め、周りの物がゆっくりになっていく。もう諦めているのかもしれない。

雫が私に何か叫んでいる。

鈴も何か言ってる。

だけど、何も聞こえない。



バアンツ！

何かが破裂するような音が聞こえた。そして、いつまで経っても痛みが来ない。恐る恐る目を開けた。そこには光り輝くバリアを片手で張り、《テストロイジエノ》の攻撃を防いでいる人の背中があった。『なんだと…?!』

バリアが消え、その人は私を優しく抱き上げて、凸凹ではない、平らな場所に連れてきてくれた。その時、見えた顔で私は誰なのかハッキリとわかった。

「…お…に…い…ちや…ん」

「恵里、喋らなくていい。そこで待ってろ」

振り返り、さっきまで私がいいた場所まで行った。

『誰だテメエ!!』

「…零斗…恵里のたった一人の兄だ!!」

高々とそう言った。

## V S デストロイジエノ

急いで来て正解だった。もう少し遅かったら、恵里が帰らぬ人になってしまふところだった。

「…お…に…い…ち…ちゃん…」

「待ってる恵里。その怪獣野郎ぶっ飛ばして、すぐに地上に連れて行く」

「ま…って…し…ず…く…が…!!」

そう言われ、雫を見た。すると、謎の首輪のような物をつけていた。俺は少し不思議に思い、雫に近づいた。

「何だお前の首輪。新しいファッションか？」

「ち、ちが…」

「それは奴隷の首輪さ」

すると、魔族の女が自慢げに話し始めた。

「それは一度着ければ死んでも外れない奴隷の首輪。本来は勇者に使う予定だった「お、なんだよ。外れるじゃん」……は？」

俺が少しエネルギーを込めて触れると、首輪が弾けとんだ。雫はやっと自由になったためか、地面にペタンと座った。

「雫、大丈夫……って、どうした?!」

雫が急に泣き始めた。そこへ冬花達が来てくれた。

「零斗、なんで雫泣かしたの?」

「いや、俺じゃなくてだな?!」

そこへ俺達を離れさせるように、赤黒い斬撃が飛んできた。

『この俺様を無視するとは、いい度胸だな!!』

「お前は《コスモイーター》と同じ滅亡集合体……ってことか?」

その姿は白色の角、白い目、大きな翼と小さい翼の計4つの翼、そして青黒い体に、尻尾の先は何か掴めそうなハサミとなっている。

「形状はデストロイアの完全体……だが、関係ないか。はああああ!!!」

俺は《レト》へと変身する。その姿に《デストロイジエノ》は少し驚いていた。

『ハハハハ…やはり、お前がそうだったか!!!こりやあいい!!久々の《お

前との殺し合いだ！カトレア、巻き添え食らっても文句言うんじゃねえぞ!!』

『待ちな！あんたは私の部下なんだから勝手な行動は——!!』

魔族の女がそう言うが、《デストロイジエノ》は魔族の女を無視して俺に向かってくる。地鳴りを起こし、迷宮自体が揺れる。

『お前らは後ろの奴らを守っててくれ!!』

そう言い、《デストロイジエノ》と打つかる。ぶつかったせい、迷宮の床にヒビが入る。そして俺の触手を掴んでくる《デストロイジエノ》の顔に熱線を放った。防ぐようなことはしなかった。触手が離され、俺は後ろに飛んだ。

『ハハハハ!!あそこの倒れている女が出す怪獣モドキよりも、百倍いわ!!』

すると、《デストロイジエノ》の顔が再生する。どうやら、コイツは尋常じゃない速度で再生するようだ。長期戦に持ち込むのが一番だろう。俺はすぐに【超振動波】を放つ。

《デストロイジエノ》が右手を大きく上げ、【超振動波】に向かって下ろす。すると、【超振動波】が消えた。それに驚き、少し動揺する。それを見た《デストロイジエノ》が笑った。

『ハハハハ!!やはり記憶はないようだなあ…不思議か？不思議だよなあ!!俺はなあ！右手で何もかもを破壊でき、左手では生物を作れるんだよ!!こんな感じでな!!』

そう言い、左手を迷宮の床に突き刺す。すると、床に亀裂のような赤い光が溢れるように出てくる。そして、そこから怪獣が現れる。

『コイツらは俺のカワイイ部下共だ!!行け！《ジエノゴモラ》《ジエノレッドキング》《ジエノパンドン》《ジエノメガギラス》《ジエノギドラ》《ジエノガイガン》《ジエノギャオス》!!』

どの《デストロイジエノ》が出した怪獣は全て原種と姿が異なり、白い目、背中には悪魔のような小さな翼が生えている。

『後ろにいる人間共を皆殺しにしてこい!!』

《デストロイジエノ》がそう言う、怪獣達が俺ではなく、俺の後ろにいる冬花達に向かって歩き出した。

「冬花」

私は零斗が滅亡集合体を相手にしている間、クラスメイト達を回復させていた。桜、シア、ユエ、ミレディ、ノイントは魔族の魔物を倒すことに専念していた。

「冬花！無事だったんだな！」

この人…えっと、名前なんだっけ？そもそもこんなキラキラした鎧を着てる人なんて居なかったと思うんだけど…あとで桜に『私知らない』…念話で話してくるほど暇？

突然、桜が私に念話で話しかけてきた。

『暇、ちよつと《神花》で振ったら後方の魔物まで体と胴体が別れちゃったから』

流石私の妹ね！

『そんなことより、メルド団長はどんな感じ？』

任せて！内蔵が幾つか消えてるけど…私の回復魔法なら、心臓の1つ2つ消し飛んでも、治せるわ！

『回復魔法じゃなくて蘇生魔法』

「桜も…無事だったのか…：…良かった！夢咲に操られたときは心配したよ！まさか、自力で抜け出し、あんな凄い強い味方も連れて来てくれるなんて!!」

あれ、そう言えばお母さんにこの力のこと、どう伝えればいいのかな。そこは零斗がなんとかしてくれるよね！

「冬花、1つ聞きたいんだけど、今、あの魔族が連れてきた《変威獣》と戦っている彼はいつたい誰なんだい？」

「誰って…零斗だけど？」

「……………は？」

「あ、メルド団長の回復が終わった！桜、そっちの状況は大丈夫？」

『なんか敵の怪獣が来た』

「わかった！今すぐにそっちに向かうね！」

すると、謎のキラキラした鎧を着てる人が私の腕を引っ張ってきた。その奇妙な行動に、私は少し恐怖を感じた。

「君は後方支援が得意なはずだろ！なんで前線に行こうとするんだ  
!!」

「え、なに急に……ちよ、怖いから離してください！」

その人を突き飛ばし、私は桜達がいる方へと向かった。

く零斗く

なんか、後ろに熱線撃ちたくなつたが、冬花達がいるため、やめた。  
念話によると、怪獣達は桜達が食い止めるとのことなので、俺は目の  
前の《デストロイジエノ》に集中することにする。

そして俺は【マガ迅雷】を《デストロイジエノ》に向かって撃った。  
煙で《デストロイジエノ》の姿が見えない。

『……そろそろ温まってきたなあ……それじゃあ………』

本  
気  
出  
す  
か

## ハロウィン限定の番外編！

今日は10月31日だ。そう、ハロウインの日だ。お菓子を上げる日だ。この日、多くの子供は嬉しいだろう。だが、上げる側にとってはキツイのである。

「レイト、今日はお菓子を貰える日。雫が言ってた」

「ああ………そうだったな。もうそんな時期か……」

「レイトさん！私もお菓子欲しいですう！」

「うむ、主よ！妾も欲しいのじゃ!!」

「さんせー!!」

「私もいいですか?!」

「あら、私も欲しいわね」

「ミュウもなの!!」

「私は冬花様のお菓子が欲しいです」

「ふっふっふ……!安心してノイント!今日は絶好調の日だから、美味しいお菓子が作れるよ!!」

冬花がそう言うと、ノイントがキラキラした瞳で冬花を見た。冬花を見るノイントの目はまるで、人間が神様に手を合わせる姿に少し似ていた。

「いいか、お前ら。お菓子を貰うときはこう言うんだ。《トリック・オア・トリート。お菓子をくれなきゃイタズラしちゃうぞ》だ。いいか? 忘れるんじゃないぞ?」

「「はーい!」」

幼稚園児かなにかか?

そこへ母さん達がやってきた。母さん達の両手にはお菓子がいっぱい詰まった袋があった。雫達が両手いっぱいのお菓子を降ろし、俺にもたれかかってきた。

「うう……疲れたよお!!」

「そうだな。雫、よく頑張ったな」

甘えてくる雫の頭を優しく撫でた。

みんなが母さんにお菓子を貰い、各々食べ始めた。

「レイト、レイト」

ミレデイが俺の服の端を引つ張ってきた。振り返ると、棒状のお菓子を咥えていた。ミレデイの後ろにはミレデイが咥えているお菓子の袋がある。そこには激辛という文字が書いてあった。なんの躊躇もなく、そんなことをするミレデイには少し、お仕置きが必要だ。

「あくん」

そう言い、お菓子を近づけてくる。俺はそのお菓子を手で取り、ミレデイの唇に俺の唇を重ねた。

「ん?!」

突然の事で頭の処理が追いつかなくなったのか、顔を赤くして倒れた。

「お、おい……ミレデイ大丈夫か?!」

「ううう……」

顔を手で隠しているミレデイが今日一番可愛く見えた。それを見た冬花達がやきもちを焼いたのか、顔を膨らませてるヤツが多かった。

「零斗の正妻は私達なのお!」

「ミレデイ、そこだけは譲れない」

そんな二人を横目に、俺はミレデイが持っていたお菓子を食べた。袋には激辛と書いているが、そこまで辛くなかった。というか全然辛くない。

「れ、零斗……」

「ん?どうしたんだ母さん」

「あ、あくん……」

母さんが俺の前で口を開けた。雛鳥が餌を求めているかのように大きく口を開けた。俺は手元にあったお菓子を母さんの口の中に入れた。

「ひゃ?!かりやい、かりやいよ零斗?!」

「あ、マジ?ご、ごめん……」

《ひゃ》って……可愛いな。

俺はこのお菓子を誰にも食われないように、早々に食べてしまっ



た。そう、食べてしまった。すると、母さんが顔を膨らませて、少し怒っていた。

「零斗……………」

「は、はい…」

「トリック・オア・トリート。お菓子くれなきやイタズラ」

「……………は？」

「言う前にもお菓子貰ったけど、あれはノーカン。はい、お菓子」

母さんはニコニコした笑顔でそう言った。どうやら、言う前に貰った物はノーカンらしい。そして、今の俺の手元にお菓子はない。それはつまりなにを意味するか。

俺が振り返ると、冬花達も同じように笑顔だった。

「零斗」

「あ、はい」

「二」「トリック・オア・トリート」「二」

どうやら、俺は今日、恋人全員からイタズラをされるようだった。

イタズラが終わった瞬間に倍返しをしてやる!!

そう思っていたが、イタズラの度合いが可愛くて、倍返しはやめになった。

## V S ジェノ怪獣（前編）

く桜く

零斗が戦ってる怪獣が出してきた謎の怪獣達はあまりにも強かった。生身の私達じゃ太刀打ち出来ない。

「ユエ達は下がって！」

「ここは私達が！」

「…ん。後ろは任せて」

「トウカさん、サクラさん、お願いします！」

私達は《ループジャイロ》を使って《ウルトラマン》に変身した。私は《水のクリスタル》を使って《ウルトラマンブルー（アクア）》、冬花は《火のクリスタル》を使って《ウルトラマンロツソ（フレイム）》へと変身した。

『行くよ！桜』

『わかってる！』

私達は体を低くして、怪獣達に向かって走った。冬花が《角のある怪獣》の角を持ち、《レッドキングに似た怪獣》に飛び蹴りをした。

私は《両手が鎌の怪獣》にドロップキックをした。でも、両手の鎌で防ぎ、すぐに鎌を振り上げる。

『桜、大丈夫？』

『大丈夫…！そっちに集中して！』

私は額に手を当てて《ループスラッガーブル》を出し、鎌を防ぐ。すると、横にいた《三つ首の怪獣》の2つが私の腕や脚に噛み付く。

『うっ…このっ！』

《ループスラッガーブル》を振り上げた時だった。横から鎖のような物が腕に絡みつく。鎖の先は《両手鎌の怪獣》だ。見れば、お腹の辺りのギロチンが動いていた。

『桜！』

2つの赤い刃が鎖を焼き切った。飛んできた方向には冬花がいた。鎖が外れたことで、腕が自由になった。噛み付いている首に《ループ

スラッガー』を振るう。すると、噛み付いていた首が外れた。

『ハアツ!!』

《三つ首の怪獣》に《アクアジェットブラスト》を放とうとしたときだった。後ろから何かに突進されて、前に倒れる。ぶつかってきたのは《虫に似た怪獣》だ。

見た瞬間、残像が出来るほどの速さで消えた。周りを見渡すけど、姿が見えない。

『わっ!?!』

突然横から攻撃される。振り向くと、一瞬だけ《虫に似た怪獣》が見えた。物凄い速さで移動してるため、今まで認識出来なかったのだろう。

『スピードにはスピードが…!!』

《水のクリスタル》から《風のクリスタル》に変えて再変身する。変身してすぐに、私自身を竜巻で包み込んだ。すると、《虫に似た怪獣》が竜巻に弾かれて、その姿を見せる。

私は姿を表した《虫に似た怪獣》を「ストームプレッシャー」で包み込んだ。

迷宮の天井まで届くこの竜巻からの脱出は不可能だと、私自身は思っていた。

すると、竜巻の中で、何かが周っていた。見ればあの怪獣で、竜巻とは逆方向に周っていた。そして、私の竜巻は《虫に似た怪獣》が起こした逆回転の竜巻で相殺された。

それを見て、私は転がるように怪獣達から離れる。冬花も怪獣達から離れて、私と同じところまで戻ってくる。

『大丈夫? 冬花』

『うん、大丈夫…桜こそどうなの?』

『なんとかね…』

『それで、ここからどうするの?』

『……アレをやろう』

『……そうだね。あの時は活躍できなかったけど…今回は違うもんね!!』

私達は立ち上がり、《極クリスタル》を持ち、高々と言った。

『私達の手で倒してみせる』

《弾ける！最強の手！！キワミクリスタル！！》

『セレクト！ クリスタル！』

《兄弟の手を一つに！》

『纏うは極！金色の宇宙！』

《ウルトラマンルーブ！》

『ハアア！！……今度こそ、倒す！！』

金色に輝くオーラを放ち、怪獣達に向かってそう叫ぶ。

## V S ジェノ怪獣（中編）

く桜（ループ）く

一つの体になった私達はみんなを守るように立つ。《ループコウリン》を持ち、怪獣達に振るう。するとさつきまではいっさいダメージが入らなかつた怪獣が退けぞる。

『凄い…！』

また腕に噛み付こうと近づいてた《三首の怪獣》の真ん中を残した左右2本の首を切り落とす。怪獣は悲鳴のような声を上げて倒れる。

『まずは1体！』

『倒せたわけじゃないけど無力化に成功』

次にと迷宮内を飛び回っている《虫に似た怪獣》、撃つ落とすのも、狙うのも難しい。目で追えないスピードの怪獣相手にどう立ち向かうか考えていると、後ろから声がした。

『ゲホッ…【グリッドナイトサーキュラー】!!』

振り返ると恵里が怪獣に向かって光輪を投げた。光輪は私達では追えないほど早い怪獣を真っ二つに切り裂く。

『ありがとう恵里！』

恵里にお礼を言うと《両手鎌の怪獣》が斬り掛かってくる。いち早く気付いた私が足にエネルギーを集め、回し蹴りで怪獣を叩き落とす。

怪獣は壊れた機械のような声を出しながら淡い光となって消える。

その光は零斗と戦っている怪獣の元へと戻っていく。

『残りは二体…』

すると残りの二体の怪獣が突然形態変化する。《角がある怪獣》はさつきよりもゴツゴツした姿に、《骸骨の怪獣》は赤く、腕が太くなつた。

『何が変わったかわからないけど、桜となら勝てる気がする！』

『フラグ？』

『やめてよそう言うこと言うの！』

そんな話をしていると、赤い怪獣が太くなった両腕で地面を叩く。

すると地割れが発生し、そこからマグマが吹き荒れる。それにままと掛かってしまった私達は恵里がいる後ろの方まで飛ばされる。

『うう…：…いたい…：…』

「ん！桜、冬花大丈夫?!」

『これぐらい…：…!』

「ユエさん、私達も援護しましょう!」

そう言ってユエが魔法を怪獣に撃つ。だけど余り効いている様子はなかった。私達はすぐに立ち上がって怪獣に体当たりする。

『あの攻撃、怪我してる恵里達にあたってたら…：…!』

『火傷じゃ済まない』

『うん、止めよう!』

《ルーブコウリン》で怪獣の攻撃を防ぎながら近付く。だけど、いつの間にか後ろに周っていたもう1体の《角がある怪獣》に攻撃され、体勢を崩してしまったところに《髑髏怪獣》の拳が振り降ろされる。

『ぐう…!!』

間一髪のところでなんとか抑え切る。そこに後ろから光の刃が怪獣に振り下ろされた。振り返るとあのキラキラした鎧を着た勇者さんが怪獣に攻撃していた。だが怪獣は気にもせず、私達に攻撃してくる。

「ゴ…：…ルド…：…バーン…：…二人を助けて」

恵里が小さくそう言った。すると恵里の近くにいた黄金の怪獣が片方の怪獣に体当たりをし、壁まで飛ばした。

『凄い…：…!』

『手伝ってくれるの?』

私がそう言っているとゴルドバーンという怪獣は翼を広げて高々く鳴いた。

『なら、ここからが本番だね』

ゴルドバーンと背中合わせになって怪獣を見る。カラータイマーが鳴る。変身解除が近付いている警告音、そして正念場と告げる音が迷宮内に響いた。

## V S ジェノ怪獣（後編）

〜桜〜

『そういえば怪獣に名前ってあるのかな？』

『確か：ジェノゴモラ、ジェノレッドキングって言ってたはず：』

『そっか。なら早くこのジェノ怪獣を倒して零斗のところにつ！行くこ  
う！』

『うん！』

先に攻撃を仕掛けたのはジェノレッドキングだった。その大きな腕で大きな岩を持ち上げ、投げる。

『凄い怪力：：！』

『えつと：：、ゴールドバーン！ジェノゴモラをお願い！！』

冬花がその名を呼ぶとゴールドバーンが目にも止まらぬスピードでジェノゴモラへと体当たりする。

『ジェノゴモラはゴールドバーンに任せて、私達はこつちを！』

ジェノレッドキングとの取っ組み合いが始まる。二人でも押し切られそうになるほどジェノレッドキングは強大な相手だ。

〜恵里〜

「エリリン、大丈夫？」

「鈴：：ごめん、肩貸して：」

「うん任せて！」

鈴に支えながら立ち上がり、桜達を見た。押されてる。あの怪獣には疑似とは言え何体もの怪獣を倒された。

「：：：僕、行くよ」

「エリリン?! 駄目だよ休まないと！」

「行かないと桜達が負けちゃう！そしたらみんなアイツに殺される！桜も冬花も、鈴達も！でも桜達は家族なんだ！」

「エリリン：：」

「鈴、ごめんね。僕のたった二人の親友である君を殺させない！僕の家族は殺させない！守る、その為に僕はこの力を使うよ！」

僕は高々く手を挙げ、その名を叫んだ。

「来て！ギガバトルナイザー！！」

すると黒い雷と共に黒く長い棍棒が現れた。僕はそれを両手で持ち、その呪文を唱える。

「【ウジュイカ レエガミヨ】！！」

今度こそ、みんなを守るために！

地面を割って出てきたのはただの怪獣ではなかった。

「EXゴモラ：EXレッドキング：」

すると僕の体の中から紫色の光が溢れ出る。

『まだ手助けは必要か？』

頭に響くこの声がなんなのか、僕はすぐにわかった。

「グリッド：ナイトさん」

『助けるのだろうか？家族を』

「っ！はい！！」

そう言うのと紫色だった光が赤に変わり、内側からエネルギーが溢れ出てくる。すると僕はグリッドナイトへと変身していた。

『どうだ？気分は』

『大丈夫！何処も痛くない！！EXゴモラ、EXレッドキング！二人を助けて！！』

二匹にそう命じるとEXゴモラはジェノゴモラを、EXレッドキングはジェノレッドキングを相手に戦う。

『桜、冬花。大丈夫？』

『大丈夫！押されてたけど…』

『恵里も大丈夫？』

『大丈夫だよ！だから今はあの二匹をどうにかしよう！』

『乱入した二匹は恵里が？』

『うん、僕の手！凄いでしょ！』

『話し合いは後にしろ。EX相手に優勢を取るか…！！』

ナイトさんに言われて見ると確かにEXの二匹が少し押されていた。すると冬花達がジェノレッドキングに飛び蹴りをして体勢を崩させた。

僕はゴールドバーンと合体してグリッドバーンナイトとなり、ジェノ



ゴモラに体当たりをする。

『エネルギー配分を間違えるな！小さなミスが大きな事故に代わるぞ！』

『はい！「グリッドナイトサーキュラー」！』

ジェノゴモラの皮膚は思った以上に硬く、僕の攻撃もEXゴモラの攻撃も弾いていた。

『なんとか…そうだ！EXゴモラ！「EX超振動波」！』

EXゴモラの超振動波がジェノゴモラの皮膚を貫き、そのままジェノゴモラを撃破する。

同時に桜達がジェノレッドキングを撃破する。どうやら至近距離で「ボルテックバスター」という光線技を使っただけらしい。

『やったね！恵里！』

『うん、僕もようやくみんなに追い付け』うおおあああ?!』お兄ちゃん?!』

すると奥からお兄ちゃんが飛んできた。

『アイツ…マジかよ?!主の命令とか関係ねえ！コイツ、自分の欲のために戦ってるのか?!』

奥からやってきたデストロイジェノは刺々しく、禍々しかった。

『悪いな、俺にブルトンは効かないんだわ。流石にわかるかお前でも、この力があれば主にも勝てる!!』

そういうデストロイジェノの手には赤色の石が持たれていた。

『もしかして…お兄ちゃん、青い石ある？ブルトンの』

『持つてるが…あれそんなに硬くないぞ?』

『いいから、貸して』

お兄ちゃんから青色の石を貰うとデストロイジェノに向かって投げられる。するとデストロイジェノは撃ち落とすこともせず、それを両手でキャッチした。

『あ?んだこれは…』

すると赤と青の石がブルトンへと変わる。慌ててブルトンから手を離すが遅く、デストロイジェノはブルトンによって何処かへ飛ばされた。

『呆気ない終わり方だな…もつと戦いたかったのに…』

『もつとやろうとする」と結構な時間掛かるよ。そんな暇ない』

そして僕達は人間の姿に戻る。

「エリリン！」

「え？うわっ鈴!？」

鈴が僕の顔に飛び込んできた。

く零斗く

恵里達が鈴に抱き着かれてる間に俺は迷宮の奥へと向かった。

「こんなところに隠れてたか、カトレア」

「へえ、見つけるの得意なわけかい…なんのようだい？」

「いや、ふと思つてな。何故お前達魔族がここにいる？」

「それをわたしが話すと思うか「ならいいわ」」

変形した腕でカトレアの首を切る。切ったあと、俺は桜達の下へ向かう。

「あ、零斗く！」

「…今日の晩御飯どうしようかな」

「こんな戦闘のあとに？」

「…駄目？」

桜達の頭を撫でようとする」と突然刃が振り下ろされる。

「やはり君は最低だ。同じ故郷の人を奴隷にし、操り、自分の物にするなんて…」

「……………」

だれだっけこの人…

## V S ジェノ怪獣のその後

く零斗く

ただ言いたい

誰だっけこの金ピカの鎧着た人。

「君は最低だ。人を奴隷にし、自分の欲を満たすために使うなんて!!」

奴隷…? 欲…? ……あ、冬花に料理<sup>食</sup>全般<sup>欲</sup>任せてることか?

「お前には関係ない。行くぞ」

「待て! まだ話は終わっていない!! 桜と冬花を解放しろ!! その後ろにいる彼女達もだ!!」

そういう金ピカに桜と冬花は首を傾げた。

「解放しろって…わたし達なにも縛られてないよ?」

「…いや《変威獣》の力に縛られてるよ冬花。わたしもだけど…全体的に能力値が上がったせいで少し力入れただけでスプーンが弾ける」

「桜そんな悩みがあったの?!」

「スプーンって弾ける物?」

「多分圧力がどうかで…いやでもそうはならんでしょ」

「あと夜寝る時に寝相が悪い冬花と零斗のせいでこの前布団が破けて寒い」

「ごめんなさい!!」

桜に冬花と一緒に土下座をする。

「ちよ、ちよつと待って…三人は一緒に寝てるの?!」

誰かがそういう。その間に桜は迷いもせず<sup>に</sup>答えた。

「昔からずっと一緒に寝てる」

「昔って…いつごろ?」

うーんと唸って考える桜に変わって冬花が答える。

「150年前!」

「お前は何歳だよ!! 15年前だ!! 少なくとも物心がついたときから寝

てるわ!」

少なくとも物心がついたときから一緒に寝ている。それだけは覚えてる。

「物心ついたとき…?」

「あ?」

金ピカさんが何故か震え始めた。

「お前は!そんな小さな頃から二人に毒牙を向けていたのか!!最低だ!今すぐに二人を解放しろ!後ろの方々も全員だ!!安心してくれ桜、冬花。俺が必ず君達を自由にして見せる!」

素晴らしい満面の笑みで二人に手を差し伸べる。

ええ…

『この人…なにか勘違いしてる』

『というか怖いよ…』

そうだな。怖いな。

俺は二人の前に出て金ピカの手を弾く。

「断る。家族を何処の馬の骨とも知らんヤツに渡す気はない。それに勝手に近付かないで貰えるかな。俺の仲間に」

「仲間だって?!奴隷にして連れ歩いてるくせじ仲間だって?!ふざけるな!俺が勝ったら彼女達を君の呪縛から解放しろ!!」

金ピカは聖剣を構え、詠唱を始める。

「:わたし達が零斗の呪縛から解かれるってなに?」

「さあ?あ、零斗わたし達は帰るから」

そう言つて冬花と桜はみんなを連れて宿まで戻つていった。

「え、応援は?」

「マスターなら余裕かと…」

「そうだけでもだな…!」

「光輝やめなさい!彼は…わたしを助けてくれた恩人よ!」

「だけどコイツは…《変威獣》は人類の敵なんだ!!」

めんどくさくなくなってきた俺は金ピカの魔力を0にし、催眠魔法をかけた。

「ちよ、光輝?!」

「大丈夫だ。ただ寝ているだけだ」

「それならいいけど……ねえ零斗くん」

「ん？」

「ありがとう。わたしを助けてくれて」

「…気にするな。こうしてデカイ怪我也せずに生き残っているんだからな」

そう言っただけ俺達も冬花達の後を追って宿に向かった。道中変な連中に絡まれたがボコボコにし、何事もなく宿に帰ることが出来た。